
消えた王妃と白銀の騎士

arco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた王妃と白銀の騎士

【NZコード】

N5445N

【作者名】

arco

【あらすじ】

よくある異世界トリップもののその後の話です。元の世界へ帰った女子高生本人は出てこず、残された異世界の住人たちの間で話は進みます。

子供の頃から良く知る国王に呼び出された主人公の女性騎士はともない頼み」とをされる。「異世界へ行く自分の代わりに王となつてほしい」と。

国王の元婚約者である姉とその夫の騎士団長や侍女を巻き込んで、突然の災難に振り回されるしか能のない主人公の明日はどうちだ！

初小説・初投稿です。

生あたたかい眼でみていただけることを切に願います。

国Hの私心（前書き）

生ぬるい表現しかできませんので、タグは念のためです。固有名詞は音楽用語ですが、音楽は一切関係ありません。出てきません。あしからず。

国王の乱心

1・国王の乱心

幼いころからの付き合いで、気心の知れた人だと思っていた。

もちろん、相手との身分の差はよくわきまえていたし、何より忠誠を誓った主君であるのだから対等な関係ではない。だが、幼友達としてあちらからも親しくしてくれていたのでその思いは一方通行ではなかつたはずだ。子供時代が終わるとソナチネの彼への気持ちは敬愛と、何より恐怖へと変わつたが。

今、目の前で地面に膝をつき、肩を落とした背中を見ているとよく見知っているはずだという自負は急速に消えていき、一体どうすればいいのか見当もつかない。まさか彼と自分との間にはこんなにも深い遠国にあるといつ神話の時代に神々によつて作られた大地の大裂け田ほどの大溝があるとは知らなかつた。

ソナチネが立つのは、王室の私的な領域であるブリックランテ宮・王族が生活するための宮殿・の中でも隅の隅、野趣あふれる草花が自然のままに伸びたという風情の素朴な庭園であり、目の前の彼、ペザンテ王国の国王・アレグロが過ごすには少々寂しすぎる風景だ。同じ宮殿の庭でも南にあるグラントディオーソ庭園は宮殿という言葉にふさわしく、幾何学模様に整えられた生垣と薔薇やカトリアなど美しい花々によって華やかに彩られているのだから。

国王アレグロは見た目だけを語つても完璧という言葉でしか表せない。青年神のような美しい顔立ち、目は空のような澄んだ水色、黄

金に輝く髪はゆるやかにうねり、肩口のあたりで切り整えてその麗しい顔を飾っている。背は高く、均整のとれた体にはほどよく筋肉がつき、とまあ簡単にいふと、世の乙女の理想と妄想をこれでもかと詰め込んでみました という容姿だ。

人柄も（これまでソナチネが知るところでは）国王として何よりも国民を労わる慈悲深い政治を心がけ、また不正を行った官吏や貴族には厳しく対処することでも知られておりそいつた相手と対峙するときのアレグロはまさに鬼神の」とき迫力を發揮していた。それでいて誠意を持って仕える者にはその温厚なまなざしと言葉でねぎらうことも忘れない。だからこそソナチネはそんな彼を人としても国王としても尊敬してやまなかつた。

だが、彼が跪いているかの人のために建てられたといふ碑と、あの、彼女の飾らない率直な人柄のことを考えるとやはりここにふさわしいかもしねない。今はもういない、彼女を偲ぶには。

彼女が彼のそばから消えて二月ほど経つた。彼女はソナチネにとても友達・畏れ多いことだが彼女のたつての願いでそう呼ぶ・であつたので偲ぶ思い出はたくさんある。その思い出を分かち合うことが自分にできること、と思い定めこの極秘の護衛任務の最初の一項目を臨んだものだ。

なのに

今日も聴きたくない声が、言葉の羅列が聞こえる。できれば耳をふさぎたいが、建前上、ソナチネは彼の護衛なのでそんなことはできない。

「覚えているだろ？」「トーネの声を。聴いているだけで心が震えるあの声…妖精のささやき声とはあのようなものをいうのだろうな。

「トネが何かねだつたら全てきいてやらなきやといやむしろ叶うべきだと思つたよ。おねだりなんて滅多になかったが」

「どうして彼女の手を放していられたんだろう。一瞬でも放さずに四六時中手を繋いでいたら今も彼女はここにいたかもしれないのに…。手といえば彼女の手は美しかつた。コトネは楽器を演奏するため手を大事にしていたと言つていたな。あの白くほっそりとした手を与えられた私は世界一の幸福も手に入れていたんだ…」

「コトネのあの艶やかな魅惑の黒髪をナデナデすると私の心のどこかが温かくなるんだ。あの感覚、それまではそんなものがあることすら知らなかつた…。コトネは私の知らない扉を開けてくれたんだ。忘れられない…」

「こうじつた思い出話？妄想？（もしくは呪い）を護衛という役目で傍を離れることを許されず、ただひたすら垂れ流されるソレを強制的に延々と聞かれるようになつて二月半が経つた。国王陛下は政務で忙しいので相手をするのは夕暮れ前の一時間ほどだが、それは日課のように毎日のこととなつてゐる。ただの思い出話としてきくにはあまりにも…甘いというか、重いというか、氣色悪いというか。彼女本人がきけばもしかしたら気持ちが盛り上がるのかもしれないが第三者の立場で聞かされるのは非常に居心地が悪くむず痒い。聞き流せればいいのだが、時々返事を求めてきやがるのだコレは。

これまでソナチネが抱いていた彼への敬愛や恐怖、憧憬は最初の半月が経過したころには雲散霧消した。同じ言葉を繰り返しているだけなら（それはそれで精神の異常を疑つたかもしれないが）耐えられたかもしれない。だが彼が彼女思う言葉は尽きることがないしかし毎日違うセリフがその麗しい口から飛び出してくるのだ。今では、

消えてなくなつた敬愛ではなく役目への義務感のみがソナチネをこの場に踏み止まらせている。

ナデナデのぐだりで全身を虫が這いつぶつな感覚に襲われたソナチネはそのまま扉の向こうに行つてしまえばいいのに戻つて来なければいいのに、と本氣で祈つた。

黒い気持ちに覆われた一瞬のうち、それまでの忠誠心をなんとか思い出し、恥じた。

忠誠心の方を。

ソナチネはペザンテ王国の第一王國騎士団に、いまは五名所属している女性騎士の一人である。当時の王太子の、現在の国王陛下の幼友達として選ばれるくらいなので彼女自身も生まれは由緒正しい貴族だ。ついでに一歳上の姉は田の前のへたー違つた国王陛下の元婚約者だ。

そんな立場のソナチネが騎士となるまではいろいろと糺余曲折があつたのだが、彼女がこの道を志したその理由は、敬愛する（今は残念なことになつてゐる）国王陛下に剣をもつて仕えたいと願つたためだ。そのはずだつた。

「　　とこらのはじうだらうか？」

いつしか己の分を忘れ、この背中を蹴り倒してしまいたい、といつ内なる切望と戦つていたので、その背中から久しぶりに自分へと言葉がかけられたことに、ソナチネは一瞬気がつかなかつた。

護衛についているのはソナチネ一人ではないが、ほかの人員は彼が人払いをしているので、少し離れたこちらからは目には付かないところにいる。だから今の言葉もソナチネ一人しか聞ける範囲おらず、当のソナチネも聞いていなかつた。無礼を承知で聞き返すほかない。

「恐れながら、陛下。もう一度おっしゃつていただけますか？」

いつのまにやら彼は、膝をついたまま振り返つてこちらを見ていた。

「すぐには承服できないのはわかる。だがこれしかないのだ 嘘でも冗談でもなく私の心の底からの願いだ。私は真剣だ、頼む、受けてくれ。」

ソナチネが話をきいていなかつたため聞き返したことがわかつていないのか、アレグロは自分の命令？申し出？が受け入れられなかつたと勘違いし、きちんとこちらに向き直り真剣な顔で懇願している。今にも手をつかんばかりに。

いくら主君の願いでも、真剣に頼まれても、聞いてもいことを「わかりました」と言えるほどソナチネは盲目的ではない。今は特に。だから彼の態度にあわて、自分も彼の前に膝を着き、もう一度ききかえした。

「失礼ながらきいておりませんでした。陛下。申し訳ございません」

そう言つと、ソナチネが熱心に自分の話に聞き入つてゐるものだとも（オメデタクも）信じていたのか彼はかすかにムツとした顔をしたが、きいていなかつたものは仕方がないと思い直し、先ほどの己の言葉を繰り返した。

「真剣な話だ。そなたに、私のあとを継いで国王になつてほし。」

「は？」

聞き返すべきではなかつたのか、いやそもそも本来なら近衛兵の仕事である国王の護衛など断つていれば・・・

国王が発狂したのか、それとも「真剣だ」と叫ぶながら冗談をいつこなつてしまつたのか・・・

わざわざまな思いがソナチネの胸に浮かんだ。
この時間をなかつたことにはできないのだらつか。

国王の亂心（後書き）

書くのは楽しいのですが、素人の拙い文でお世汚しになつたら申し訳ございません。
読んで下さったことに心から感謝いたします。

アモヤヤのせなし（福井県）

異世界トコッパーのストーリーをもつて、雑にまとめてある。「」ぬ
んなさい。

そもそものはなし

2・そもそものはなし

三年前のことだが、コトネこと成沢琴音は突然このペザンテ王国に現れた。（琴音の世界では「いせかいとりっぷ」というそうだ。）琴音は国王アレグロの私室（もつと詳しく言うと寝室のベッドの中、無論彼が寝ているときに）に現れた。不審者として尋問されたが、当時の王国を歴史上最大の危機にさらしていた魔族の侵入を憂いた神官長による「神子の召喚」の儀式で呼び出された神子であることがすぐに判明した。

神官長や国の重鎮たちはこそって彼女に魔族の掃討を依頼した。まだ16歳だったという彼女は当然とか全てを断り続け、むしろ元の世界に返してほしいと懇願した。その身勝手な依頼に怒りもした。だが、神子の召喚の依頼条件である魔族の掃討を成し遂げなければ帰れないこと、彼女一人を行かせるわけではないことを懇切丁寧に国王アレグロが説明すると、しぶしぶ折れた。

その後一年ほどで見事に自分の（ムリヤリ押し付けられた）仕事を成し遂げた琴音だったが、本人が期待していたとおりすぐには元の世界へ帰れなかつた。無事王都に帰還した後も、凱旋パレードを終えて神官長の祝福を受けた後も。「国境を越えてやつてくる魔族の侵入をなくすこと」が召喚の条件であったので、彼女の力を借りて国王が魔族との間に「国境の設定と不可侵条約の締結」が成立させた時点で彼女は速やかに元の世界に戻れるはずだつた。神子の召喚は王国の歴史の中でも珍しいことだが前例がないわけではないのでこれは異常なことであることがわかつた。

当然琴音は怒り狂つた。発端である神官長に詰め寄ると、神官長はその地位を降りた。怒りの矛先に（無責任にも）あっさり辞められてしまうと、それ以上追求する気が失せてしまったのか、全てどうでもよくなってしまったのか、元の世界に帰る方法を探すこともやめ、彼女はふいに滞在していた王宮の部屋から姿を消してしまった。国王アレグロはあせり、國中に彼女の搜索を命じた。この頃には心の底から彼女に惹かれていたのだ。

* * *

このあたりで、そもそも事の起こりの語りが終わっていればソナチネにとつてはまだ救いがあるのだが、残念なことにまだ続きがある。

* * *

姿を消して約三ヶ月後、琴音はアレグロの搜索網とは無関係に発見された。彼女が仕事を得た王都にある小さな大衆食堂へ宫廷に仕える文官が偶然立ち寄ることで見つかってしまったのだ。王都は彼女がいる可能性が一番高かつたので1000人体制でもつて探していったのだが、みな黒髪黒眼を目印にしており、金髪カツラをかぶるという単純かつ手軽な変装でおもしろいようにダマされたらしい。

そこからのアレグロの努力は涙ぐましかつた。国王自ら琴音の元に赴き、王宮へ帰るように説得を始めた。毎日。いわく「彼女が家へ帰ることができなくなつた原因は王国に、ひいては国王自身の不甲斐なさにあるのだから、彼女の生活の保障と帰還するための方法を探るという責任を果たさせてほしい」とのこという内容で。（彼女を発見した文官は「詭弁だ…連れて帰りたいだけだろ」とつ

（ぼやいた）

半年ほど説得し続けると、意志の固い琴音も（「」の「」の片鱗を見せ始めていたアレグロの偏執狂さに根負けして）ようやく折れた。（「ストーカーにほだされたみたいで嫌だなあ…」と彼女がぼやいていたといないとか）

（余談だがソナチネの姉でアレグロの婚約者であったソプラノは、このことを知るとさっさと婚約解消を申し出た。「これでやっと廻しの彼のところへ飛び込めるわ」と。）

フリーになつたしこれで堂々と口説ける、と思つたのかアレグロはそれまでの遠慮（していたのか？）をかなぐり捨て、積極的に行動を開始した。もともと男前で誠実な態度をとつてきた彼への琴音の中でのポイントは（不思議なほど）高かつた。王宮の一室を与えられ、学生だからと教師をつけられ、こちらの世界の歴史やその他礼儀作法・教養を身につけ始めた彼女を相手に、最初に直球で告白して即効フラれると、次には俺様態度で迫つてみたり、あるいは伝説の木の下に呼び出し告白してみたり（彼女曰く「どこのギヤルゲー…ていうか古い」）、また、ちょっと冷たくした直後に頬を赤く染めつつ「べつ別に好きじゃないんだからなつ！」と強がつてみせたり（彼女曰く「今度はツンデレ？引き出し多いわねー」）。

さらに半年ほど経つた頃、もともと悪くは思つていなかつた上に、迫られること自体がおもしろくなってきたのか琴音はついにアレグロの正式なプロポーズを受けた。彼は何をどう勘違いしたのか、紐で繋いだコウモリを連れ、首には一ーン一ーンを連ねた首飾り、黒いマントをはおり、両手には十字架と聖水、そして相手の首筋に口付ける「彼女の世界の求婚の作法と信じ、実行した。退治する側だからされる側だが、判然としない彼の奇行がプロポーズだと知ると、

彼女は爆笑し涙を流しながら頷いた。

「もしかしたら私は明日にでも、突然もとの世界に帰ってしまうのかもしないのよ？私の召喚条件は満たされているんだもの。あなたはそれでもいいの？」

「だったらなおさら、一分一秒でも長く一緒にいたいんだ。約束するよ、君がどこに行ってしまっても、私の妻は君一人だ。」

そう、たとえ琴音が式の前夜、元の世界へ突然帰ってしまうたとしても

そもそものはなし（後書き）

読んで下さる奇特な方がいたことに感謝します。

姉の見解

3・姉の見解

「ノノちゃん、陛下のバカがまたひどくなつたよー」

前置きもなくいきなり泣きついできた妹の姿に姉・ソプラノは「こりや相当追い詰めらてるな…」とため息をついた。呼び名も口調も幼いころのものに退化してしまっている。自分よりも随分と背の高い妹は、そう簡単に泣くようなヤワな娘ではないのに。

ブリックランテ宮の庭で起こつた国王の突然の乱心に呆然としていたソナチネは、彼が他の護衛とともに宮殿の建物内へと戻つていつた後もしばらくその場を動けなかつた。ハツとしたのはいつの間にか日暮れの時間となつた庭園のどこかでカラスが「カア」と鳴いたためだ。ソナチネの現在の勤務は日中の国王の護衛なので、このあと近衛の詰め所で今日の報告書を書いたら仕事は終わる。先ほどきちんと引継ぎできなかつたことは気になるが、国王本人が何も言わなかつたので大丈夫だろう。

勤務が終わつたあと、騎士団の宿舎に帰らなかつたソナチネは、姉の嫁ぎ先であるエネルギー家の屋敷を訪ねたのだ。

似ていよいよで似ていない姉妹である。一人とも燐然と輝くクセのない銀髪に大きな蒼い瞳、よく似た美しい顔立ちをしているが与える印象がまるで違う。

ソナチネは髪を耳の辺りで切りそろえており、筋肉のついたすらり

とした長身はどこから見ても強く凜々しい女騎士だ。顔つきにも鋭いものがある。

対して、ソプラノは長い銀髪を華奢な背中にサラリと流した、美しい儂げな深窓の姫君だ。妹と違い、華やかで柔らかい線の美貌を持つ。

二人はコン・フォーコ公爵家の姫君なのでソプラノの方が正しい姿だろう。性格の全く違う姉妹だが、昔から仲は良かつた。

「で、何があつたの？説明してくれたいとわからないし、だいいちあなた不敬罪よ。たとえ事実でも口にしてはいけないわ。なるべくなら

泣くばかりで要領を得ない妹を落ち着かせ、よつやく話を始めた。

「なるほど…ふうん、そうきたか」

何があつたのか事の経緯を聞きだしたソプラノは訳知り顔でうんうん頷いた。妹が意味不明な国王陛下の趣味？呪詛？に付き合わされていることは以前から独自の情報網で掴んでいた。ただ、なにぶん意味不明なのと、現在ソプラノは王宮での地位も役職も特に必要としておらず、夫であるレント・エネルギー第一騎士団長に知らせても「特に問題ない」というばかりなので、この極秘情報は使い道もなく持て余していたのだ。

「どうしましょー? どうやつたら陛下は元にお戻りになるでしょうか…」

一方、頼りにしている姉にこれまで極秘で誰にも相談できなかつた内容をぶちまけてしまえたソナチネは、若干罪の意識を感じながらもホツとしていた。どの道こんな重要な話をソナチネが姉に黙つて

いられるわけもない」とはアレグロも知っている。

この姉妹、体力はあってもほんの少し頭の回転の鈍い妹ではなく、未来の王妃として厳しく躰けられ賢くしたかに成長し、亡父が命じていた国王との婚約を権謀術数の限りをつくして見事に解消してみせた姉の方が、（今も昔も）主導権を握っている。

その美しく細い指先を、あごにあてて姉はのたまう。

「そうねえ…私が今言えることは、諦めなさいってことかしじ…」

「は？？へ？？」

本日一回田の予想外に再び言葉がでないソナチネ。

「女王は王国の歴史上でも初めてじゃないわ。悪くないと思つわよ？」

「正直、陛下が本格的に発狂する前に王位を継承しておいた方が無難よ。あなたの王位継承権の順位は決して高くはないんだから」

「あちらからの申し出なんだし、三ヶ月もあつたんだから準備は整つたってことだわ。最終的な用意ができたからこそあなたに話したんでしょう。おそらく

「つちよ、姉上。何で」

ほんの少し頭の回転の鈍い妹は話しつについていけていない。
それでも容赦なく、真実に近い推測を姉は話す。

「つまりね、ソナチネ」

姉は妹の、自分と同じ蒼く澄んだ瞳を見据えた。

「陛下はコトネを追つて、彼女の世界へ行くつもりなのよ

「コトネが帰還した後、魔術師長が連日王宮で何かを研究していたそうよ。陛下に命じられてね。たぶんコトネの世界に渡る方法を探つていたんでしょう。まったく…それができるなら最初からコトネを帰すためにやればいいのに。誠実そうな顔してホント最低。よっぽど返したくなかったんだわ。（ま、私もコトネに黙つてたけど。逃げられちゃ困るわ私が。）」

「行つたら帰つては来れないのよ。たぶん人一人を送り込む方法しかないんだわ。帰りがあるならコトネをさらつてすぐに一人で帰つてくれればいいんだもの」

「ようするにあのバカ、いや陛下、あ、やっぱりバカでいいか。バカは国を捨てる気なんですよ。で、代わりの王」と

「は つ…！…それがなんで私つ…！」

うん、姉にもキミの気持ちは痛いほどわかる。
だからそのバカ力で肩を握り締めないでほしい。お姉ちゃん妊婦な
のよ。

姉の見解（後書き）

読んで下さる方が一人でもいたらしいなあ、と投稿しています。
ありがとうございました。

三者三様の夜 そのいち

4・三者三様の夜 そのいち

ソナチネはあの後、聰明な姉の衝撃的な考察を聞きながら、なかば機械的に夕食まで頂いてしまった。義兄であるレント・エネルギー口第一騎士団長は在宅していたはずだが、話していた内容が内容だけに、姉妹水入らずにしていてくれたらしい。食事の終わりの方には、話題は生まれてくる初子のことや団長とのノロケ話など、姉の現在の関心事へと変わつていったのだが。食事が終わるやいなや、耐え切れずソナチネは姉の屋敷を辞した。

夜も更け、ソナチネは王宮の第一騎士団の宿舎の中に与えられた己の部屋に帰った。現在、国王直々の命令でソナチネは近衛隊に属し彼の護衛任務にあつたつてているのだが、本来彼女は義兄が団長を勤めるこの第一騎士団の騎士だ。入り口の詰め所や娯楽室から何度か同僚に声をかけられたが、生返事しか返すことができなかつた。ソナチネの部屋は一人用なのだが、相室の同僚は勤務中らしく誰もいなかつたので、灯りもつけずに寝台へ靴を脱いで上がり、膝を抱えて座りこむ。

どう考えても無理だ。自分が王となつて国を統治するなど不可能に等しい。今までソナチネの生きる道は、守るもののために自ら剣をとつて戦い己を盾とすることにあつたのだから。政事のことは何一つわからないし、人の上に立つ器でもない。認めたくはないが、21歳にもなれば自分の頭の程度などよくわかっている。姉のような知性も（悪賢さも）ないし。

これまでさんざん陛下の奇行にドン引いてきたが、彼をバカになどしてはいけない。早くに先の国王を亡くし、まだ子供の年齢である

17歳で王位を就いた彼は、若いながらも手堅い治世を行ってきたのだ。その頃のソナチネはとくに、騎士になるために見習いとして第一騎士団へ入団し、他の少年達につまはじきにされながら必死で新しい生活になじもうとしていたので、幼馴染の彼がどんなに苦労して足場を固めていったのか少しも知らなかつた。

また、こんなポつと出の女騎士を国王にすることを周囲が認めるはずもないのだ。自分のような無知な人間が上に立つのでは、確実に国は混乱する。魔族の侵入という国難が去つてまだ一年ほど、これ以上民を不安にさせてはいけない。

五回ぐらい同じ思考をループし、時間は深夜を大きくまわった頃、剣だこで硬くなつたその手を握り締めソナチネは腹を決めた。

やはり、断ろう。むしろなかつたことにしてしまおつ。国王の前ではシラを切りとおす。これしかない。できるはず、いや、やらねば。考えすぎて、姉のせつかくの忠告や考察はすでに頭から抜けていた。

やつぱりそはいかないことをソナチネが知るのは翌日のことなので、単純な彼女はこれで安らかな眠りにつくことができたのだった。

たぶん、もうちょっと悩んだ方が、いい。

三者三様の夜 その二十九（後書き）

お時間を割いていただき、ありがとうございます。

三者三様の夜 その六

5・三者三様の夜 その六

ソナチネが一人、思考のループをさまよつてゐるところ

その姉も広い夫婦用の寝台の中で妹に降りかかつた災難（考え方によつては僥倖なのだが）とその元凶について思考をめぐらせていた。寝つきのいい夫は隣ですでに熟睡状態だ。

（……あのこに国王が務まるとはカケラも思えないんだけど）

あの幼馴染の変人国王がどんな手を打つてくるのかわからない。元婚約者だが、まわりの者たちが思つていたほど、二人の仲は打ち解けたものではなかつた。婚約中はその地位を差し引いたとしても、周囲が羨望の眼差しを向けたほど見た目にはお似合いの一人だつた。婚約を交わしたのは一人が8歳の頃、死んだ父が強く薦めた話で身分も年齢も丁度よかつたことと、幼くしてすでにソプラノの美貌と聰明さが有名だつたのとでトントン拍子にまとつた。早くから馴染ませようとしたのか、婚約が整つた後に妹と一人でよく王宮に上がり、王子だつた彼の遊び相手をさせられた。この頃から活発で屋外で体を動かすことを好んだ妹は、王子とその他の男の子の遊び相手達に混じり、木に登つたり、「冒険」と称して王宮内を駆けずりまわつたり、抜け道を見つけて王宮の外に王子と一緒に出歩いて大玉玉をくらつたりしていた。が、自分はというと、男の子に混じつて外に遊ぶなんて野蛮なことできるもんですか！と、将来の姑である王妃のもとを訪れ、苦笑する王妃付の侍女から行儀作法を学んだりしていた。…かわいげのない子供だつた。

思春期に入り、遊び相手ではなく婚約者として一人で会うようになると、とたんにきまずくなつた。それまで妹を介していたためか、二人で何を話せばいいのかわからなかつたのだ。一人とも頭が良いし共通の興味がないわけでもないのに、いつも不思議と会話に詰まつた。ソプラノは10代前半にして社交辞令の天才であつたし、彼の方もそのあたりの教育は不可欠なのだから話の接ぎ穂が見つからないような失態を見せるはずがなかつた。気がついた頃には、彼と会うことそのものが重荷になつていた。

（今思い出してもあの重苦しい空氣はトラウマだわ…）

夫と出会つてからわかつたことだが、王子と自分は恋をしたことなど一度もなかつた。人間らしい暖かい会話をしたことがなかつた。一生を共にする人なのだから距離を近づけなければ、とあせればあせるほど言葉が空回りしていつた。

婚約解消し、周囲の期待がはずれホツとした後になって、彼との間にあつたあの重苦しい空氣の正体を理解した。重かつたのは二人の間にあるものではなく、周囲の期待・羨望・嫉妬：外野から向かれる感情だつた。将来の王妃として自分を鍛えてきたつもりだが、その努力はいつしか婚約者のためではなく周囲に応えるためのものに変わつていたのだ。そんな彼女の様子に彼も気づいていたのだろう。うまくいくはずがなかつた。

結婚式は一人が国の成人年齢である18歳になつたとき行われるはずだつた。が、17歳のときに先の国王陛下が身罷り、その喪に服し、また若くして王位につかなければならなくなつたアレグロには、翌年に結婚式を挙げるという余裕はなくなつた。それでは20歳になつたらという話になつていたのだが、間の悪いことに今度はソプラノの父公爵が亡くなつた。喪に服すため、再び一年延期になつた

結婚式は結局もう一度延ばすこととなつた。

魔族の侵入が明らかとなり、国中がそれどころではなくなつたためだ。

そしてアレグロとソプラノの結婚式は、そのまま永久に挙げられることはなくなつた。

コトネには悪いことをしたと思っている。それでなくとも気の毒な身の上の彼女を、自分の自由のために利用したのだ。だが、コトネに対するアレグロの執着に気づいたとき、期待してしまった自分を止められなかつた。

だから失踪したコトネが王宮に戻ってきたとき、この機会を逃せばもう次はないと思い婚約解消を願い出た。心の底から慕う人・今の夫・をどうしても諦めきれなかつたから。コトネの気持ちは・・・考えなかつた。考えていたら実行には移せなかつただろう。

婚約解消を願い出た後、ソプラノは王宮にあがることを一切やめた。国王との縁談を自ら破談にした女が王宮にいては周囲がきまづい。だが、ソプラノは何よりコトネの顔を見るのがつらかつた。もし、コトネがアレグロにもこの国にも嫌悪感を抱いていたら? 戻つたのも、自分を虜囚だと思つてのことだつたら? そう考えたらとても会いにはいけなかつた。

コトネがアレグロの求婚に応じたときは、たまらずコトネの顔に見に行つた。影からそつと見たコトネの笑顔は心の底からの喜びに輝き、晴れやかだつた。

(あの笑顔に救われた…あの一人には幸せになつてほしかつたわ…)

だから、陛下がコトネを追いたいのなら協力しようと思つた。自分が幸せになつた負い目もある。あのソナチネが女王というのは姉としても恐ろしいが、そこはこの自分が全力で支えよう決心し

た。妹に言つた「諦めなさい」、あれは自分にとつても決意表明だつた。

(それにしてもねえ…)

鈍い妹は未だに気づいていないだろうが、王位継承権は本来なら姉であるソプラノの方が上だ。さらには、彼女ら一人には早世した兄があり、忘れ形見となつた甥が王都ではなく公爵家の領地であるリゾレート地方の館に暮らしていて、母と義姉の手で育てられている。王国の法では継承順はこの現公爵である甥ラルゲットが優先される。また、王族の血を引くのはコン・フォーコ家だけではない。アレグロとその父・先王は一人つ子だったが、先々王の王弟がコン・ブリオ公爵家を継承し今に続いている。コン・フォーコ家はさらに前の王の代の王妹の降嫁によつてその血族に連ねるようになつた家系なので、こちらも王国の法ではコン・ブリオ家が優先されるはずだ。

(今つて第何位くらいだったかしら…ブリオ家も色々あるし…)

とにかく相当強引に進めなければ、ソナチネへの王位継承は難しい。そもそも何故ソナチネなのかという疑問も残るが。

一体どんな手を使うのやら、と意外に苦労性な姉は前途を思い悩みながら眠りについた。これは胎教によくないわ、と頭の端で考えながら。

三者三様の夜 その二（後書き）

ひまつぶしなれば、幸いです。
ありがとうございます。

三者三様の夜 そのせん

6・三者三様の夜 そのせん

そして爆弾発言をかましたバカ、もとい国王アレグロはといふと

やはり彼も眠れぬ夜を過ごしていた。彼のは自業自得なのが。

国王の私室には煌々とした灯りがついていた。この灯りはコトネが消えてからは毎日、深夜まで消されることはなかつたものだ。居間に置かれた長椅子に腰かけ、彼はため息をついた。憂えたようなその姿はどこから見ても麗しい美青年だ。

(とうとうここまで来た あとはソナチネがつなづくまでこどものくらこかかるか、だな)

ソプラノの読みどおり、案の定、彼の目論見は九分九厘まで完成しており、残すはソナチネ本人を説得するのみとなつていた。

(長かつたなあ…二ヶ月、コトネに会えない日が続いたとはよく保つたものだ)

よりによつて結婚式の前夜に元の世界へ帰つてしまつとは、アレグロにも予想のつかないことだつた。そのまま発狂してもおかしくないほど、彼は深く嘆いていた。

コトネに初めて会つたのは隣にある寝室の寝台の中 今、彼はそこで一人寝することに耐えられないでいる だつた。もちろん不審者

だと思い、すぐ人に呼んで自ら尋問した。忽然と現れた彼女に、もしや魔族の間者ではと疑いを抱いたのだ。

だがそこに、国難をなんとか解決しようと深夜に一人こっそり「神子の召喚」の儀式を行い、何を間違えたのかよりによつて神子を国王の私室に現れさせてしまった神官長が駆けつけ、誤解であることがわかつた。

神官長の独断だつたとはいえ、彼女の意思を無視し、無理やり召喚した事実は、国王であるアレグロも責任があることだ。まさか本気で、王国とは縁もゆかりもない上にまだ16歳の子供である彼女に命がけとなるかもしれない使命につかせるつもりはなかつた。

彼はすぐに魔術師長へコトネを元の世界に返す方法を探すように命じたが、応じられなかつた。魔族への対応に追われ、そこまで手がまわらないとのことだつた。また神官長から「神子の召喚」では神子は召喚された時の「条件」を満たさなければ帰れないという進言もあつた。自分たちだけで解決してしまつと神子の「条件」も満たされない可能性があるとも。それがわかつていて何故実行した、と神官長に怒りがわいたが、彼もこれほどまでに若くいたいけな少女が召喚されるとは思つていなかつたようだ。

結局、コトネには形だけでも魔族の掃討について来てもらわなくてはならなくなり、アレグロは自ら彼女の説得に向かつた。わけの分からぬ状況に突然投げ込まれ（何しろ最初は成人男性の寝床の中だ）、非常に混乱し怯えて泣いていた彼女に会うのは正直気が重かつた。

だが、数日ぶりに会うコトネは思いのほかしつかりしていた。神子である彼女にさまざまな人間が会見を申し込んでいたらしく、彼女はそれらを拒絶することもなく受け入れ、気丈にも短い間に彼女なりの知識を蓄えたようだ。神子としての使命は断り続けているそう

だが。

(若いのに中々しつかりしている、と言つて「私ベンゴシ志望なので人の話をきちんときく」とと話し合つことを大事にしているんです」と返された)

アレグロがさつそく魔族の掃討への同行を申し入れると、彼の話をきちんとときき、理解したその上でコトネはやはり断つた。それまで高位の大臣や神官長、魔術師長に対していたのと同じ言葉、「ムリ」の一言でばつぱりと。

「どうしてだ? こままでは帰れないんだぞ?」

「第一に、私の意志に反して拉致した相手のために命をかける道理はありません。また、私を元の世界に返すのはあなた方が当然負うべき責任であつて、私自身があなた方のために何かをするかどうかはこれとは無関係です。第一に、私はこの国がどうなると関係ないです。どうして自分たちの問題を全くの他人である私に押し付けるのですか? 第三に、私はあなた方を理解も信用もしていません。私が神子とやらの使命を果たさなければ帰れない、または使命を果たせば帰れるという話をどう信じればいいんでしょ? どうやってその話を保証してくれるんですか? 第四に、魔法使い? 魔術師? どっちでもいいですけど、魔法使える人がいるならその人に私を返す方法を探してもらう方が私としては楽です。ものすゞく」

冷静な口調で立て板に水の「とく」反論され、帰るためと言えば協力してくれるだらうと考えていたアレグロは、その日はすぐに退散するしかなかつた。

次の日からアレグロは毎日説得に向かつた。
意志に反して連れてきたことはひたすら詫びることしかできないが、彼女の身の安全は彼の責任で必ず守ると約束し、国の窮状と魔族に

侵略されていいる民の現状をこと細かに説明して同情を誘い、神殿にある持ち出し禁止の古文書を特例でコトネの元に運び（コトネは神子の力？でこちらの言葉を理解してしゃべれた上に古文書に書かれた古代文字まで読めるようになっていた）どうして神子が使命を果たさなければ帰れないかとこれまでに召喚された神子が使命を果した後どうやって帰ったのか詳細を説明し、魔術師長がどれだけ必死になつて魔族の侵攻を防ごうとしているかをふくよかだった彼の体重が半減し顔つきまで変わつていつた経過を語ることで納得してもらつた。

そして…

「…こんな申し出は吾に失礼かもしけないが、対価を支払うとのははどうだらう」

「対価？」

「ああ、君の世界とは貨幣が違つだらうからこひらの金貨などもひつても困るだらう。宝石や黄金などなんでも君の望む形で、君が自分の命の価値に見合ひと考える分だけ支払うよ。国庫にも限りがあるから途方もない量だと困るが。持つて帰れるように神官長や魔術師長に相談してみよう」

「…やつとまともな話がでてきましたね。」

「…え」

「私だつていつまでも他人事にしてられないことぐらいわかつてます。今ここにいるんですから。私は未成年で学生で、自分で稼いだことは一度もないですが、正当な報酬を示されたら領けなくもないんですよ、陛下」

「神子は人柄さえも高潔で、金銭を示されたら不快に感じるかもしれない」と勝手に考えていたアレグロは脱力しながらも安堵した。これで駄目なら力ずくしかない、となっていたのだ。双方のためにも、良かった。

また、このとき初めてアレグロは神子としてではなくコトネ自身に人格があること（当たり前だが…）を認識したのであった。

ことじとく失敗し、国王の説得を固唾を呑んで見守っていた大臣や神官長や魔術師長たちもこれでようやく前へ進める、と喜んだ。

実は真剣な表情で毎日コトネの元に通う国王の姿を見て、王宮に仕える侍女たちが「これは三角関係の予感…！」と噂し、その話がよりによってソプラノのところに届き、彼女にほのかな期待を抱かせる、というオマケもついた。

遠征に赴く前に、コトネは「神子の力」を授かる儀式を神殿で受けなくてはならなかつた。その力がどんなものであるかは、戦地へ到着するまで国王と神官長以外には秘されていた。

やがて、コトネを連れた王国軍をアレグロ自ら率い、王都を出発し魔族の現れた王国の西部へと遠征に向かつた。当初、魔族との戦いは熾烈を極めると予想されたが、最終的には神子の力・「話し合い」・相手がどのような精神状態・健康状態でも話し合いのテーブルに強制的につかせる力・によって、双方の納得がいくような国境の設定と不可侵条約の締結にこぎつけることができた。直接魔王・魔族をまとめていた者と話し合つたのはアレグロだつた。身の安全を守るという言葉どおりコトネは神子の力を使った後はすぐに後方へ移された。

（言葉では突き放すようなことしか言わないくせに、よく周りを気遣っていたな…）

魔族に話し合いをさせるまでに、武力による小競り合いが幾度か起こり、騎士団・歩兵団・魔術師団が実際に交戦していたのだが、コトネはその戦いで傷ついた怪我人がいる救護所の手伝いをした。学生である彼女に医療の専門知識などないので看病のために傍に付いていたり、見よう見まねで包帯を巻いたりなどの簡単なものだが。不承不承ながらも、目の前にいる傷ついた人々を見捨ててはおけず、労わる姿にアレグロは感心した。彼女は自分で言っているほど、己の利益のみを追求するような人間ではない、と。

双方の落としどころを探しての話し合いは、終わるまでにかなり時間がかかっただが、コトネの活躍もあり、魔族との問題は解決した。が、王宮に帰り、新たな問題が発生した。

コトネが元の世界へ帰れないのだ。

（自分では気づかなかつたが、私は彼女の姿が消えなかつたとき喜んでしまつた…）

それがコトネにとつてどんなに残酷なことか、考えもせず。

神殿にて神官長の祝福を受けたコトネは、以前の召喚ではここで神子の体が徐々に消え、元の世界へ帰つていったというその光景を描いた記述があつたので、次の瞬間には自分が元の世界に戻つているもの、と予想していた。

が、コトネの体に変化はなく、彼女が立つてるのは相変わらず異世界の神殿。起動までに時間がかかるのかなーと思い、彼女はその

まま立ち去っていたが、一時間経っても半日経っても変化は起らなかつた。

(自分が帰れないと理解したときのコトネの顔…あんなに絶望している人間の顔は知らない)

自分たちはなんて残酷なことをしてしまったのだろう。暗くなつた神殿で、絶望したコトネの顔を見て初めて彼女が自分を信頼し始めたと知つた。その信頼を裏切つた瞬間だつた。

コトネはすぐに神官長へと詰め寄つた。話が違う、と。

「どうして私はここにいるのでしょうか？」

「あなただけじゃない。皆いましたよね？魔族さえいなくなれば私は帰れるつて。嘘だつたんですか？」

「あんないかにもいわくありげな古文書まで出してきて私をだましたんですか？国ぐるみで？いい大人が16歳の子供を？」
「だつて帰れるつて言つたじゃない！…どうしてよつ！帰してよつ！」

「

「私にだつて家族もいるの…友達も学校も…皆のところへ帰して。お母さんに会わせて！」

最初にこの世界に来たとき以来のコトネの涙だつた。この国を救つた神子とは思えない弱々しくも痛々しい、普通の少女の姿だつた。この一年我慢し、張り詰めていた糸が切れたのだろう。

その後、神官長がその地位を辞した。もともと高齢だつたのだが力の見合つ後継者がおりず無理をしてその地位に留まつていたので誰も反対しなかつた。神官長の務めから開放された余暇を使い、コトネを戻す方法を探すつもりだそつだ。

神官長がいなくなると、コトネは引きこもるようになった。王宮に

与えられた一室に閉じこもり、誰にも会わなくなつた。遠征前から仲良くしていいた侍女たちも、遠征中に知り合つて友達になつたというソナチネも遠ざけて。

そして 消えた。

いつ見つけたのか、王族の脱出用通路を使って。

アレグロは彼女が実際に目の前から消えて初めて、悟つた。自分がコトネに向ける思いに。強くて弱い彼女にどうしようもなく惹かれている。頑固で容易に自分を譲らないところも、意外に脆い部分をもつていているところも愛おしい。彼女がいないことには耐えられない。だから必死に探した。見つけたときは心底安堵した。

遠征中、用がなくとも一日一回は彼女に会いに来ていた彼の思いは周りにはすでにバレバレだつたが、本人は自分の行動には無自覚だった。

(「じーっとコトネ様のこと見てるんだもの、こっちがかゆくなつたわよ!」とは傍にいた侍女の談。)

(最初にいなくなつたあの時と同じ状況だが、違う。今は彼女も私を求めているはずだ…)

何度も試みた求婚に、ついに応えた彼女はあんなに幸せそうに微笑んでくれたのだから。

(妻を取り戻すためだけに、国を捨てる、か…最低の国王だな)
(しかし約束したのだ。私の妻はコトネ一人。王妃を娶らぬ私がこのままでは、王位継承が宙に浮くことには変わらない。だから…)

愛しい彼女の傍へ行くことを願い、国王は今夜も眠れぬ夜を過ごす。

三者三様の夜 そのあと（後書き）

自分で書いたいものを書いてますので、誰向けなのかよくわかりません。

ここまで読んで下さりありがとうございます。

義兄の憂鬱（前書き）

7話が抜けてました。
サイトの使い方が理解できなくてすみません。

7・義兄の憂鬱

国王アレグロのトンデモ発言の翌日、ちょうど非番であったソナチネは頭の中のモヤモヤを発散すべく、騎士団の鍛錬場へと足を運んだ。まことに体育会系らしい行動原則である。

朝も暗いうちに起き出して鍛錬を開始している騎士や、従騎士たちが、活発にそれぞれに課せられた剣や槍・体術を競い合つたり、あるいは各自の武具の手入れなどを行つていて。騎士の武具は小姓が手入れをするが普通だが、己の手でこなす者も中にはいる。

第一騎士団の主な任務は王都の治安維持と王宮の防衛である。地方に駐屯し、国防や国王直轄地の治安維持を行うのは第一騎士団から第五騎士団まで、それぞれ大体国の東西南北に置かれている。また、地方の統治を行う領主たちは国が定めた基準を超えない範囲で私兵を雇うことが認められている。

騎士たちは普段、各自に割り振られた任務につく日と、鍛錬を行う日と、非番の日を組み合わせた予定で動くことになっている。騎士の中でも小隊長以上は事務仕事も担当することになる。今のソナチネは歩兵隊の一部である近衛隊に所属しているのだが、同じように決められた予定に沿つて日々を過ごす。

同僚や後輩に声をかけながら鍛錬場を歩き過ぎ、ソナチネは三ヶ月前までは同じ小隊に属していた先輩であり友人でもある人物の姿を探していた。少し年上で剣の腕前も上の彼女に相手を願おうと思ったのだ。（別に同性でないといけない理由はないのだが、近衛にいたり団長の義妹だったりと微妙な立場のソナチネに気安くしてくれる人もあまりいない。）

確かに彼女は鍛錬の日だつたはず、と探していると向こうが見つけてくれた。

「ソナチネーおはよう。今日は非番じゃなかつたの？」

声をかけてきたのは、女性としては長身の部類に入るソナチネよりもさらに背の高い女騎士であつた。くせのない長い金髪を一つに束ねて流し、鍛錬用の服の上に防具をつけたその姿はソナチネ同様ほどよく筋肉がつき、スラリとして美しい。

「おはようござこます。フイーネ。実は相手をしていただきたくて……」

ソナチネも挨拶を返す。フイーネと同じような服装で準備してきたソナチネは早速手合わせを願つた。

熱心な後輩に笑いかけ、フイーネは快諾した

「いいわよ。準備は済んでるんでしょうね？」

「はい」

それぞれ訓練用の剣を握り、鍛錬場に設けられた剣術の試合用サークルに入り、一礼して構える。こうなるとソナチネは剣のことしか考えられない。何合となく打ち合いながら、瞬くように時間はすぎた。

「はあつ、ありがとうございました」

「どんどん腕を上げるわね、ソナチネ。今三本に一本はとられたかしら？」

太陽が高くなつてくる頃まで、途中に休憩を挟みながらだが夢中で剣を振つていた。気がつけば心にかかるついた懸案も頭から抜け落

ちた。まわりにいる騎士たちの視線にはかまわず、ソナチネは鍛錬場の隅まで歩き、少々はしたないが大の字に寝転がった。隣ではフィーネが汗を拭いている。

「で？」

「？ で、とは？」

「とぼけないの。今日おかしいわよ。あなた、ほとんど夢中で剣を振るつてたわ。何か悩みでも？」

その瞬間、ソナチネは思い出した。田下の悩みを。

「…そんな顔色変えるよつた悩みなの？きこちやきけなかつたのか
じひ」

自分の言葉で、極限まで体を動かして真っ赤に紅潮していた顔を一瞬で真っ青に染め替えた後輩を見て、フィーネは少し後悔した。若いのに浮いた話が一つもない彼女のことを実は心配していたフィーネは、「ソナチネについて春が！？」と先走っていたのだ。そういえば彼女の今の任務は国王の護衛。何かきいてはいけないことで起きてしまったのかもしれない。（当たらずとも遠からずである）

「いえ別に…」

言いかけたソナチネを方向からの声が遮った。

「騎士モン・フォーム様はいらっしゃいますか？！」

声の方を見ると、訓練服のむさくるしい男ばかりの風景に場違いな者の姿がある。煌びやかな衣装をまとった国王の侍従の一人だ。

大体用件を察したソナチネは力なく立ち上がり、手を上げた。

「はい…」
「陛下より書簡をお預かりしています」

国王の書簡を預かった正式な使いである侍従の前に膝をつき、臣下の礼で書簡を受け取る。国王個人の印章を押された封蠅で巻きとめられた書簡を渡すと、煌びやかな侍従はさつと姿を消した。書簡を手に言葉を失くしたソナチネを残して。

これは根堀り葉堀りきいてはいけないことだ、と察したフイーネは声をかけられなかつた。

開けたらそのまま捕まつてしまつ、そんな予感に襲われたソナチネに追い討ちをかける者がいた。第一騎士団長の副官を勤めるジユストだ。

「コソ・フォーコ。団長が呼んでるぞ」

ああ、もう少し考える時間をください。
(これでも少しばかり時間が与えられていたのだが、それを勝手に鍛錬にあてたのはソナチネだ。)

「…では失礼いたします。今日はありがとうございました。」

相手をしてくれたフイーネに一礼し、悄然とその場を去る。フイーネは深刻そうな様子の後輩にかける言葉もなく、心配そうな顔でその背中を見送つた。

* * *

第一騎士団の団長室は魔王だ。ついでにそこには魔王がいる。

この冗談は騎士たちの間で言い廻されたものだが、そこには眞実がある。

（魔王の侵攻があこつた当初は縁起でもない、と言われなくなつていたが）

魔王ことソナチネの義兄、レント・エネルジ「第一騎士団長はその物騒な二つの由来となつた眼光を普段の1・8倍強く、眉間の皺を1・5倍深くして義妹を迎えた。30代後半にして23歳の若く美しい花嫁をもつた彼は、もつとウハウハしているべきなのだが、そんな可愛げは微塵も見せない。

いつも思うのだが、姉上はこの人のどこがいいのだろう、眉間を見るともなしに見ながら心の中でつぶやく。

「…昨日は顔も見せずに悪かったな」

「いえ、義兄上。」ひらひらと挨拶にも伺わず申し訳ありません

前置きもなくいきなり私的な件で話しかけられて、ソナチネは面くらつた。

通常の彼は公私をはつきり分ける人間である。少なくとも王宮内で義妹扱いされたことは一度もない。だから思わずいつもは使わない呼びかけで返してしまった。

「ああ、いい。…用件はわかっているな」

「…はい」

そのまましばし無言のせめき合いが続いた。ソナチネは団長用の元は立派だった机今はなぜだか無数の傷がついているの上に積み上げられた決済待ちと見られる書類の山の間から睨み付けてくる義兄の前になす術もなく立ちすくんでいた。

「あの……」

「誰かいないのか。その……なんだ。」

「は？」

勇気を出して発言しようとソナチネを遮つておきながら結局は言いよどむ義兄。

誰か、とは何か用事でもあるから人を呼べとの意味かと受け取り、ソナチネは聞き返した。

「？ 何かご用事でも？」

「違ひ…。その前に、陛下の書簡は読んだのか？」

「まだです。やさほど受け取つてそのままこちらに呼ばれましたので」

陛下の書簡についても知っているのか、と驚きながら、そういうえば臣下の懸案事項についての呼び出しだろと見当をつけておきながら、肝心のこれを読んでおかなければ意味がなかつたと気がつく。

「あの、義兄上もじ存知なひこひで読んでもかまいませんか？」

「ああ。…そうしてくれ」

今までの限界かと思っていたが、眉間の皺がますます深くなる。

書簡の封蝋を取り、紙をシュウッと伸ばして読む。

「…今日も陛下のところへ伺ひみつてあるだけですが

「一枚目があるだら?」

あらま本当に、と一枚目を読む。

「…意味がわかりません」

修辞的表現が多くてわかりづらいや、これは舞踏会への招待状らしい。招待主は国王その人ではなく大臣の一人で会場はその招待主の邸宅だそうだ。ついでに開催日は明日だ。それはわかるのだが、何故国王からの書簡に入っているのだろう。

首をかしげていると、ため息をつかせてしまった。

「全部説明しなくてはならんのか…それはお前の夫を決める舞踏会だそうだ」

「…へ? 夫ってなんですか。今一体何がどうなっているんですか! ? もう昨日から私にはわけがわからなことばかりなんですが…!!」

「落ち着け。陛下がご乱心なのはもうわかつてゐるな? 今の方は本氣でお前に譲位なさるおつもりで用意をしておられるのだ。陛下がおっしゃるには、さすがにお前には一人で女王となる器はないから、後ろ盾となるような人間を夫に迎えさせたいそつだ」

度重なる理不尽に魔王の御前であることを忘れつい激しくまくし立ててしまつソナチネと、なだめる魔王。

「いやいやいやいや、おかしいですって! 譲位? 冗談ではないです

「無論だ。」のよつたな話を受け入れられるはずがない

「……全力で止めましょつよ、陛下なら……」

「ん？ はい？」

そりそり興奮したとこりで、あつたらと肯定され拍子抜けする。

「だが、今の陛下の行動をお止めするのは難しい。この件以外の政務はこれまで通り滞りなく進めておられるそうだし、魔術師長にさせている研究も、名目上ではコトネ様を呼び戻すため、となつているそうなのだ。私やお前に話している内容は、表立つたところには出されないし、下手にこちらからこの件を表せたにして陛下の乱心を問題にしてみる、悪くすれば反逆罪であつといつ間に首と胴が離れるぞ」

「そんな……」

この件の深刻さを思いやり、再び責ざめるソナチネ。一気に命の危険にまで及んでしまった。

「腹心の者に魔術の詳細とお止めする方法を探らせている……陛下を行かせるわけにはいかないからな。実力で止めやせるしかないと

う

眉間の皺も深くなるはずである。妻と違ひ生真面目な彼は「はい、そうですか」と主君の出奔を認めるはずもない。数日前に国王本人から相談を受けた彼は密かに頭を悩ませていたのだ。
(相談？もちろんソナチネの夫に関してだ。騎士団長ではなく義兄として訊かれたらしい。王宮にいる一番近い彼女の縁者が義兄であ

つた、と。）

国王がこの件の協力者として挙げた大臣数人と魔術師長にすぐに会いに行つたが、全員国王の味方らしく、止めさせらるつもつはないと言われた。

「もし仮に、だ。陛下が異世界へ行つてしまつたとしても、お前が女王に、ということにはならないだろつ。他にふさわしい方がいらっしゃるはずだ」

「よかつた……！ そうですね！ おかしいですよね！ 義兄上……！」

国王本人に続き、実姉にまで非現実的な話をされたといひく、やつと常識的なことを言つてくれる味方が現れた！と手を握らんばかりに迫るソナチネ。

「しかし、陛下は本気だ。それは掛け値なしに真実だ。このままで近いうちにお前は女王の後ろ盾としてふさわしいと陛下が考える相手と強制的に結婚させられるだろつな。陛下が異世界へ行こうが行くまいが。女王になろうがなるまいが。うん」

さすがは魔王様、一~~旦~~喜ばせておいて再びどん底につきおとしてみせた。

女王として即位、という最悪のシナリオは避けられる可能性が見えてきたが、避けられない災厄もあるらしい。たまらずソナチネは上司の前であるにもかかわらず傷だらけの机に両手を突き、俯いてしまつた。上司の方もそんな義妹を氣の毒そうに見やるのだった。

「それで……だ。

まだ続きがあったのか、義兄は何故だがこれまで以上に重苦しく切り出した。

「…最初にきいた件だが」

「……なんでしたっけ？」

すでにそんな前のことは頭にないソナチネは素で聞き返す。

「うひつ、忘れたか。まあそうだな、仕方ない」

「なんでしょうか？」

よほど話しつらいう内容なのか中々用件。彼は本来、この話のため気は進まないながらもソナチネをこじへ呼んだのだが、チラリと気まずそうに彼女に手をやる。

「私的な話をする場でもない……いやこれまでの話も私的といえば私
的か。それに私が聞くのもなあ……ソプラノがきいてくれるのが一番
いいんだが」

「あの、今までのお話で十分衝撃的でしたので、日を改めてでも私はいいですが」

あまりにも言いにくそうにしているので、もうこれ以上は」免とばかりに思わず先送りを提案するソナチネ。

「ああ… そつしたいが… これも義兄の務めだろうと後でソプラノに

詰め寄られるかもしれん……」

まだ新婚だというのに、何故だか娘を前にした父親のような気まずい心境で義兄はきいた。

「……では尋ねるが、今、お前にはいないのか。その、慕う相手といふか、特定のなんだ、恋人とでもいうのか」

「…………いません」

意外に初心な義兄が何を言いたいのか理解できた後、長いこと黙り込んだ末にソナチネは正直に答えた。纖細な問題を尋ねられた心が痛い。

この、団長室での相談でどちらの方が打撃を被つたのだろう。義妹という微妙な立場の相手に気まずい質問をした初心な義兄も相当消耗していそうだ。

どうやらフイーネの「ソナチネに春が！？」という予感はあながち間違つてはないかもしれない。これからの話だが。

義兄の憂鬱（後書き）

すみません、30分かそこらの話ですが、7話が抜けてました。
直したあとではわけわからないでしょうが。

招待主の思惑

8・招待主の思惑

第一騎士団長の執務室を（いろいろな打撃を受けて）辞したソナチネは、宿舎に戻つて鍛錬でかいた汗をふき取り着替えてからついでに昼食をとつた後、そういうしている間にも国王陛下からの呼び出しの時間が迫つてきたので、重い気持ちで今度は国王の執務室へ向かつた。

彫刻をほどこされた国王の執務室の重厚な木製の扉の前では、きちんと話が通つているのかその前に立つて近衛の同僚に止められる」ともなくすぐに室内へと通された。

「お召しになり、騎士ソナチネ・コン・フォーロ参上いたしました」

控えの間より入室してすぐ、奥の机 さすがに傷はついてはいないが、義兄といい勝負で書類が積んである に主君の姿を見とめ、膝をついて臣下の礼をとり頭を下げたまま名乗る。あちらから声をかけられるまではこのままの姿だ。またどんな爆弾を投げつけられるのかと、暑くもないのに背中を汗が伝つ。

「ああ、待つっていた。早速だが、舞踏会の件で打ち合わせだから、立ちなさい」

不眠が続いているにもかかわらず今日も麗しい国王陛下は、戦々恐々としているソナチネにひとかけらの猶予も与える気はないらしい。

「私はこの後、謁見が入つてゐるのですぐに席をはずさねばならぬ

い。あとはこのマルカート伯が説明するからよろしくておいてくれ

そう言つた陛下の横には、大臣の一人であるマルカート伯爵が立つていた。室内の人間の人数や位置を一瞬で把握する騎士の習性でもつて見分けていたので、頭を下げた状態でも彼がいるのはわかつていた。この三ヶ月を近衛として過ごしていたソナチネは伯爵の顔も見知っていたので、彼が書簡に書かれていた舞踏会の招待主であることも同時に思い出した。

「陛下、私はまだ陛下のお話をア承したわけでは…」

立ち上がりつて顔を上げると、なんとか思い直してもらえないか（はかないながらも）訴えるつもりで来たソナチネは、このまま流されではたまないとばかりに必死に声をあげる。

だが敵もさるもの、その途端にさえぎられる。長い睫毛を臥せ、美の神に愛されたその顔を痛ましげに歪める。

「ああ。私の都合で突然婿をあてがわれるそなたには可哀そつなことをするが、一人で女王になるほうが苦労が大きいだらう。できるだけそなたの意向を大事にするから」

いやいや、陛下にそんな苦しげにされてももう「まかせませんよ」とソナチネも負けない

「なにゆえそんな非現実的なことをおつしやるようになつてしまわれたのですか！？」陛下
はこの国の国王でいらっしゃるのですよ！？閣下もおかしいとは思われないのでですか！？」

どうしてここにいるのか薄々察しながらも、伯爵にも思わず同意を求める。

突然矛先を向けられた40代後半の伯爵は年長者の余裕でもって一ツ「コリ微笑んだ。」こましお頭に顎鬚を生やした彼は中年の域にあるにもかかわらず腹がでることもなく髪がさびしくなることもなく、中々のナイスミドルである。

「思いませんとも。ソナチネ様」

様。様がついた。「ソナチネ嬢」ならまだしも、様。

「…そういうことですか。」ここには味方はいないんですね…。」

「いえいえ、ソナチネ様が無事に」即位なされたら、誠心誠意お仕えする覚悟ですよ」

口調は極優しいが何のなぐさめにもならなかつた。

「アレグロ陛下が書簡にて書かれた通りですが、私からも説明いたしましょう」

穏やかそうな物腰ながらも、ソナチネの混乱を全く無視して話を進めるマルカート伯。

「ここまではおわかりいただけましたか?」と、いちいち返事を求められながらソナチネが理解させられたことによると、明日伯爵邸に招かれているのはいずれも有能な青年達で彼女が誰の手をとったとしても女王の良き伴侶となり支えてくれるであろう人物が揃うこと、彼女の支度は伯爵夫人が全て整えており舞踏会用のドレスが仮

縫い今までできているので今日の午後に細かい採寸さえすれば完成すること、明日の彼女の勤務は朝から夕方までになつているが人員の手配は済んだので午後は休みになつていて終わり次第伯爵邸で準備を始めてほしいこと、の以上だった。

（こわつーこわつーええつ、いつ間にそんなに有能な人たちを集めたの！？全然知らないんですけど！噂とか聞こえてきてないんですけど！）

（仮縫いは済んでるってどういうこと…？そこに至るまでに私の採寸とかつていらないんだっけ！？身長とか自慢じゃないけどそこらの「ご婦人よりずっと高いですよ私！？」）

（仕事が終わつたらすぐつて…逃がさない氣だ…！ノノちゃん助けて…魔王様でもいいから…）

伯爵は姉や義兄にまで助けを求めるソナチネの心の葛藤を完全にスルーし、説明を終えるとぼんやりした彼女の手をとり国王の執務室から連れ出した。国王本人はいつのまにか謁見の間に向かってしまったらしい。

「さ、では早速ドレスの採寸のため我が家屋敷においていただきましょう」

こんな時でなく、相手がソナチネでもなければ、この女が思わずキュンとすること間違いないしの完璧で優雅なエスコートだった。とてもまずいことだが、流されかかっている。

* * *

馬車に乗せられ到着したマルカート伯爵邸では伯爵夫人本人に出迎えられ、すぐに採寸のために用意された客間に通された。そこには

すでに服飾を専門とした侍女たちが巻尺を手に待機しており問答無用で着ている近衛の制服を脱がしにかかる。夫人は傍でその様子を暖かく見守った。

「いえあの、自分でできますから！それに私、汗くさいですよ！」

「大丈夫ですよ。お嬢様はお楽になさってください」

「そうですよ。立つて下さるだけでいいですから」

ふふふと笑いながらも有無を言わぬ手つきでソナチネの抵抗をふさぐ侍女たち。普段は荒くれ男ばかりを相手にしているソナチネは彼女たちの柔らかい手を乱暴に振り払うなどできるはずもなく結局大人しく下着姿を晒し採寸を済ませることとなつた。実際の話、自分用のドレスを作つてもらうのは初めてなのでどうしたらいいのかわからないのだが。ただ、午前中の鍛錬のせいで汗臭い自分がいたまれない。

「…」これが私のドレスですか

最初の採寸が終わつたあと、仮縫いのできていのドレスを直し、その後もう一度直したドレスを身にまとつて最後の微調整をする、といふ話だつた。今は最後の微調整のためにソナチネはほとんど生まれて初めて、ドレス・貴婦人用の夜会服・に腕を通した。

落ち着いた緋色を基調としたドレスで、首元が大きく開いており袖もないでソナチネは非常に落ち着かない。腰には当然のようにコルセットが装着させられたので慣れない彼女にはこれもまたつらいことである。スカート部分には膝のあたりから裾へかけて斜めに切り替えがついている。客観的に見ると、落ち着いた色合いも比較的すっきりとした全体のシルエットも、本人不在のまま作られたにしては良くできていた彼女に良く似合つていた。

「よくお似合いですよ」

「本当に……日に焼けておいでですけど、この色はよくお肌になじんでますわあ」

「お嬢様はお背が高くていらっしゃいますから、この形が映えますのよ」

侍女たちはいろいろ褒めてくれるが、慣れないことに疲労困憊していたソナチネの心境としては「もうどうにでもして……」という投げやりなものだった。

引き続いて、首飾りなどの宝飾品を合わせたりソナチネの短い髪を結うためつけ毛をつけて髪飾りを刺してみたり、と明日のために全身の装飾品の打ち合わせが行われた。本人そっちのけで、采配はほとんど伯爵夫人によつて行われた。

全て終了して、最後にマルカート伯夫妻と応接間でお茶をいただく頃には、午前中は思い切り体を動かしていたこともあり完全にくたくただつた。

「まあ……大分お疲れのようですね」

「お疲れのところ申し訳ありませんが、もうしばらくお付き合いで願えますか?」

伯爵夫妻の言葉にも力なく微笑むことしかできなかつた。

「大丈夫です……。あの、まだ打ち合わせることがあるんでしょうか?」

そこで伯爵はひとつ息を吐いて準備をすると、真剣な顔で話始めた。

「は…」」の話でソナチネ様は非常に驚かれ、困惑されているで
しょうと思いましてね…」

やつとまともな話ができるのか、とソナチネも疲れて椅子の背に
もたれていた姿勢を正し身構える。

「あ、先に申し上げておきますが、私はアレグロ陛下の協力者です
よ。期待するのはおやめください」

(……そりですか。そりですか。思い切り協力しますよね)

ソナチネの疲労度は一気に上がった。わかりやすく肩が思い切り下
がる。

「何からお話ししているのや…、実は」の件を陛下が私に打ち明け
られたのは一月ほど前

でしてね。驚きました…ソナチネ様もご存知のとおり陛下は王妃と
なられるはずだったコトネ様を失われ、非常に気落ちなされていま
したがまさか譲位までお考えだとは想像もしていませんでしたから
ね」

「私は現在法務大臣を拝命しておりますので、ソナチネ様のご即位
に関して法律的な障害についてお尋ねだったのです。必要なら法改
正のために議会を開かれるというところで。いや陛下は全く真剣でし
たな」

「もちろん私は反対しましたよ…アレグロ陛下はまだお若くてい
らっしゃるし、」の先人生は長いですからね、出会いもあることじ
ょうと」

「しかし…陛下は全くお聞き入れになりませんでね。ご自分がコト
ネ様のところへ行かれるのはもう決まったことで、その後の王国を

どうするかが問題なのだと、「

「何度も何度も私の執務室においてになつて真剣にお話になりました。その懸命なお姿に不覚ながらも自分の若い頃のこと思い出されました…」

そこで傍らに座る奥方と愛情にあふれた視線を交わす伯爵。伯爵夫妻の大恋愛と結婚後の仲むつまじさは有名だ。

（えつまた！？またノロケ！？）

恋人ナシの21歳独身、限界のはずの疲労度値が更新された…！

「えー、どこまで話しましたつけ。ああそういう、大事な話が残つてます。そういう

ことで、私はアレグロ陛下に協力することになつたんですが「ソナチネ様の王位継承権ですが、現在は第六位でいらっしゃいます。これはご存知ですね？」

もちろんソナチネはご存知ではないが、伯爵の話は続く。

「ですが、ソナチネ様に先んじられて継承権をお持ちの方々はどなたも少々難ありでいらっしゃいましてね、まず先々代の国王陛下の弟君のご子息があ二人、現在のコン・ブリオ公爵家ご当主のモデラート様が第一位ですがご高齢の上に持病をお持ちです、恐らくご辞退なさるでしょう。モデラート様の弟君のリテヌート様は神殿で終生誓願を立てておられますのでこちらも同じでしよう。そしてモデラート様にはお子様があ二人いらっしゃいましてそれぞれ第三位と第四位です。モデラート様はご結婚が遅かつたので、お二人ともお年はソナチネ様よりも少し上ぐらいです。このお二人についてはソナチネ様の方がよくご存知かと思いますが、まあ、その、問題ありますよね」

「その次が、ソナチネ様の甥御のコン・フォーコ公爵ラルゲット様で第五位をお持ちです。が、公爵位ならともかく御年7歳では王位

を継がれるのは無理でしょう。また後見に立たれる母君にも、それでは「負担」がかり過ぎになりますよ」「

「そして、アレグロ陛下は王位の継承を深くお考えの上、第六位でいらっしゃるソナチネ様が相応しいとお決めになられました。…お分かりいただけましたか？」

「はあ、あの、思っていたより私の継承順位が上なのは理解できましたか…。そういえば姉はどうなるんでしょう？ そのお話でいくと私より上では？ 身びいきなんでしょうが、姉は私などよりもほど女王に相応しいのではと思うのですが…」

「あれ、ご存知ですか？ 姉君ソプラノ様はアレグロ陛下との「婚約解消」時に王位継承権も放棄なされますよ」

今頃気付いたのか、と言わんばかりに田を見張る伯爵。言われるまでもなくその通りである。

（そりか…！ 何で昨日気が付かなかつたの私…！ どうして姉上も言つてくれなかつたのかしら…。自分で考えろつてこと？ そんな薄情な…。）

「そういうわけですから、王位につかれるのはソナチネ様となつています」

「微力ではありますが、ソナチネ様がご即位なされるまでもその後も私と我が伯爵家は全力でご助力申し上げることをお約束します。まずは明日の舞踏会ですね。ソナチネ様が納得のできる方をお選びいただけるよう力をつくしますのでおまかせ下さい」

そう締めくくつて、ナイスミドルな伯爵はニッコリ笑った。

「そうですわ。明日はソナチネ様を最高の美女にお仕立てしますから、きっとどなたをお選びになつても、お相手の方はソナチネ様に参つてしまわれますわよ」

もちろん、ソナチネ様の元々の『容姿が整つておられるからですけど、と伯爵夫人は口添えした。

結局この日も流されるままに、着々を外堀が埋められていく様をなす術もなく呆然と見ているだけのソナチネだった。姉がその不甲斐なさを見たら、王位継承への協力は考え直してくれるのかもしけない。やっぱりこの娘には任せていられない、と。

招待主の思惑（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

8・侍女の懇願

翌日、どうしてこんな災難が降りかかってきたのかと一晩中深く悩んだソナチネは、寝不足の頭で近衛の勤務についた。よく晴れた日で、恨めしくなるほど爽やかな朝だった。

昨日言っていたとおり、朝行つた近衛の詰め所では今日の勤務が正午までに変更された旨を告げられた。

「どうしたんだ？顔色が悪いぞ？」

一人一組で国王の私室から執務室まで国王陛下の護衛をし、執務室に着いた後は扉の前でともに番をする同僚・ヴァルスが心配そうに声をかけてきた。本来なら勤務中であるから私語は厳禁なのだが、体調が悪いのでは護衛など勤まらないだろうと彼は考えたのだ。

「大丈夫です。少し寝不足なだけです。…申し訳ありません」

寝不足の元凶を護衛しながらなので少々理不尽な気もするが、仕事は仕事、国王の護衛という名譽ある職務はおろそかに扱ってはいけないとまっすぐ前を見たまま背筋をピンと伸ばし、ソナチネは答えた。体調不良で任務に支障をきたすなど以ての外なのだ。

「やうか？無理するなよ」

近衛の中でも比較的友好に接してくれている気のいいヴァルスは、自分も姿勢を正しこの異色の後輩を思いやった。彼女は公爵家の令嬢であるにもかかわらず、騎士をしている変わり者だ。それが騎士

団よりも女性の少ない近衛隊に移つてくるときいた時は、どんな厄介ごとが起こるのやらと彼は憂慮したものだが、実際に彼女が来てもどうということもなく（国王陛下の奇行を除いては）平和に任務をこなしていくので安堵していたのだ。人は身分や性別では計れないものだな、と大分彼女を見直していたので彼は普通に心配していただけだった。

正午となり、休憩のために国王の護衛を交代の者に代わるとそこでソナチネの今日の勤務は終わりだった。が、一度詰め所に戻り報告書に記入をしなければならないだらう。ヴァルスとともに詰め所へ向かおうとしたソナチネを、呼び止める者があった。

「失礼いたします。ソナチネ様、お久しぶりでござります」

淑やかにお辞儀をしてソナチネの名を呼ぶ侍女の制服の若い娘 それは三ヶ月前まで王妃となるコトネへと共に仕えていた侍女・ヘオンだつた。

「ヘオン……お久しぶりです。」

驚きながらもヘオンの元に歩み寄るソナチネに、侍女は微笑んだ。が、すぐに顔を暗くしてしまつ。

「お仕事の途中に申し訳ございません。ですが、どうしてもソナチネ様にお話したいことがあります。昼食の後で結構ですから少しだけでもお時間をいただけませんか？」

「ああ、はい。ですが今日はちょっと……」

昼食後の予定は詰まっているのだ。すぐにでも伯爵家から迎えが来てしまうかもしれない。

すると、ヘオンの様子を見かねたのかヴァルスが助け船を出した。

「ゴン・フォーノ。報告書は私が書いておこひ。こちらはいいから今すぐ行つてあげるといこ」

「しかし…。」

「午後から陛下の『』用で抜けるのだろう？ 今行つておかないと次がいつになるのかわからないぞ」

重ねてすすめられ、ソナチネはヴァルスの言葉に甘えることにした。迎えは昼食後なのだから今からヘオンの話をけば間に合つだらう。

「あらがとうござります…。申し訳ありませんがよろしくお願ひいたします。」

そうしてソナチネはヘオンの話をきくこととなつた。ヘオンがそれでいいといつので、彼女が王宮で働く侍女としてその中に『』えられた部屋で廻食をとりながら。

* * *

「ソナチネ様はお変わりありませんわね…」

ヘオンの部屋で彼女とともに小さなテーブルにつき、下働きの者が運んできた食事をとつてゐるソナチネはその言葉に内心首を傾げた。それに話し方も変だ。以前はもつと気安かつたし、敬称なんてつけていなかつた。

(三ヶ月ではそう変わらないよつな…)

若干、嫌な予感がしながらも話を促した。

「そうですね。それで、急かすよつで申し訳ないのですが、お話とは

「そうですね、失礼いたしました」

恥じらうようにわざかに顔を赤くしているヘオンは可憐であった。彼女は王宮に仕える侍女ではあるが、ソナチネほどの名門ではないにしても、もともとは貴族の令嬢である。少し赤みがかつた金髪に人懐こそうな茶色の瞳を持つ美しい娘だ。だが、その顔をよく見てみると今は心なしか憔悴しているよつに感じられる。

「ソナチネ様はもうお聞きになりましたわよね？その…陛下のお話を」

「はい…。ではヘオンも？」

「私もです。実は陛下様子がおかしいので、僭越とは思いましたが、直接お尋ねしたんですの」

たおやかな外見とは違い、なかなか行動力がある。

「すでにご存知なら話は早いですわ。单刀直に入り申し上げます。是非女王におなり遊ばして下せいませ…『ご無礼をお許しください』

あなたもですか……！」

思ひぬ方向からのアプローチに、完全なる死角から突きを繰り出さ

れてきた時の衝撃を味わうソナチネ。

「私がときが口出しして良い話ではないことは重々承知しております…ですが、どうしてもソナチネ様に直接お会いしてお願いしたかつたのです」

「あの、疑問なのですがヘオンは私のことをよくわかってるでしょう！？それなのに女王にと言つていいのですか？」

これまで幾度となく浮かんできた疑問なだが、陛下の阿呆な思いつきださて置いても、何ゆえ自分を女王になどという突拍子もない話が飛び出でくるか心底それが不思議でならない。

「どうからどう考へても私は王になどなれる器ではありません。それはヘオンもよく知つてゐるではありますんか…」

コトネが神子としてこの世界にやつて來た時から彼女付きの侍女だつたヘオント、コトネの従軍時に護衛として付き従つたソナチネは2年以上の付き合いだ。同性で同じ人物に仕える間柄、もう一人のコトネの侍女・トオンを入れた三人は仲が良く、言葉を交わす機会も多かつた。そんな時なぜか年上のはずの（一歳だけだが）ソナチネがなんとなく妹的な役回りを振られていた。女性らしいことにはとんと疎い彼女をいじつて遊んでいたのは目の前の美しい女性だ。そんな風に他人に遊ばれるような人物を女王に本気で推すつもりなのか。

「…ソナチネ様は素直でまつすぐな方です。今は不足でもそんなあなたを助けようと手を差し延べる人は多いでしょう。畏ながらそれはアレグロ陛下にもないものですね」

ソナチネは目を見開く。これは今まででは一番真っ当な説得だつた。血筋や状況ではなく、初めて自分自身に対する評価を与えられた。

(…そんな風に考えることもできるのか…)

「お気持ちはわかりますわ。突然のことにつきかし戸惑つておいででしょう?」迷惑かもわかりせんが、私がソナチネ様に一度直接お願いしたかつただけですの。どうか…あまり悪い面ばかり見ずに、前向きに考えてみてくださいませ」

そこからヘオンは話題を変え、「トネの思い出話やトオング最近起こした騒動の話など明るく軽い話を振り、二人の昼食を終えたのだった。だが、ヘオンのどこにとなく憂いた顔が晴れることはなかつた。

ソナチネがヘオンの部屋を辞した後。

「…まあ」

自分の言いたいことを伝えられた、ヘオンはほつとため息をつく。その顔色は変わらず暗く、ギリギリのところド平静を保つていたため精神的な疲労も加わっている。

王宮に仕える侍女。この言葉が城下や地方に住む王宮外の者たちにどれほど羨望のまなざしで見られるか、ヘオンは良く知っていた。ヘオンは貴族だが、実家の暮らしあは平民政を変わりないものだつた。貴族といつても名ばかり、先祖の放蕩のおかげでわずかとなつてしまつた領地からあがる収入は少なく、そのほとんどは時折気まぐれのように招かれる夜会に出席する母の体面のために使われ、生活は本当に苦しかつた。

ヘオンの王宮勤めはよくある行儀見習いのためなどではなく、それが一家三人が食いつなぐ唯一の方法だからだ。幸い見目よく聰明な彼女は王宮に職を得、その上王妃付きの侍女というこの上ない地位まで出世することができた。王妃のいない現在、中ぶらりんな彼女は先王妃、つまりは国王アレグロの母に仕える侍女の末席を与えられているが、このままで、女王となつたソナチネに仕えることになるだろう。だが、ヘオンの目的はそれではない。

「ヘオンいるの？さつきソナチネを見た気がするんだけど…」

昼食の食器を下げさせた後、そのままテーブルについたままだつたヘオンの部屋にまた新たな訪問者が来た。

「トオソン？いつも言つてるでしょう。ノックくらいしなさい

入つて来たのは、同僚・トオソンである。金髪に茶色い目、姉妹でもなければ親戚でもないのにヘオンとビートなく似た娘である。外見上はヘオンに似ているが、性格は全く違う。同じ年なのに聰明なヘオンと比べるとそそかしく、これでよく王妃付きに選ばれた…と彼女にため息をつかせるほど落ち着きのない娘なのだ。

「そうじやあなくつてえ。今ソナチネと会つてなかつたつ？ 元気だつた？」

この娘は少し変わつてゐる…女騎士のソナチネに憧れを抱いているらしく、ソナチネがいると明らかに浮ついて、構つてしまふがない。

「…もう仕事に戻つたわ。私たちも行かないよ

「ヘオン。ソナチネに何を言つたの？」

わずかに息を呑む。そうだった、トオンはこんなでも意外と鋭いところがあるし情報通だ。見られたのは失敗だった。

「…別に」

言葉少なく答えるヘオンに、トオンは一気に核心をつぶ。

「そういうのは、やめた方がいいと思うよ。気持ちはわかるけど…ヘオンがつらい思いをするだけじゃない…」

思わぬ労りの言葉に、淑やかな侍女の仮面が外れただの…普通の恋する娘としての己が出てしまったようになるが、必死で涙をこらえるヘオン。

「わ、私がそうしたいんだからいいでしよう。何か陛下のためにできることがあることがあるならやつてもいいじゃない。後悔したくないの」

ヘオンが片思いを続ける相手…国王アレグロは消えた王妃・コトネを決して諦めることはないだろう。だから彼女は彼のためにできること、彼が思い残すことなくコトネの元へ行けるよう、微力とわかつていても協力しようと思つている。身分的に自分にはお呼びのないうことなのはわかっているし、彼が国のために愛のない結婚をするのは自分が報われないこと以上に嫌なのだ。

もとより叶うことのない想いであることは承知だ。ヘオンが初めてアレグロに会つたとき、彼にはすでに婚約者がいたし、コトネのことがあってからは他が眼中にないことほほびに理解できた。

「わかつているけど。ままならないんだな…」

トオンは思う。もちろん仕えていたコトネのことは好きだった。率直な人柄が面白いし、あの一度ハマると止まらない滔々としたしゃべりは、自身もおしゃべりのトオンをして感じ入らせるほど、流暢でなめらかだつた。ときどき故郷の話になると、知らない単語がたくさん出てきて理解できなかつたが。

コトネのことは気に入っていた、それでも、と思わずにはいられない。

（あんな変人を本氣で想う奇特な女の子がここにいるっていうのに
なあ…）

コトネしかだめなのだろうか。さすが変人。

泣くことができず、うな垂れるヘオンを見てトオンはそっと部屋を出た。これで十分つづいた、一人にすればきっとヘオンは泣くだろう。そうやって少しづつ忘れていくしかないのだ。彼女はもう、自分で手放すことを選んだのだから。

侍女の懇願（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。お詫び申します。

文官の状況判断 ものいち

10・文官の状況判断 そのいち

ヘオンとの昼食を経て、一連の出来事ですっかりぐりぢやぐぢやになっていたソナチネの心中は少しばかり落ち着いた。これまで完全に周りに呑まれ、なんとかして回避できないかと悩むばかりの彼女だったが、少し距離を置いてこの状況を見つめることができ必要ではないだろうか？

（正直、姉上やマルカート伯は何を考えているのか私にはサッパリわからないし…信用できないうてほどでもないけど。結婚云々や反省罪も恐ろしいけどこのままじゃいけない…）

このままこゝと本当に女性にされてしまつ。生憎と2・3日の説得で曲げてしまつとなやわな騎士魂をソナチネは持ち合わせていい。

この後の予定のために王宮の回廊を近衛の詰め所へと歩きながら、考え込むソナチネの目にある扉へと入つていいく人物が飛び込んだ。もちろんソナチネには予定があるし、約束の時間も迫りつつある。誰かに相談など持ちかけている場合ではない。

その扉をじっと見つめるソナチネ。すると彼女にしては珍しい意地の悪い笑みを浮かべる。

（（（（（で、思い通りにいかないことを示しておくれのも悪くはないかも？）

さすがに国王陛下肝いりの舞踏会をすっぽかす勇気はないが。

悪戯をする子供のような心地に戻ったソナチネはやや自棄になつて、いる自分に目を瞑り、まわりに誰もいないことを確認した後、その扉をノックした。

* * *

「はつきり言わせてもららう。出て行け」

一人で室内にいた人物は、入室の許可を出す返答に扉を開けて足を踏み入れたソナチネが挨拶する間もなく、彼女の顔を見分けると直ちに退室を求めた。

「…久しぶりなのにそれはないんじゃないの？あれ、5年？6年？
けつこう経つわね」

開口一番に拒絕の言葉を吐かれ、少しムッとしたソナチネだが彼の毒舌には慣れたものだった彼女は軽く流した。

彼 レジエロ・スケルツィアンド、今は王宮に仕える文官である はソナチネの幼馴染の一人であり、かつて一緒に国王アレグロの遊び相手として王宮に上がっていた頃からの付き合いだ。成長したアレグロが遊び相手を必要としなくなり、同時にソナチネも騎士団に入るため馬術や剣術を習い始め多忙となつたのでそれからほとんど会う機会などなかつたが。

確か最後に顔を見たのは

「6年前かな、陛下の即位式の祭典で会つたような、会つてないよ
うな」

「相変わらず可哀そうな頭だな。耳まで悪くなっていたのか？さつわと出て行け」

「だからさ、それはないんじゃないの？会つてもないのに私が何かした？」

「ふん、じゃあ言い方を変える。俺は忙しいんだ。お前に用もないし」

すげなく追い返そうとする彼にはかまわず、ソナチネは室内に無造作に置かれた椅子に腰掛けた。彼の態度がツンケンしているのは子供の頃からで、当時からそれを無視してずけずけと入り込むことが彼女にとっては当たり前のことだった。

「へえ、じつて文官の部屋でしょ？今は何してるんだっけ？」

「…本当に相変わらずだな。むづくみつと相手の都合を考えるよ…」

思い切り苦虫を噛み潰した顔をしたレジエロは深いため息をついた。久しぶりに会うというのに以前の力関係が少しも変わっていないことに深い慨嘆をおぼえる。

レジエロの外見はあまりバッとはしない。くすんだ灰茶色の髪と茶色い瞳、顔立ちも地味だし、風景に溶け込んでしまいそうなほど人目にとまらない。昔から室内派で体を動かすことが得手ではないので体格も良くはなく、その上猫背だ。彼の王宮内の仕事部屋も、部屋の主に合わせてか一応は整理整頓されてはいるが机の上は書類で埋め尽くされる程度の荒れ具合、家具調度も王宮から支給された品で、ごくごく普通の仕事部屋だ。

だがレジエロの服装は少し変わっている。派手で珍妙な格好という

意味ではない。官吏に支給される制服ではないのだ。黒いフード付きローブのそれは普通は魔術師が纏う物だ。

「きいていい?」

「駄目だ」

ソナチネの視線の先から、その内容を察し即答する。

「いつから魔術師になつたの? 確か弟子入りしようとしたら断られたって……」

「駄目だって言つてるだろうが!… お前はそんなことを質問しに来たのか? 今さら」

「でも魔術師のローブでしょ? 資格のない人間は着ちゃいけないんじゃ」

この国では魔術師は貴重だ。彼らはほとんどが国に仕える王宮魔術師で、その継承は師弟制によつてなされる。だから魔術師になりたい人間は皆王宮魔術師に弟子入りを志願するのだが、大抵は断られる。何故なら魔術師になるには素質がなくては不可能だからだ。魔力という絶対的な素質が。そして魔術師になれるほどの魔力を持つ人間はめつたにいない。

魔術師たちは国から最低一人以上は弟子をとることが義務付けられているが、それほどの魔力を持つ人間がめつたにいないため彼らは自分で魔力の強い人間を見つけ出し半ば強制的に弟子にするのが彼らの慣習となりつつある。

そのため自分から弟子入りを志願する魔力のない一般市民は誰でもすげなく追い返されるのだが魔術の有用性や待遇の良さに憧れ結局志願する者は後を絶たない、というのが現状なのだ。

「…」これはつ、魔術師長が直々に着用の許可をくれたんだ。俺は確かに魔術師じやないが、魔術理論は勉強したから。色々と研究して、それが役にたつたからその褒美で」

魔術師は子供の頃からのレジエロの夢だった。だから王宮魔術師全員のところへ弟子入りを志願しに行つたがその全員に断られた。全て同じ、「魔力が（からきし）ない」と。

当時は絶望した。幼いレジエロは今と変わらずあまりパツとしない子供だった。それぞれに優秀だったり、家柄が良かつたり、見目麗しかつたりと特出していた王子の遊び友達の中で彼は完全に埋没し、また周りも彼を軽んじていた。彼の拠り所は大人になつたら魔術師になつて国に仕える夢を叶えることだけだった。

夢を絶たれたすぐには立ち直れなかつたが、レジエロはこれでなかなか執念深かつた。文官として王宮に仕えながら独学で魔術理論を学んだのだ。努力を惜しまぬ上に頭だけは良かつた彼は、普通なら魔力のない人間に理解できるはずのない魔術理論を修めることに成功し、拳句の果てにはそれを進化させたのだ。

その努力は周囲からも認められた。全く素質のないところから自分で使えない魔術を進化させてみせたレジエロに、魔術師長から魔術師にしか纏うことの許されないロープを贈られたのである。彼のためだけに作られた、特別製である。

レジエロがそこまで詳しく説明することはなかつたのだが、それだけでも十分だつた。

「えーっ！…すごいっ！…どうしたらそんなことができるの…？」レジエロは子供の頃から頭が良かつたけど、そんなことまでできるんだ…すごいなあ

レジュロにひとつては予想外の反応だつた。すっかり感服したソナチネはニコニコと笑いながら素直な贊美を送つてゐる。その、真つ直ぐな感情を向ける彼女を前に一瞬呆けてしまつ。

(…そういうやうやつだつたか。才能もないくせに諦めの悪い人間とか言われたからなあ…)

疑心暗鬼になつていた。魔術師長に認められたとき、それはそれはやつかまれたので。

子供の頃もソナチネだけは斜に構えることのない、素直な態度で接してきていた。王子の遊び相手として集められた子供たちの中で、二つ年下の女の子という彼女も浮いていた。最初の頃は、同じく周囲から弾かれつつあつたレジュロによく纏わり付いてきたものだつた。その後、ソナチネが男の子以上に活発だとわかると王子が自ら輪の中に引き入れ、同時に一人の交流もほぼ終わつた。

それはそれとして。

「…結局、なんか用があるのか？」

「ん？ ああつ！ そうだった。相談したいことが一つ」

「！？ 賴むつ、それだけは止めてくれ！ 僕には責任は取れん！」

「まだ何も…。その言い方はやつぱり何か知つてるんだ…」

「知らん。俺は何も知らん。お前もここには来ていない。そういうことにして頼むから今すぐ出てつてくれ

今度こそ実力行使で部屋から追い出され、ソナチネの腕を取ろうとするレジエロだが、そう簡単に素人に手をかけられるほど彼女も甘くはない。相手の動きを見て、椅子から立ち上がり身をかわした彼女は素早く彼の後ろに回りこむ。

「やつぱりわかつてゐるじやない!! ねえ、レジエロは頭がいいのが自慢でしあう。私の相談に乗つてほしいの。どうすれば私は逃げられる? といふか陛下の異世界行きは止められないの? 魔術師長と知り合にならわからない?」

一気に言つてしまつ。これで聞かなかつたことはできないだろう。往生際悪くも耳をふさぐレジエロだが、ソナチネは彼の耳元でわめいたのだ。

「お前は疫病神だ…」

「そこまで言つて…? 待つてよ、そんな深刻なの? 私、生き延びられる?」

がっくりと両肩を落とし、しゃがみ込むレジエロに詰め寄るソナチネだが、思いもかけない言葉を返される。

「いや…そりゃ死にやしないだろ? なんだそんな心配をしていたのか?」

呆れ顔で言われ、肩透かしきへりつソナチネ。

「相談か…。言つておくがお前の相談に乗るのは今の俺にとって非常に都合が悪い。だがそんなことで悩まれていても時間の無駄だな。特にお前の頭じゃ。しょうがない、きいてやるから一応話して

みる

失礼な言葉を挟まれムツとするソナチネだが、せっかくその気になつてくれたのだから、と話し出す。

「……で、今は逃亡中、と」

一昨日からの一連の出来事を順を追つて話した。自分で消化しきれないでの、あつたことをありのままに言つただけだ。

レジエロはどうと、頭を抱えてうめこっていた。

「うそれで、なんで俺の部屋に入つてくるんだ…。理解できん。何故だ、嫌がらせか!? そんなに俺を恨んでるのか!?!?」

「は? 恨む?」

相談しているのに、いきなり心当たりのない話が出てきて、目を瞬かせる。子供の頃の話だろうか、ソナチネの方にはレジエロ恨むようないい出はない。むしろ姉のように頭のいい彼には憧憬を抱いていた。

「…もしかしてお前はきかなかつたのか?」

「何を?」

「う、えーっとだな。うん、知らないならいいか。忘れてくれ」

再び予想外の反応をされて少し悩むレジエロだが、知らないのなら自分から蒸し返すこともないかと思い、なかつたことにした。その過去の件で、ソナチネに対して弱味のあつた彼は、自分の仕事は置

いて、ひとまず眞面目に彼女の相談に答えることにした。

「じゃあ、二人とも椅子に座る。

「まず、陛下の異世界行きだが。確かに騎士団長が人を送り込んで調べてるな。魔術師長も探されていることに気づいている。だが…

難しい顔で手をあごにやる。考え込むときの彼のクセだ。

「お前には氣の毒だが、陛下を止めるのは無理だろう。この異世界行きの魔術を作ったのは陛下ご本人で、魔術を行使するのも陛下だ。つまり陛下がその意思を変えない限り、まわりから阻止することはできないな」

「陛下は魔術が使えるの…？ 初めて聞くわ」

「ああ。元々魔力お持ちで、そのお立場から、師について修行をするということはなかつたそうだが…コトネ様のためにこの3ヶ月で魔術を修めたそうだ」

ソナチネは、どこまで執着心が強いのだろうと背筋を凍らせる。魔力を持つとはいえ、魔術の修行とは普通は何年もかかるのではないのだろうか。

「それなら、コトネ様を連れて戻つてくれればいいじゃない…」

「いや、おやうですが、あちらで一度渡つてしまえば戻つては来られないという話だ」

「じゃ、行けるかどうかまだ試してないってこと?」

「そうだな、理論は完成しているだろ？が…術者である陛下本人がその場で調整する んだろ？」

「そんな無茶なことを… するつもりなんだ」

なんという執念。やはり国王は普通ではない。

「とにかく、アレグロ陛下を国に引き止めるのは不可能だ。それはいいな？」

「よくはないんだけど。」

「だらうな。あとは王位の継承権か？ そうだな… それに関しては言い換えればコン・フォーロ家とコン・ブリオ家の争いつてことになるな」

「コン・ブリオ家の当主は確かに老齢だし、病気も重い。その弟もマルカート伯の言った通りだ。この一人は除外していい」

「そんなんに簡単に考えていいの？ 本人がお年寄りでも自分の子孫に王位を継がせられるなら、国王になろうと考え方たりしない？」

昨日からの疑問を差し挟む。

「いや、どうだらうな。コン・ブリオ家の兄妹についてはお前の方が詳しいだらう？ あの一人が国王についているのは、親でもためらつぞ」

「そ、そうかな」

顔を引きつらせたソナチネはコン・ブリオ家の一人のうち、妹のフエルマータのことを思い出す。思い浮かんだのは最後に見た彼女の凄まじいとしか言いようのない姿だ。

あれは、そう、一年半ほど前のことだったか。

文官の状況判断 やのこち（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の状況判断　その二

11 文官の状況判断　その二

当時、姉はまだ国王の婚約者だった。将来の王妃として彼女は様々な夜会に参加しており、ソナチネもアレグロの参加できないような場合はその付き添いとして出席していた。そして事件は姉妹二人で招待された、ある夜会で起きた。

「あら、誰かと思えばコン・フォーロ家のじゅじゅ馬ではないの」

まずは、標的である姉ではなくその妹に爆弾は投げつけられた。

声をかけたのは、派手なドレスに身を包み豪奢な宝石類をつけたコン・ブリオ家の令嬢フェルマータであった。ソプラノと同い年で美しい黒髪を持つ艶麗な姫君だが、この日は少し様子がおかしかった。彼女の長年の横恋慕は有名だった ソナチネの姉・ソプラノの婚約者である国王アレグロをなんとか自分のものとしようとなりふりかまわず行動していたので、王都の庶民でさえそのことを噂するほどだった。

両親であるコン・ブリオ家の当主夫妻は、娘の行状を諫めるでもなく放置していた。本来なら、フェルマータとて大貴族の令嬢だ、早い段階で適当な相手と娶わせるべきであろう。

一方、ソプラノだって鬼ではない。何より婚約破棄をソプラノ本人が望んでやまなかつたのだから、さっさと譲ってしまえばよかつたのだが フェルマータその人に問題があつた。

淑やかに手に持つた扇で口元を隠し、罵るフェルマータ。

「いつ見ても、貴族にふさわしくない無骨で貧相な格好ね。まったく

く、こんな妹を放置するソプラノにも呆れるわね。国王陛下だって、
婚約者の妹がこんなのでは恥ずかしいでしょうよ

性格が悪いのだ。ついでに口も。何とか国王を手に入れようと努力するのにはいいのだが、彼女の場合ひたすら敵すなわちソプラノを攻撃する形となつている。

ことあることに悪評をふれ回られたり面と向かつて罵られる」とソプラノは苛立つた。フェルマータと違ひ体面を気にする性質であつた彼女は表立つて対立することはできず、いつも言い返さずに笑顔でかわすばかりだつたからだ。そんな理由もあつて素直に婚約破棄をしてフェルマータを喜ばせることは願い下げだつた。

恋敵を罵るフェルマータ嬢とそれを憐げな笑顔でかわすソプラノ嬢。

そんな評判がたち、評価の落ちたフェルマータはさらに攻撃を増した。その対立が頂点に達したのが、この夜会であった。

* * *

「それで、気が付いたらフェルマータが姉上に飛びかかつてたのよね

今でもソナチネにはよくわからない。何故そこまでフェルマータが荒れていたのか。それまで普通に言葉をかわすだけであつたのが（一方的な罵りだが）、突然フェルマータはソプラノめがけて飛び掛り、その頬に爪をかけようとしたのだ。横にいたソナチネだけではなくまわりにいた招待客も加勢して、ようやくフェルマータを抑えことに成功したが、それまで暴れに暴れた彼女のドレスも髪もめちゃくちゃだつた。姉に怪我がないことが何よりだつた。罵られて

いたこじらりではなく、フルマーテがなぜ暴れなければならぬのか。

「女の世界はわからん、が。ソプラノ様は完璧過ぎたんだろ？」「

「うーん。まあ、嫉妬だったのはわかるけど

女性としても人としてもソプラノにはかなわない、そんな想いに追い詰められていたのだろうか。

「やつぱりあの件があるから、フルマーテ嬢を女王に、という話にはならないだろ？」

案の定この事件の話は王都に広まり、父であるコン・ブリオ家当主はフルマーテを屋敷から出さなくなつた。この一年半、彼女の姿はほとんど見られない。それはソプラノが婚約破棄しても、国王とコトネの結婚が発表されても同じだつた。ソプラノと同じ年の彼女も立派な嫁き遅れの範疇なのに大丈夫なのだろうか、と自分もその範疇に入りつつあるソナチネは思わずにはいられない。

「でもそれならフルマーテの兄上様は？ 会つたことがないわ」

「俺も直接会つたことはないな。歳が離れているから今は30前くらいだつたと思うが

それなら国王として丁度良いのではないのだろうか。21歳のソナチネでは若輩だが、30前なら落ち着きも経験もそれなりに備わっていることだろう。女王より王の方がまわりの混乱も少なくてすむ。

「だが、あの人噂を知らないのか？」

「うわわー。」

「ああ。あー、でもな、何の噂かは俺の口からは言えん。噂は噂だからな」

「何よ、そこまで言ひておいて」

「噂を吹聴したりしたら、俺の品性が落ちる。とにかく、センシア様のことは気にしなくていい……本人も国王は願い下げだらうよ」

そんな風に言い切れるといふことは、その噂とやらはかなり確実性が高いのではないのだろうか。事実、コン・ブリオ家の長男・センツアが王位に相応しくない事情を抱えているのなら、ここで教えてくれてもいいのに、と腑に落ちないソナチネであった。

「まだ何かあつたよな。そいつ、マルカート伯の思惑だろ？。他の重臣たちも」

それほどまでに話を変え、さらには追い出したいのか、急いでソナチネの悩みを解消しようとするレジロロは早口で言つた。

「伯爵のことは心配するな。評判通りの温厚な人物で大体合つている。確かに野心はあるだろうが、早いうちから女王にとりいつておいて今の地位を盤石にしようつゝところだらう」

「陛下が味方につけている他の重臣たちも似たようなもんだ。お前なら操りやすい、誰でもそう考えるだろ？」

「……こつも思つんだけど、私ってまわりに馬鹿だと思われてない？」

そりや姉上ほど頗良くはないけども。そこまで馬鹿じゃない、はず

「そうか？今、馬鹿にした憶えはないけどな。そんなこと言つたか？」

「あれ？ そう？ 私の考えすぎ？」

自分で証明したようなものである。どこまでもバカ素直なソナチネに少しばかりの不安をおぼえるジェロだった。

ついでに大臣一人ひとりの詳細まで噛み砕いて説明した。ソナチネにしてみれば、なんとなく思いつきで訪ねただけなのだが、思いの外、良い人物のところへ来たと言える。

ソナチネの口下の悩み、まわりの迷惑などが少し把握できたが、知らぬ間に長く話し込んでいたおかげで時間の経過に気が付かなかつた。

大方の話が終わつた頃だった。

「…もう田代が陰つてきてない？」

「ん？ もうこんな時間じゃないか！？ あああ、仕事が…」

ソナチネとて時間がない。いくら彼女でも舞踏会そのものをすっぽかすつもりなどない。いつまでも逃げていてはいられない、立ち上がり急いで部屋を出ようとしたと扉に手をかける。

「じゃ、ありがとう…！」のお礼は必ず…。」

「えっ、おい。ちょっと」

散々つき合わせておきながらあつさりお礼を述べ去つていいくソナチネに、レジエロの伸ばした手と言葉は届かなかつた。ひつかき回すだけ回していくた、突然の嵐のような幼馴染の訪問はよつやく終わつたのだった。

「…あれが女王か…」

暗くなりつつある仕事部屋に一人残されたレジエロは先行きに大いに不安を感じた。さらに「あいつ背ばつか高くなつて…」とあまり身長差がなかつたことにちょっとだけショックを受けるのだった。

文官の状況判断 ものに（後書き）

読んで下せりてあらがとうござります。

くすりと笑える後書きって好きですが、中々浮かばないもんですね
。 。 。

魔術師の申し込み（前書き）

魔術師とか出でてきますが、魔法は力ケラも関係ないです。
ひたすら会話と人間関係の描写に徹しています。

魔術師の申し込み

12、魔術師の申し込み

レジエロの部屋を勢い良く飛び出したソナチネだが、彼女にしては珍しく、この後どうするかちゃんと考えがあつて行動していた。

近衛の詰め所や騎士団の宿舎へ行くと、すぐに伯爵の迎えに捕まるのは目に見えている。今は捕まりたくないソナチネは、人目を避けながら自分の計画通りに動いた。

* * *

その夜、伯爵家の屋敷で開かれた舞踏会は招待主の心意気を示してか、個人で主催するものにしてなかなか盛大なものだった。飾られた花々は南国から特別に取り寄せた一級品、美しい音楽を奏でる楽団も一流どころである。伯爵邸の舞踏室、大広間や密間などが開放され廊下を挟んで一続きの会場として設えられている。代々続くマルカート伯の屋敷には歴史ある立派な調度品が揃い、踊ることに疲れてもそれらを鑑賞しているだけで楽しめる。

招待客は紳士貴顕や騎士候たちまで幅広く、また着飾った令嬢たちも混ざって華を添えている。彼らが集められた表向きの理由は伯爵夫妻の結婚記念日を祝うものなので、少々幅広すぎる感もあるが、現職の法務大臣の主催である、異を唱える者などいなかつた。

招待客が揃い、舞踏室で一曲目のダンスが始まった頃、いきなり姿

を消して伯爵夫妻に非常に気を揉ませた影の主賓がよつやく伯爵邸へと自らやってきた。

影の主賓 コン・フォーロ公爵令嬢ソナチネが会場に足を踏み入れたとき、その衣装を見て驚いた招待客が半分、驚かなかつた招待客が半分だった。

ソナチネの衣装は非常によく似合つていた。白が基調で要所には青を配し、金のボタンの並ぶそれは、彼女の所属する第一騎士団の式典用の礼装である。顔を上げ、礼装用の白いブーツで颯爽と歩く彼女はどこから見ても凜々しい騎士である。

普通なら全員が驚くのだろうが、これがソナチネにとつて夜会でのいつもの正装である。驚かなかつたのはこの舞踏会が彼女の婚探し（？）であることを知らない一般の招待客や令嬢たち、驚いたのは彼女の婿候補として呼ばれた青年たちとその関係者及び伯爵邸の人間である。それが丁度半々だったということだ。

ソナチネが舞踏室に入つても、しばらくは誰も声をかけなかつた。主催者である伯爵夫妻は一人とも主催者として最初の一曲を踊つているところ、本来ならダンスが始まると前に婿候補を彼女の元へ紹介しておくはずだったのだがそれができなかつた。

また、婿候補たちも騎士の礼装で来たソナチネに自らダンスの申し込みをかけることもできなかつた。彼らの方は夜会服がほとんどだが、同じような服装をした人間をダンスへと誘えるものだろうか。

そんなソナチネに、夜会での恒例の行事が起きた。

「あ、あのソナチネ様。『機嫌よつ

「ああ、これはアービレ様ではありませんか。『機嫌よつ。今宵は楽しまれておいですか？』

爽やかに、挨拶をしてきた顔見知りの『ご令嬢に笑顔をかえすソナチネ。その笑顔に頬を赤らめるのは可憐な』ご令嬢。

夜会でのソナチネは『ご令嬢たちの憧れの存在である。凜々しく整つた顔立ち、騎士の正装の映える細身の長身、さらにいつも紳士的な態度が崩れず優しい。そして何より同性であることは、特に若く初心な令嬢たちの心の垣根を取つ払いやすい。

最終的に、ついたあだ名が「白銀の騎士様」だ。ソナチネの銀髪と白い正装からついた、「ご令嬢たち憧れの男装の麗人の呼び名である。

一人が勇気を出して声をかけると、あとはぞろぞろと湧いてくる。あつという間に、パートナーそつちのけとなつた『ご令嬢たちに囲まれたソナチネはますますダンスに誘いづらい存在となる。その姿はむしろ男性たちの羨望的だった。

しばらくは4、5人の『ご令嬢たちに囲まれ、ダンスに参加することもなく隅に置かれた長椅子で談笑していたソナチネだつた。が、ふと顔を上げるここにいるはずのない人物を見かけた気がして、思わず輪の中から出でてしまった。そこへ『ご令嬢のものではない声がかかる。

「不躾なお願いなのは承知していますが、少しお話できませんでしょうか？」

心の中で舌打ちし、声に振り返る。せつかく作つた『ご令嬢たちの壁を自分からでてきてしまった。

そんな内心を覆い隠し、（ソナチネにだつてそのくらいはできる）

声の主、歳の頃は20代半ばくらいの青年に向かへた。

「ああ、これは『無礼を。本当はマルカート伯爵に紹介いただく予定だったのですが、伯爵は多忙なようとして。自分で紹介させてください。私は宫廷魔術師を勤めます、ヴィーデ・スピリトーゾと申します。以後お見知りおきを」

口で言つてゐるほど遠慮の色のない、余裕さえ見られる笑みで挨拶した度胸のある青年・ヴィーデを見て、ソナチネは驚いた。

（すい！－これは陛下以上なのでは…）

国王アレグロや美女と名高い姉のおかげでソナチネは美形に耐性がある。ヴィーデはそんなソナチネをして目を見張らせるほどの超絶美形である。濡れたような輝きを放つ黒い髪は肩下までのばされ、瞳は煙るような灰色の入った紫、白皙の顔は達人によつて彫刻された一級品の芸術であるうかといつほど完璧な男性的美をかたどつてゐる。その低い声までもが心地よく響いて美しい。

ここで彼がソナチネの手をとり、口付けでもして見せたら大した見世物となつただろうが、そこまで気取るつもりはないらしい。そんなことをされたら彼女だつて全力で引いたろうし。

「魔術師でいらっしゃる？　あ、えー私はソナチネです。ソナチネ・コン・フォームです」

思わず聞き返してから、我にかえり自分も名乗る。

「ああ、もちろん存じていますよ。それに、私は正真正銘、宫廷に仕える魔術師です。と言つても、ここに杖はないので証明できませんが。伯爵もいませんし」

その美貌で朗らかな態度に出られると、なかなか圧倒されてしまうものがある。

「あの、いえ、疑つたわけではなく。失礼いたしました。それで…？」

「もちろん、一曲お相手願えないかと。いかがでしょうか？」

余裕の美形さんは、少々あせるソナチネに追い討ちをかけるような言葉を発する。

彼女は動搖を表に出さないようなんとか踏み止まっているつもりだが、突然始まった一人のやりとりを、固唾を呑んで見守っていたご令嬢たちが一気に色めきたつたので本人の努力はあまり報われなかつた。

つまり、ソナチネが舞踏会で異性からダンスに誘われたのは、本当にこれが初めてのことだつたのだ。

これまで姉についてさまざまは夜会に出席していながら、ソナチネは舞踏会へ女性用のドレスで行つたことはなかつた。何しろ自分のお披露目でもズボンだつたのだ。

その代わり、女性と踊つたことなら何度もあつた。ソナチネから誘つたのではなく、いつも勇気を振り絞つたご令嬢から声をかけられる。そんなとき、彼女は愛らしいご令嬢たちに目を細めながら相手をする。

「…私はかまいませんが」

嘘である。

とてもかまう。ソナチネはいつも女性とばかり踊るので、男性パートなら自信があるのだが、女性パートとなると最初に舞踏の教師に

ついて習つて以来踊つていない。だが、ここでそれをヴィードに告げるわけにもいくまい。しかし、彼は本氣で騎士の服を着た人間と踊るつもりなのだろうか。

ええい、なるようになる！…と破れかぶれとなりながら差し延べられた手をとろうとしたソナチネに、救いの神が現れた。

「ソナチネ様！こちらにいらっしゃったのですね。お出迎えもせずに申し訳ありません」

忘れかけていたが、今回の主催者マルカート伯爵夫妻がようやくダンスの輪を抜け、ソナチネのもとへとやってきた。遅刻し、勝手にやっていたソナチネが悪いのだから、彼らが謝る点はどこにもない。

「とんでもありません！ 遅れた私が謝罪しなければならないところです。せっかく色々とご用意いただきましたのに…」

救いの神に、ドレスやら装飾品やらの準備の件も込めて恐る恐るといつた体で謝る。確信犯だったのだからもう少し堂々としているべきではないだろうか。

「まあ、ソナチネ様。お気になさらずに。また次の機会がありますわ」

伯爵夫人の最後の一言に戦慄をおぼえるソナチネ。

「それで、ソナチネ様はもうスピリトーブ君と会われたのですね。ほら、例の件の一人ですよ、彼は」

伯爵の言葉の後半はソナチネ一人へ密かな声で告げられた。媚候補

とこう意味だらうが、さすがにソナチネにだつてわかつてきている。

やつぱり私バカだと思われてない?といらない方向へ思考を向けていたソナチネに無情な声が突き刺さつた。

「どうやら邪魔をしてしまつたようですね。どうぞお一人でお楽し
みください」

救いの神が降り立つたのはほんの一瞬であつたらしく、氣を利かし
た伯爵夫妻はあつと言つ間に別室へと消えた。

先ほどの危機的状況は何も変わつていなかつた。

横合いから声をかけられ少し調子を崩してしまつたが、再びダンス
を申し込むヴィーデに、今度こそ大人しく手をとられるソナチネだ
つた。

「…もう少し楽にして下さつたらいいんですよ。エスコートは私の
役目です」

ダンスが始まつてしまはらく経つたところで、ヴィーデが話しかけた。

はたから見ると奇妙な二人組である。ソナチネはその衣装と耳のあ
たりまでしかない髪のせいで男にしか見えず、まるでヴィーデと二
人、男同士で踊つてゐるようなのだ。そのせいで周囲の視線を集め
てしまい、彼女の慣れない女性パートでの踊りはますます覚束ない
ものとなつてゐる。踊つてゐるとは思えないほど、足がついていけ
ていない。

「…申し訳ありません。足だけは踏まないよう気をつけます」

こうなると完全に赤面してしまい、いたたまれないソナチネは普段の彼女からは考えられないぐらいの小さな声で詫びる。緊張のあまり、喉までうまく機能してくれない。

「いえ、大丈夫です。…失礼なことをおききましたが、ダンスは不得手で？」

むしろ少し上機嫌となつたヴィードが尋ねた。彼は長身のソナチネよりもさらに背が高い。彼の目には俯いた彼女のつむじが見えるだけで、その姿は彼が前評判として聞いていた「白銀の騎士」というあだ名からは想像すらしなかつたものだつた。初対面の彼は彼女を「こんなに緊張しているとは、純情で可憐な姫君ではないか」と何か違う方向へ印象を抱いたのだった。

余談だが、ヴィードの方もなかなかすっとぼけた人物だ。彼はいつも己の美貌が視線を集めることに慣れているためか、自分たちが周囲の注目を引く理由をあまり深く考えてはいなかつた。いつもと違ひ相手のドレスに躊躇心配がないことも、ソナチネの手が剣だこで硬くなつていても、甘い香水の香りが漂つてこないことも普通なら違和感を感じるはずなのだが。

「いいえ、そういうわけではないんです」

女性パートが苦手なだけです、とは心の中の言葉だ。

「ところで、ソナチネ様は私がお誘いした理由はご承知ですかね？」

ダンスのステップを合わせるために必死のソナチネだが、その言葉に早速おいでなすつたか、と身構える。

「承知しているつもりです。あの、ヴィード様はビアお考えで？おかしな話だとは思われませんか？陛下のことです」

状況に負けていられない、とばかりに強く尋ね返す。

「ああ…。私は宫廷魔術師だと申し上げましたね？実は陛下の魔術の完成に微力ながらもお手伝いさせていただいたのです」

おかしなことだと思っていたら手伝いなどしませんよ、と言外に伝えてくる。

「…では？」

「はい。もちろん、名乗りを上げさせていただくためにこうしているのです」

「…」
じいじ、とばかりに効果音をえつきそつと破壊力抜群の美形の微笑みでソナチネの顔を覗き込むヴィード、さすがの彼女も元から紅潮した顔がさらに温度を上げていくを感じた。このまま腰砕けになってしまいそうな自分を、鍛えた筋肉と騎士の根性がなんとか支える。

（どび、どうしよう。心臓苦しい。え、何、恋に落ちたとか？　私は面食いだったの！？）

経験したことのない動悸が胸を襲う。いや、いくらなんでもだめだ。婿候補が美形だったので決めたとか、恥ずかしきる。

「少し、私自身のことをお話してもよろしいでしょうか？私の両親は幼い頃に亡くなり北の地方の孤児院で育ったのですが、12歳の

とき現在の師に見出され、魔術の修行を始めました。今は魔術師長のもとで、魔族との間で共同で魔術の研究を行う計画がありその調整役を務めさせていただいています」

すでにダンスピーロではないソナチネを置き去りに、自己紹介を続けるヴィード。相手の空気を読んでないあたり、やはり彼は大物だ。

しかし、これで調整役が務まるのだろうかと心配にもなる。

「今は国内におりますが、魔族との連携が本格的になりましたら、行つたり来たりの生活になるかもしれません」

上機嫌のまま話すヴィードは、そうはなつても決してソナチネ様に淋しい思いなどさせませんよ、安心させるように笑った。

再び動悸が激しくなるソナチネだが、それでもふと疑問がわく。

「そういえば、先の魔族との戦争のときにまどうされていたのですか？」

魔術師なら、一緒に従軍していたのではないのだろうか。しかしヴィードの姿なら話題にならにはずもないのに一度も彼の名をきいた覚えがない。

途端に悲痛な表情を浮かべるヴィード。美形の苦しげな表情はそれだけで絵になる。

「実は魔族の侵攻が起った当初の頃、私は西の地方の駐屯地にいたのです」

「ここでダンス曲が一旦終了したのだが、話が途中だったのでヴィード」

「その導きでひとまず一人で端の長椅子に落ち着いた。ソナチネは慣れないダンスがようやく終わり、話を聞くことに専念できた。

そして、ヴィードの話によると。

ヴィードと、彼が派遣されていた西の防衛を担当する第三騎士団は当初、魔族の侵攻に対し不意打ちをくらった形だった。駐屯地が突然の攻撃にさらされた時、運悪く魔族の魔術の最初の一撃をくらつたのがヴィード達だったそうだ。

「予想外のこととして、防御が間に合いませんでした……。私はこうして運良く生きていますが、一緒にいて亡くなつた騎士の方もおられました……私の責任です」

「そんな……不意打ちだつたなら仕方がないです」

「いえ、それが事実です。しかしその時私は重傷を負いました。怪我を負つた私を助けてくださつた方がいて、すぐに王都へ送られました。その後は王都で怪我を治すことと、私の受けた魔族の魔術の特殊性を研究する役目をまかされたので掃討軍には従えず、ずっと王都にいたのです」

「しかし、失礼ですがそれでは今のお役目はおつらいのでは？魔族に……恨みはないのですか？」

「そうですね……親しくしていた騎士の友人を一人亡くしました。しばらくは彼のことと思い出して、申し訳ないといつも謝つてばかりでした」

その悲しみと後悔が消えたわけではないことが、抑えた表情から伺えた。

「しかし、友人は豪気な人間でした。いつまでも私が謝つてばかりいると死んだ彼が背中を叩きに来るぞ、と彼の奥方にも言われました」

生前からそういう男だったもので、と憐れに笑う。

「私の中に魔族への恨みがないと言えば嘘になります…ですが、後ろばかり見てるのはやめようと思いまして。魔術師長の命令を受け入れました」

あれで彼らはけっこう普通の人間と変わらない感覚を持っているのですよ、と締めくくって笑った。

話が終わつたヴィードは、「いつまでもあなたを独占していくは恨まれますから」といつてあつさり別室へ下がつていつた。だが、最後に「私の気持ちは真剣です」と跪いてソナチネの手を握り、彼女の顔を再び真っ赤に染めていつた。

魔術師の申し込み（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

文官の言い訳

13・文官の言い訳

ヴィードが言つていた通り、彼が誘つたことで勢いがついたのかその後のソナチネにはひつきりなしにダンスの申し込みがなされた。自分なりに仕組んだ防衛策も失敗したようだ。ソナチネは元来、運動神経の良い女性である。最初のはボロボロだったが、なんとか勘を取り戻し次々と現れるパートナーの相手をうまくはないが大過なく終えることができた。

十数人ほど踊つただろうか。体力のあるソナチネでもさすがに限界を感じ、またそろそろお開きの時間が近づいてきたこともあり、彼女は伯爵夫人に頼み少し休憩のできる部屋を用意してもらつた。婿候補の顔見せはほぼ終わつたのだから帰つてもよいのだろうが、その前に少し休みたかつた。

通されたのは一階の客間の一室、冷たい物をお持ちしますわ、と案内してくれた侍女に言われ、部屋にあつた寝椅子にソナチネはもたれ込んだ。

（疲れた…このまま寝てしまいたい。）

だが、病人でもあるまいし他人の屋敷で寝るわけにもいかない。

（でも、あんまり候補者たちも乗り気でないのがいたような…）

今までの婿候補たちのことを思い出す。

はつきり言つて、最初に踊つたヴィード以外はあまり印象に残つて

いない。まあ彼の後では誰も彼も靈んでも無理のない話なのだが。

(なんて言うか、外見も中身もいい人っぽいし。あんな人よく見つけてきたものだわ)

伯爵もヴィードが一押しらしく、あの後も彼について何かと教えてくれた。

(それにあつちから断られちゃあなあ…)

他の候補者の中には踊りだした途端ソナチネの耳に飛んでもないと囁いてくれた者もいた。「父には話していないが、自分には他に心に決めた相手がいる」ときたのだ。さすがに彼女も苦笑するしかない。

(重臣たちの関係者が多かつた、かな?)

重臣の親類縁者が多かつた。皆、文官だったのはソナチネが武官だからだろうか。重臣たちに後押しで来た者の中には本人は乗り気でないのでは、と思えた人物も先の彼だけではなく少なからずいたのだ。彼女にとつてはこれまた失礼極まりない。

それでも本気で申し込んでいると見られる候補者たちはヴィードを含んで4・5人はいだらうか。十数人から4・5人まで絞れたのだが、ソナチネにとつては楽になつたと言えなくもない。

(それにも、昼間に教えてもらつておいて助かった。あんなに次々紹介されても何がなんだかわからないもの)

重臣たちの力関係も、さらにはいつその名前も役職までもソナチネは疎い。レジェロの説明がなかつたら、彼らの名前から誰の縁者なのだろうと推察することさえできなかつた。

「ん？」

ガバリと寝椅子から起き上がる。今まで完全に頭から抜け落ちていたが、ソナチネをご令嬢たちの壁から抜け出させるきっかけとなつた人物を忘れていた。

「お待たせいたしました。檸檬水をお持ちしましたわ」

丁度そこに入ってきた侍女に詰め寄る。

「招待客たちはまだいる！？」

「え、は、はい。お帰りになられた方も少しいらっしゃいますが…」

いきなり詰め寄られ、お盆を取り落としそうになりながらも、侍女は教えてくれた。

「ありがとう、すぐに戻つてくるから飲み物は置いといてもいいえる？悪いわね」

侍女の返事も聞かず、ソナチネは部屋を飛び出した。

* * *

もう帰ってしまったのではないかと思ったが、意外とまだいた。

「ちよっと、何でいるの」

「ちよつと、帰る時間を誤ったな…それで何か用か」

「来るなら来るで、何で昼間に言わないの！？　あなたのせいで私はクタクタよつ」

昼間に散々世話になつたレジエロである。伯爵邸のバルコニーに隠れるように手すりにもたれていた。確かに彼を見かけたせいでソナチネは「ご令嬢たちの壁を出でしまつたのだが、それは別に彼の責任でもない。

ソナチネの言いがかりにムツとするレジエロは、昼間の妙な格好とはうつて変わってきちんと男性用の夜会服を着込んでいた。つまり正式に招待された客の一人だということだ。

「悪いが、俺だって国王陛下の署名入りの招待状が来たら、出席しないわけにいくもんか。それに話す前にお前が出て行つたんだ」

「…それはつまり」

「言つとくけど、俺だって不本意だ。心配すんな、お前の邪魔はないから」

レジエロの言葉に、バルコニーの手すりへがつくりと両手をつく。

「有能な青年達、かあ」

成る程、ソナチネの一つ年上、22歳にして文官として一つの部屋を与えられている待遇を鑑みるとレジエロは優秀なのだろう。重臣たちに關してあれほど情報を持つていたことからもそれは察せられる。その上彼は魔術師長とも交流があることで知られているのだ、見るところから見れば適任なのかもしれない。

「で、どうするんだ？」

さつきより何故か楽しげなレジエロがきく。

「今、きかれてもねえ」

一日で何を決めるというのだろう。4・5人に絞ることはできるかもしれないが、本人が乗り気かどうかだけで決めていいのだろうか。「ヴィーデのことだよ。あんなの中々いないぞ。はっきり言つてお前には勿体ない」

「彼のこと知つてるの！？」

再び力チンとくる言葉が最後にきたが、恐らく大本命の彼は事実勿体無いような人物なので言い返さない。そういうえば、魔術師長と懇意なレジエロなら知つていってもおかしくはない。

「ああ。一年ほど前からだが。あんなんだから他の女も放つておかないが、あれだけつこう硬いんだ。今のところ浮いた話もきかないな」

そりや、あの歳まで異性と関係がなかつたなんてことはないだろうが、と付け加える。

「裏のあるような人間とも思えない……きいたかもしけんが、あいつは天涯孤独だ。口を挟んでくるような親類もいないから身軽なもんだぞ」

「ふうん。そうか……天涯孤独があ

「大した後ろ立てもないのに、ここまで来たんだ。立派なもんだよ」

夜も更け、冷えてきたのかため息が白く曇る。多少ひねくれた所のあるレジエロが人を褒めるのは珍しい。

「へえ。レジエロが人を褒めるなんて珍しい。丸くなつたのね」
そういうと、レジエロは苦笑した。

「俺だつて本当に優秀なら認めるぞ。何より憧れの魔術師様だ」

話は終わつたのか、少し苦い顔つきで「じゃ、寒いから俺は帰る」とレジエロはバルコニーを去つた。

しばらくソナチネは一人でその場に残つていたが、客間に飲み物まで用意してもらつたことを思い出し、あわてて部屋に戻つた。舞踏会はいつの間にかお開きになつたらしく、他の招待客は帰宅の準備に忙しかつた。

文官の言訳（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

不審者の蜘蛛（詫問者）

緊迫するやうな雰囲気だけ、そんな話です。

不審者の告白

14・不審者の告白

マルカート伯爵邸を辞したソナチネは、馬に一人騎乗し帰宅の途につこうとしていた。

舞踏会に乗馬で来る公爵家の姫君といつのも前代未聞だが、ソナチネの場合はよくあることなので、いまさらだ。愛馬であるアニマート号は王宮の第一騎士団の厩舎にいるので、今乗っているのは自宅であるコン・フォーコ公爵邸にいた馬だ。

夕方、レジヨロの部屋を出たソナチネは人目につかないよう注意しながら、大昔に子供だった国王アレグロたちと偶然発見した王宮の抜け道へと向かった。庭園や建物の裏、井戸端などをぬつてつけられた道を辿り、どうにか見つからずに王宮を抜けだすことに成功した彼女は王都の内にある自宅へ帰ったのだ。

姿をくらましたことで、自宅へもすでに追つ手が来ているかと危惧していたのだが、幸いソナチネが王宮を出たことには気づいていないらしく、そこはいつもの閑散とした平和な場所のままだった。

自宅は現在の公爵である甥ラルゲットが母や祖母とともに領地へ引っ込んでいる上、ソプラノは嫁いで、ソナチネは騎士団の宿舎でほぼ寝泊りするので公爵家の人間は誰も住んでいないという状態になつてている。

もちろん屋敷に人がいないのでは無用心であるし、建物や庭の世話をする必要もあるので管理人を置いてある。

ソナチネが今来ている騎士の正装は、その管理人夫婦の妻に繕いを頼んでいた物で、彼女はそれを着て舞踏会へ行けばご令嬢たちの壁

を作れることを思いつき実行したのだ。結局、失敗に終わったが。

馬を返さねばならないし、夜遅く王宮の宿舎まで帰るのも面倒なのでとりあえず自宅へ向かおうかと、伯爵邸の門を出たソナチネは馬を自宅の方向へと向けた。そこへ声をかける者がいた。男の声だ。

「ソナチネ嬢ですか？ソナチネ・コン・フォーロ嬢」

深夜にいきなり声をかけてきた者に対し、不審者かつ……と咄嗟に馬首を伯爵邸の方向へ巡らす。騎士とはいえ女一人、夜更けに声をかけてきた正体不明の相手の人数も目的もわからず対峙するのは無茶だ、騎乗しているのだから逃げるが得策である。

「お待ちください。不審な者でもあなたに害をなす者でもありますん」

相手はソナチネによく見えるようランタンを持ち出し、自分の姿を照らしだした。伯爵邸の門の外に灯りを見た覚えはないから、覆いでもかけてあつたのだろう。

「よく見てください。私は一人です。武装もしていません」

なるほど相手の言つとおり他の人影は見えず、ランタンを持つている以外は手ぶらであることが掲げた手からわかる。闇夜に浮かんできたのは男物の夜会服姿、冷えてきたでの外套なしでは相当寒いのではないだろうか。

しかし、相手がどんな武器を隠し持つているか定かでないし、仲間が隠れていないとも限らない。ソナチネは油断することなく大きな声で警告する。

「馬に蹴られたくなくば、その場を動くな！」

「おや、それは痛そうだ。では動きませんので、よぐり覗ください」

どこかおかしそうな柔らかい声で相手は答えた。先ほどの警告の声が伯爵邸の門番に聞こえていれば出てくれるだろう。新手がないか周囲に気を払いながらも、男の姿を観察した。

夜会服姿だが、かぶっていた帽子をとつたので見えるようになつた顔は先ほどの舞踏会で見かけた覚えはなかつた。風采は悪くはなく、外套を着ていない不自然さ以外は普通の貴族の青年に見える。歳は三十前くらいだらうか、髪色は暗く夜の闇に沈んでいる。

「何者だつ、答えよ」

そう簡単に名乗るとはソナチネとて考へていなが、助けを呼ぶ意味で再び大きな声を出す。

「私の名を聞けば、驚くと思いますよ。何しろあなたと同じ渦中の人物だ。私はセンシア、センシア・コン・ブリオです」

確かに驚いた。だが、そんな言葉に信用のおけるはずもない。

「… 言つに事欠いて、公爵家を名乗るか！… センシア様が何ゆえこのよつなどこに立つてゐるといつのだ…」

「いやあ、それが本当にこのよつなどこに立つてゐるのです。信じてください、ほら」

男は懐から出した何かをソナチネへ向けて放つた。飛び道具かとソ

ナチネは馬ごと避ける。

「見てください。別に爆発したりしませんから」

投げられたそれは月明かりをよく反射し、小さな物であるにもかかわらず夜闇に紛れてしまうことはなかつた。それは小さな金属製の何かで、宝石が散りばめられているらしい。

だが、馬上からからうじてわかるのはそれだけだ。馬から降りた途端襲われることも考えられるのでこれ以上近づきよつもない。

そこへようやく救援が現れた。

「ソナチネ様っ！！」

伯爵本人が屋敷の男手を連れてやつてきた。だが、伯爵はランタンを持つ不審者の顔を見て、驚愕の声を上げる。ナイスミドルがかなり乱れてしまつている

「つー センツア様ですか！？ 一体ここで何を！？」

「えつー！」

信じられないその言葉に、ソナチネも一の句が繼げない。

「ほら、言つたとおりでしょ？ 困りましたね、ひつそりお会いしたかったのですが」

人物証明ができたことを当然のことと受け入れ、なぜか残念そうな不審者 コン・ブリオ公爵家の嫡男・センツア はゆっくりソナチネに歩み寄つた。

センツアはソナチネの馬を刺激しないようゆつたりとした動作で先ほど投げた物を拾つた。

「見てください」

柔和な顔に笑顔を浮かべて、その小さな物をソナチネに差し出した。

「これは……」

それはペンドントトップだった。だが普通の品ではない、金の台座の上にコン・ブリオ家の紋章が宝石で描かれた、お金も手間も相当かかっているだろうと伺わせる逸品である。

が。

「こんな時間に何ゆえ我が屋敷の前にいらっしゃるのです?」

そこへ伯爵から当然の質問がセンツアへ向けられる。伯爵は顔見知りらしく、既に警戒は解いているがかなり訝しげだ。

センツアはコン・フォーハ家の姉妹とは因縁深いフェルマータの実兄である。確かに訪ねて来てもそう簡単に会おうとは思わないかもしない。

「ですが……。」

「伯爵、じつらは本当にセンシア様なのですか？」

「面識はございませんでしたか？その通りです、我が家はコン・ブリオ公爵家とは少々縁がありますが、確かに彼は渦中の人物だ。その考え、他の人間が誰も彼を国王に推さない理由を知りたくもある。」

伯爵のおかげで腰の剣を抜く前に知れてよかつた、こつそりため息をついたソナチネだった。彼の意図がよくわからないが、確かに彼は渦中の人物だ。その考え、他の人間が誰も彼を国王に推さない理由を知りたくもある。

ソナチネは馬を降りるとセンシアに向き直った。

「知らぬこととまいいえ、『無礼をいたしました。それで、お話とは？』

「いやあ、本当に騎士の方なのです。凛々しくていらっしゃる」

対するセンシアは、ソナチネの颯爽と馬を降りる仕草や、その前の勇ましい態度を思い妙に感心してみせている。

「そうそう、お話があるのです。このお話をしますか？私の現在の自宅がよいでしょうか？それともフォーハー家へ厄介になつても？」

「ソナチネ様、部屋は我が屋敷に用意いたします。センシア様も、時間が時間なのです、若い女性を連れまわすものではありませんよ。あわてて割つて入つた伯爵によつて、ソナチネはさつきくぐつたばかりの伯爵邸の門を逆戻りした。今夜は眠れるのだろうが、と頭の

端で考えないでもなかつた。

* * *

伯爵邸の客間の一室にいるのは三人、ソナチネとマルカート伯、センツアである。

「伯爵、部屋をお借りしておいて図々しいことをお願いしますが、ソナチネ様と一緒にしていただくわけには参りませんか?」

「しかし…」

これまでの行動が十分非常識だった相手の申し出に、ソナチネの安全が心配になつたのか、それとも一人きりで何を言い出すのか不安なのか伯爵は逡巡する。

「私は大丈夫です。ご心配なく」

伯爵の視線を受け、腰に挿したままの剣をさりげなく示して請け合うソナチネ。相手が丸腰の上、その身のこなしから特に武術などを嗜む様子のないことを看破していたので彼女には自信があつた。

伯爵はしぶしぶ部屋を出て行つた。

「伯爵のおっしゃる通り、時間も時間だ。手短にお話しましょうね

フェルマータも外見はあれでなかなかの美女と評判である。その兄センツアも整つた容姿の持ち主であつた。だが、その柔軟な顔立ちには妹はない温かみがあつた。それでも彼女の兄だ、油断はでき

ない。

「私には王位につくことのできない事情があります。が、それを第三者に説明させては誤解や行き違いが起きないとも限らない、そういうわけで自ら説明しに参ったのです」

もうすでに、センシアの話に何の期待も寄せてはいなかつたソナチネだが、それでもその肩が少し落ちる。

「……納得したわけではありませんが、わかりました。続きをどうぞ」「なかなか苦労されているようですね。お察します」

苦笑を浮かべたセンシアだが、すぐに表情を真剣なものに改める。

「私には現在、大切にしている生活と、大切にしている人がいます」

「私は彼と一緒に生きることを選び、既に家を出ました。ブリオ家は妹が継ぎます。父も今では私を無いものと扱っています」

「…………彼？　というと？」

何だろう、友達だろうか、それとも外に作った息子とか？
意味のわかつていなソナチネに噛んで含めるように言い直すセン
ツア。繰り返すが彼は真剣だ。

「私の恋人です。私は同性しか愛せないので

「…………」

驚愕で言葉を発せないソナチネ、大声を出さなかつたことを褒めてほしいと思つた。あまりに告白に無意識に身を引いてしまつ。

そりや、誰も説明をしたかないわ、と頭のどこかで納得した。

不審者の由来（後書き）

お約束ですね。

読んでくださいってありがとうございます。

図Hの訪問（前書き）

底にあるのは軽いノリだけです。
やつこつわけでじいじで早速折り返しです。

国王の訪問

15・国王の訪問

その夜は、結局伯爵邸で泊めてもらつたソナチネは、翌朝まだ暗いうちに自宅であるコン・フォーコ公邸へと帰つた。帰り際、朦朧としている彼女に伯爵が「ソナチネ様はしばらく休暇扱いになります」と伝えてきたので急いで帰る必要もなかつたのだが。

（そんな、もう仕事にも来るなつてこと？　もう私は騎士ではないの？）

そのまま、流されるように女王にされてしまつのだらうが。

暗澹たる思いを抱え、朝早く、ソナチネはよつやく血圧へ帰^ルないとができた。

ひどい顔をしてやつと帰つてきた令嬢の姿に、公爵邸の管理人であるカランド夫妻はあおいに慌て、ソナチネの世話を焼いてくれた。彼女が生まれる以前より公爵家に仕えている人たちである、幼い頃から実の子供のように可愛がってくれている。

しばらく王宮へ行かなくともよいことを伝えると、カランド夫人より「では、しばらくお休みくださいませ」と強制的に自室の寝台へと押し込まれてしまい、疲労困憊であることは昨夜から直覚する」とであつたソナチネは素直にその言葉に従つた。

* * *

「ネネ様、ネネ様」

慣れた寝台の中で深く眠りにつき、中々覚醒しないソナチネに優しいが有無を言わぬ声でその幼な名を呼ぶ者がいる。慣れ親しんだ自分の寝台というのはそれだけで安らぎの象徴だ、そう簡単に起きる気配もない。

「ソナチネ様！ 起きないとグラーヴェ先生からお説教ですよーー！」

昔の家庭教師の名前を出され、一気に田代が覚めたソナチネはガバリと体を起こす。

「え！？ エ！？ グラーヴェ先生が！？ 今日は授業！？」

ソナチネとソプラノの家庭教師だったグラーヴェ女史は、非常に厳しいことで有名だった。優秀な姉と比べると、普通よりも少し鈍いかな？ という程度で、勉強よりの外で体を動かすことの好きなソナチネはよく授業を抜け出したので頻繁にお説教をされた。一度など、逃げようとしたソナチネを捕まえた女史は、彼女を一日中正座させたままお説教を垂れた。声を荒げるわけでもネチネチと絡むわけでもないが、延々と正論を叩き込まれたソナチネはその日以来いまだに女史が恐ろしい。

そんな懐かしい思い出の名前を使ってソナチネを起こしたカランド夫人は、混乱し子供時代の頭に戻りかけた彼女を現実へと戻し、さらになどん底へとつき落とす。

「ソナチネ様！ 大変です！ 国王陛下がこちらにいらっしゃると、

使いの者が来ていました！――

「なんで！？ もうやだ――！」

* * *

起きた当初は完全に取り乱したソナチネだが、なんとか国王その人を迎えるに相応しいよう、身支度を整えた。といつても公爵令嬢らしいドレスに着替えるわけでもなく、白いシャツに細身のズボンという小姓の平服のような格好だ。不敬かもしけないが、相手が「お忍び」なのだ。正装でなくとも文句は言えまい。

午前中に来た国王の使者はソナチネがまだ寝てることを伝えると「では昼食後になさるよう陛下に申し上げておきます。」と言い置いていったそうだ。起きていたらすぐにも来ていたのかもしない。ソナチネが起こされたのは昼食前、その後急いで湯浴みをしたり、昼食をとったりしたので忙しかった。

「この度の我が家へのご来臨、心より嬉しく存じます――」

現公爵は領地について使用人もほほいない公爵邸だ、ソナチネ自ら本当にやつて來た国王アレグロを出迎えた。

「ああ、堅苦しい挨拶はよい。ここはそなたの家ではないか、楽にしてなしは不要と伝えてきた。

アレグロは美しい顔に笑顔を浮かべて、軽く手を振り公爵邸側のもてなしは不要と伝えてきた。

「突然やつて來てすまないが、例の件で少々打ち合わせておきたい

ことがあってね。ソナチネが今日から王宮に来ないことを思い出したので私の方で訪ねたのだ」

公爵邸の厳格な雰囲気の漂う応接室に落ち着いた一人だった。アレグロにはもちろん近衛がついていたのだが、今は部屋の外へと追いやられている。

「…お呼びいただければ、参上しましたが」

むしろこんな風にいきなり訪ねて来られると心臓に悪い。察してほしい。

「頼み」とするのだ。私から出向くのは当然だ

その頼みごとの内容を思つと、逃げ出したくなるのは仕方のない話だ。黙つたままのソナチネにかまわず、国王は続けた。

「一月後に私の退位式を行う。そなたも知つての通り、わが国では国王は一度即位すれば死ぬまで国王だ。退位した国王などこれまではいなかつた。…私が退位した最初の国王といつことになる」

今日も麗しい声に自嘲がにじむ。

「だが、私の退位は悪しき縄いとなると言えなくもない。よつて、これから開く議会で私は退位を宣言するが、それはこの一回限りの特別な処置とする、と王室典範に記載させるつもりだ。ここまで理解はできたか？」

「つまり、陛下が退位した最初で最後の例となる、と？」

「やうだ。私の例を引き合に出ておれ、そなたが即位後に何かあって退位を迫られても困るであらう？」

「え？ いえ私は困りませんが……」

「辞めてもいいと書つてもらえるなら、これほど氣楽なこともない。

「王の足元がぐらついていまは、國のためにならん」

美しいその顔で渋面を作る。國を想ひ氣持ちまで失せたわけではないらしい。

「そなたには、私が退位式を終えたらすぐに即位式を挙げてほしい……ついでに結婚式も」

「…恐れながら、子供の頃、私は陛下を友達だと想つておりました

すでに驚くことに慣れてしまつたソナチネは、落ち着いていた。「ご無礼をお許しください」と続ける。

「しかし、陛下がお父上を早く亡くされて今の私よりも若くに即位され、遠い方になつてしまわれました。ですが、…陛下はご立派に国を治めておいでです。魔族の侵攻が起きたときも、その後の交渉時も陛下が国王で良かつたどれだけ思つたか…！ …私はその陛下にお仕えできて本当に幸せだと思つておりました。今でもやうです」

「あつがとつ…それで？」

「私には無理です。何度も申し上げます。どうか…私たちをお見捨てにならないでください…！…」

座っていた長椅子から立ち上がり、頭を深く下げるソナチネ。だが。

「…………すまない」

永遠かと思われる長い沈黙のあと、苦しげな声が落とされた。

図Hの訪問（後書き）

読んで下せりてあつがいへじれこま。

女騎士の出奔

16・女騎士の出奔

話が終わると国王はすぐに王宮へと帰つていった。なんでも明日早速議会を開くやうだ。

血潮へ引き上げたソナチネは寝台に再び倒れこみ、頭を抱えた。

(これでは決定的なこととなつてしまひ……。)

国王の突然の退位も、ソナチネの即位も。

(無茶だ……議会が納得するはずがない。)

議会は貴族だけではない、平民の中から選出された者たちもいる。貴族になら根回しがきくかもしれないが、平民出身の議員に承認されるのは至難の業だらう。最悪ソナチネは反逆者扱いだ。

(私にその覚悟もない、と。)

困難を乗り越え即位してみせようとした覚悟も、国を治めようと氣概もないのに。

(ひどい。)

どうしてこんな災難が降つてわいてきたのだろう。

* * *

「ソナチネがいなくなつたですつて！？」

エネルジ「第一騎士団長夫人であるソブナノは、夫の言葉に大いに動搖した。安定期に入っているとはいへ彼女は身重だ、あまり興奮するのはよろしくない。

夫のレントはいつも魔王皺を眉間に寄せ、その長身から美しい妻を見下ろす。

「ああ、今陛下が騎士団を召集して、搜索している」

国王アレグロによる公爵邸への突然の行幸の翌日である。今日もソナチネは名目上では休暇扱い、実際は自主的に自宅で謹慎していた。彼女に特に非はないはずなのだが、あまり出歩いて何かあっても問題なので、周囲もそれを歓迎していた。

議会は一時中断され、国王より捜索の命が出された。

「アーニマート君は？ 騎士団の厩舎に？」

「いや、昨日騎士団の者がソナチネに頼まれて公爵邸へ連れて帰つていたそうだ。公爵邸にはいないらしい」

「せつ、ならあの二が自分で抜け出したのね」

姉は俯いて考え込む。昔から妙に抜け出すのが得意な妹だった。公爵邸でも、王宮でも。

「まあいいな。まだ陛下の件は広まつてはいないが

一人の頭には同じ危惧が、思いつめたソナチネが何かとんでもないことをするのではないかという考えがあつた。

「ええ、一人でいさせては危険だわ。探さないと」

ここにソプラノは夫の顔をひたと見つめた。顔を上げた拍子に癖のない銀の髪がサラリと背中を流れる。

「あなた。お願いがあります」

* * *

「…ここにいたのね」

ソナチネが一人佇んでいたのは寂れた場所だった。

王都の中でも特にひとけのない場所 墓所が集まる地域である。その中でも貴族の墓が集中しているそこは、冥府の神や動植物をかたどった石像でそれでも飾られている方である。訪れる人間も時折いるらしく、花の供えられたものもあつた。

「兄上が亡くなつて、5年も経つのね」

「…父上は3年です」

コン・フォーノ家は立て続けに拠り所となる人物を失つた。ソナチ

ネが一人立っているのは父と兄が葬られた公爵家の墓所の前だつた。愛馬は墓所の外にでも繋いだのか、姿が見えなかつた。

「お亡くなりになつたばかりの頃はよく墓参しましたが、最近はご無沙汰していましたので」

妹はやつと、横へ立つた姉へと顔を向けた。ソプラノもその身分には相応しくなく、供の一人もいない。

「姉上、お体に障りませんか？」

「平気よ、これくらい。うちへ寄つたら、カランド夫人にたくさん厚着をさせられてしまつたわ」

確かに姉の厚着はかなりのものになつてゐる。外套はもちろん、襟巻きに手袋、履物まで分厚い毛皮で覆われていた。

姉妹ふたり、しばし無言で父と兄の眠る場所を見つめる。公爵家の墓には代々葬られてきた当主たちの意向でさまざまな意匠の石像が置かれている。

父が生前より決めていたのは 鋤と鍬だ。

しかし、父が存命中にそれらに触つたことがあつたかどうかすら疑わしい。これは彼の土地を耕す領民への愛を表しているらしい。

公爵家であるコン・フォーコ家にはその家に生まれついた人々の性情を表していつしか呼ばれるようになつたあだ名がある。

いわく、「わが道を行く公爵家」だ。

コン・フォーコ家は昔から変わり者が多いことで有名だつた。星を

捕まるためと称し、領地に高い塔を建設し最終的にはそこから落
下し死んだ公爵や、飲み屋の歌姫に入れ込んだあげくとうとう廃嫡
になった嫡男（笑つて家を出て行つたという）、義賊になると言つ
て出奔し、騎士となつた実の兄に捕まつた三男坊など変人伝説には
事欠かない。

彼らの非凡なところはいずれもそれが徹底していたところだろう。
誰の反対も受け付けず、皆が己の道をつき進んでみせた。

そしてそれは現在の公爵家でも変わらない。ソナチネももちろん、
公爵家の評判に一役買つてゐる。

姉妹の父・アジターはその中では奇跡的なほど正常の範囲内に入る部類だ。彼は権力を揮うことへ己の偏愛を注いだ。その権力志向は強く、もともと生まれがよいこともありとうとう先王の代に20代の若さで宰相の地位につき、そのまま30年以上も力を握り続けた。真っ当なほど、正しい公爵としての姿勢といえる。

その父の生き方の最大の悲願であったのが、長女・ソプラノといずれ国王となる王子・アレグロの婚約だった。アレグロに数多くあつた他の縁談を全て排し、己の娘を王室へ入れることに成功した、と父は思った。

父の死後、他ならぬ娘本人によつて、それはあつさりと反故にされてしまつた。

そんな、権力に取り憑かれたような父だが己の領民は大事にしたのでその支持は高かつた。父の方でも慕われることに気を良くしたので、ますます彼らを慈しんだ。挙句の果てに父の墓を飾るのは、農業を営む領民の象徴である「鋤と鍬」となつた次第である。

一方、一人の兄・ジョコーソがその奇人の愛を捧げていた対象は

「いつ見ても、兄上のは壮观だわあ…」

「一人の目前にあるのは、音楽を奏でる楽団をまる」と再現した石像だった。これも兄本人が生前から意匠を話していたものだ。8人の石像がそれぞれの楽器を演奏する情景が象られているのだが、それらは普段貴族の館で演奏しているようなお上品なものではなく、街の酒場で見られるような簡単な打楽器や笛を持つており、言つてしまえば俗な楽団なのだ。

それもそのはず、彼女たちの兄は吟遊詩人だったのだ。それも自ら楽団を率いて地方を旅していた。ジョ・コーンは子供の頃から貴族の社会には全くなじまず、市井で平民の子らと遊んでばかりだった。どういった経緯があつたのか家族は誰も知らないが、吟遊詩人を志した彼は、最終的に家を出た。そして自分で楽団を立ち上げると、王都を出て地方を巡業するようになつて行った。

当然、父は激怒したがそこは「わが道を行く公爵家」、氣づけば息子はどこからか貴族の娘を花嫁として調達、彼女を公爵家に置き去ると、めったに王都には帰つてこなくなつた。

正確にいふと、兄・ジョ・コーンは公爵家の当主ではないので、彼の墓を飾る石像は作られないはずだ。だが家を出た兄が、楽団を率いての旅の途中で馬車に轢かれそうになつた子供を助けて死亡すると、父はそれまでの怒りをといて非常に嘆いた。その死を悼むため、兄の墓は当主のための物のように、彼が生前愛したものによつてその公言どおりに飾られることとなつた。

「でも、楽しそうですね」

石像の意匠をどうやって決めたのか知らないが、兄の楽団は皆樂しそうに演奏してくる。

「…」れを見ていると兄上がどうして家を出たのかわかる気がします

す

ソナチネがこぼすように咳く。妹の横顔が消え入りそうに夢いことにソプラノは気付いた。

「ソナチネ？」

「階好きなように、好きなことをして去つてしまします」

「父上も兄上も…今度は陛下まで」

俯くソナチネ。その肩は震えていた。

「そんなに、ここには何もないのでしょうか。何が悪いのでしょうか？みんな去つていってしまいます、私に全てを押し付けて…」

とつとう膝をついて、両手で顔を覆つて嗚咽をこぼし始めてしまった。いつも凜々しいはずの妹の弱い姿に幼い頃のことを思い出した姉は、同じようにそばに膝をつくとそつと震える肩を抱いた。

「ソナチネ…そんな風に思つていたのね」

「ひっ、ひっ、あね、うえ。冷えてしまーます」

「大丈夫よ…私はいなくなつたりしないから。ずっとあなたのそばにいるわ」

成長すると姉妹でもそつそつ抱きついたりしなくなる。特に一人は、

仲は良いがじゃれ合いつような関係を築く性格でもない。

それでも今は、たつた一人の妹が不安でたまらなくなつた様子なを見て、ソプラノは彼女を抱き寄せた。自分がいることを、温もりで伝えようとして。

思えば、ソナチネはずつと傷付いていたのかもしれない。幼いころ、慕っていた歳の離れた兄が家を出たことに、父がずっと彼女を省みなかつたことに。

ソナチネが生まれたとき兄は13歳、その頃にはすでに家をでてふらふらと王都をうろつくようになつており、その後ソナチネが口をきけるぐらいになつてもあまり兄妹らしくしてはいなかつた。折り合いの悪い父や、彼のその風来坊の性情もあつたのだろう、家族の輪に入る事が絶えていた。

一方で父は従来、娘を将来の王妃にすべく働きかけていたので、どうしようもなくなつた長男よりも聰明で美貌の片鱗を見せはじめた長女・ソプラノにばかり目をかけるようになつていて。それは忙しい父を支える母も同じであつた。

姉に一年遅れて生まれたソナチネはいつしか家族の中で置き去りとなつていた。そんな淋しい幼な子に、何を思ったのか兄は時折きまぐれのようになつた。彼なりに愛情があつたのかどうか、幼い彼女はいつしか、両親よりも兄を慕い始めた。

だが、慕う妹をあつさり置いて兄は家を、貴族社会を、王都を出て行つた。

そして、父は相変わらず姉にばかり目がいつている。
しかし、そんな淋しい子供にまた新たな転機が訪れた。

見事に王子の婚約者の地位を射止めてみせた姉とともに王子・アレ

グロの遊び相手として王宮に拳がることとなつたのだ。

「へいかは…兄上みたいに思つてゐたのに…！」

王宮で会つた王子は、出て行つた実兄の場所をそのまま埋める存在だつた。最初こそ2歳も年下のソナチネは遊び相手の他の少年たちに爪弾きにされたが、彼女が一緒に遊びたがつてゐることに気付くと、アレグロはすぐにその輪の中に入ってくれた。ソナチネが普通の女の子と違い、走ることも飛び跳ねることも、棒つきれを振り回したり、意味なく石を蹴つたりすることも大好きだとわかると、どんどん他の遊びも教えてくれた。

「へいかがいるからつー国こ、王宮に仕えようと決心したのに…！」

現在のソナチネはアレグロとの出会いで育まれたようなものだ。彼が男の子の遊びに彼女を引き入れなかつたら、ここまで凜々しい騎士には成長しなかつた。兄のように慕う彼がいなければ、騎士になつてでも国に奉仕しようとは思わなかつた。

「なのにつ、なんであんなに変人になつてつー…昔の陛下はあんなじやなかつたつー！あんなのをこの歳まで尊敬してゐたなんてつー！」

「へつ？」

知性的なソプラノの顔に珍しい表情が浮かぶ。

「ねえ姉上？どうやつたら国王陛下とあるう人があそこまで無責任になれるんでしょう？」

「言つちゃあ悪いですが、恋ですよー？たかが一時の感情にそこま

で賭けますー? ああ賭けましたっけ、姉上も

所詮姉上も恋する輩といつわけですね、とふつと血嘲の笑みを浮かべる。

「どうせ私には、恋人の一人もいませんよ…ていうか恋愛感情すらわかりません。無骨に生きてきましたから。私のような唐変木な人間は、恋人たちの犠牲になるしかないんです」

みんな、私の屍を超えて恋を成就していけばいいんです… そう締めくくつたソナチネはぐつたりと両手を墓石の前につけて深いため息をついた。ソプラノがこれまで一度も見たことのない、深い深いため息だった。

「…気持ちはわかるわよ?」

たぶん。恋する輩であることは否定できないが。

「ソナチネは…無理やり女王にされるのがつらいのではないか?」

「もちろんー今まで、私なりに積み上げてきたものが全部無駄ではないですか!」

豹変したように、勢いよく顔をぐりんとソプラノへと向ける。姉は姉で妹の形相に思わずのけぞった。

「ですけどー、ちょっとだけですよー? ちょっとだけ、諦めがでてきたというのか。姉上だっていてくださるわけですし」

悲観した陸下に自害でもされたら同じことですが、ともいひ続ける。

姉上のくだりでは少しあにかんでいた。ソプラノの言葉も耳には入つていたらしい。

「でも一度くらい、恨み言を言つてもかまわないかと思つて
父と兄に。一人が生きていたらこんなことにはならなかつた。それでソナチネはここへ来たというわけだつた。人騒がせな妹だ。

そう、人騒がせと言えば

「 陛下も、レントも、騎士団も、皆探していたわよ」

「 そうですか、申し訳ありません。見つかなくて姉上の手を煩わせることになつたのですね」

帰りましょうか、そういうば姉上はどうやって来られたのです?お一人ではありませんよねと、立ち上がりすぐにでもきびすを返して行きそうなソナチネの手をとり、ソプラノは引き止めた。

「待ちなさい。いい契機だわ、私に全て話してみてはどう?

女騎士の玉奔（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞれこま。

敵対者の襲撃（前書き）

まともなアクションが書けません。
お見苦しいものをお見せします。

敵対者の襲撃

17・敵対者の襲撃

「全て…とは？」

ソナチネは賢い姉の前で取り繕うことなど滅多にない。何をしても姉にはお見通しだ。

だから今だつて本心から語つていた。他に何があつただろう。
「私はこの世でたつた一人の妹の、コイバナをこれまで聞いた覚えがないわ。姉妹というのはお互いの恋愛事情に通じているものではないの？」

「ぶはっ、とソプラノの言葉にむせるソナチネ。

「ううう、『イバナですか？』『イバナ…』

何よ鶏みたいよあなた、それよりもコイバナつてなんですかなんて返したら承知しないわよと姉は眉を上げる。

「…わかってるつもりではいたの。こういつ話が、あなたにはつらいことだと」

「姉上…」

「あの事件の後…私も母上もあなたを腫れ物のように扱つてしまつたから」

話が長くなりそうだからとりあえず帰りましょうかと、今度は姉が墓所の出口へと進もうとした。ソナチネも頷く。

その時のことだった。

「…姉上っ！ 私の後ろへ！」

力強く、だが突き飛ばさないようにゆっくりと、ソナチネがソプラノを口と背後にいる兄の壮麗な石像の間に押しやる。

「…どうしたの？」

妹が、いきなり騎士の顔となつたことに少々動搖したソプラノは頬りなげな声で呟いてしまった。

「しつ、姉上は私の後ろにいてください…」

自分たちの進行方向、すなわち墓所の出口へ続く歩道の方を見つめながら女騎士はすでに腰の剣の柄に手をやっている。

「何者かっ、姿を見せよ！」

鋭い誰何の声に応えるように、生垣や他の墓所に身を隠して近づこうとして者たちが現れた。

「・・・・・・」

無言で現れたのは5人の男たち、みな覆面で顔を隠している。それぞれ剣を手にじりじりと姉妹の方へ距離を縮めようとしていた。身なりは悪くないので街の「ロロシキには見えない、つまり強盗目的の

者とも思えない。

「…切られたくなくば、それ以上近寄るなっ」

ソナチネに圧倒的に不利だ。背後には身重の姉、ソナチネには剣一本、使える自信はあるが5人を一遍に相手どることはできない。一人に切りかかって来られたら、相手をするその間に姉に危害が及ぶ。

「姉上、走れますか？」

こちらから切りかかり、できるだけ相手の戦力を減らすことで姉が逃げ延びられる確率を増やすか。一緒に逃げた方が良いのかかもしれないが、いずれ追いつかれて同じことになってしまつ。

「つ！」

こちらを囮もうとする相手の意図をその動きから読み取り、迷つている場合ではないと腰の剣を一瞬で放つ。手で合図を出していた、男たちの首領と思しき男へと向かつていった。

「ぎやっ」

剣をもつて向かつてくる相手に遠慮は無用、とばかりに首領の左にいた別の男の右腕を横なぎに切りはなつ。落ちる剣。直前までていきなり矛先を変えたソナチネに、女一人と侮っていた左の男は急所 右腕の腱をあっさりと切られてしまつた。

「つ、この女っ」

ソナチネの騎士の剣が決して飾りではないことを悟つた首領は、ソ

ソラノを捕らえようと仲間に手で合図を出す。

「姉上つー。」

自分で考へていた以上に姉から距離をとってしまった。ソナチネは姉のもとに戻ろうと身を翻す。それを阻むように間にに入る首領。

「おとなしく…」

しろ、そう言いたかつたださう言葉は途切れ消えた。

ぎやあっ、とソラノへ手をのばそうとしていた男の叫び声が響いた。姉妹二人の危機に飛び込んできたのは一本の矢、さらに続けざまに飛んでくる矢は確実に襲撃者たちの急所を捉えていく。

「姉上、動かないで…」

自分たちを避けて飛んでくる矢に、味方の到着を知ったソナチネは流れ矢に当たらぬよう、姉に注意を促す。見覚えのある矢羽だ、これは騎士団の…。

「無事かつ」

飛んでくる矢がおさまると、駆け寄つてくる人物が一人。

「レント…」

「義兄上つ」

ソラノには夫、ソナチネには義兄であり上司でもあるレントであ

つた。現れた義兄の姿にはつとしたソナチネは姉のもとへ急いだ。

「姉上、お怪我はありませんか！？」

血相を変える妹に、少し責ざめていたソプラノはそれでも安心させるように微笑んでみせた。荒事に慣れているはずもないのに、気丈なことである。

「大丈夫よ、ないわ。おかげ様でね。あなたこそ怪我はないの？」

「私は平氣です。…申し訳ありません、危ないとこりでした」

「全くだ！だから護衛に何人か連れて行けとあれほど…」

最後のはようやく姉妹のいる公爵家の墓所の前にたどり着いたレントである。ソナチネ以上に顔色を変えている彼は魔王皺が5割増しだ。その皺をチラッと見たソナチネが、骨まで皺がついてそうだ、と場違いなことを考えてしまったことは秘密である。

「やつぱり姉上お一人で来られていたのですか！？」

「ああ。姉妹水入らずで話したいと行き先も言わずに…」

「そんな話は後でいいでしょう。それより…」

ソプラノは妹と夫をかき分けるように前へ進み出た。いつの間にか、何人かの騎士団の者たちが来ており逃げようとする男たちを拘束している。

「素晴らしい腕前ですね…」

「一人だけ」を持ち、騎士団の者に指示を出している夫の副官・ジストがその視線の先にいた。

「奥方様、『ご無事で何よりです』

安堵の笑みを浮かべたジストが進み出て、右手を胸にあてて軽く会釈する。王都一と謳われるソプラノの美貌を前に、心なしか顔が赤い。彼の弓の腕前は有名だ、男たちに刺さっている矢は全てその腕から放たれたのだろう。それが無ければ、ソプラノは人質にとられたかもしれない。

「ありがとうございます…。命の恩人ですわ」

「いいえ、『婦人の危機とあらば身を投げ打つてでもお守りするのが騎士の務め』

お礼を言つていただくには及びません、と続けるジストはソナチネの目から見てもたいそう男前だった。

（これぞ騎士道…。）

いいなあこんな風になりたいなあ、とソナチネらしい感想を持つのだつた。

敵対者の襲撃（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

「彼らは一体何者なのでしょうね？」

ソナチネの問いである。

場所は変わつて、今は義兄の屋敷にある姉の居間だ。その後、襲撃者の処理は騎士団の者にまかせ、とりあえず姉妹二人は帰つた。騎士団長のレントが国王へソナチネの無事を報告していることだろう。

ソプラノが墓所へ来たのは妹のためだが、彼女はコン・フォーロ家で馬車と御者を借りて来ていたそうだ。その御者も墓所の外で意識を失つてはいたが命に別状はなく公爵家で治療を受けている。ソプラノも念のため診察を受けた。

「そうね……察しはつくのだけれど」

二人でお茶を飲みながら、危険が過ぎたことにほつと息をついていふとレントが帰宅したという連絡がきた。何やら客人を伴つているらしく彼女たちを応接間へと呼んでいるそうだ。

* * *

「これはこれは……お一人ともござ無事ですか……」

大きく息をつき、感極まつたのかじさりと応接間の長椅子に座り込

んだのは60代後半と思われる老人だった。貴族らしく身なりはよいが、足が悪いのか杖を携えている。

「コン・ブリオ家の」当主様……！」

足が悪いにもかかわらず、姉妹を迎えるにあたりわざわざ立ち上がり、いた老人は王位継承権第一位の、コン・ブリオ公爵モーテラートであった。

「閣下は一人にお話があriadそ�だ…よろしいですか？」

この屋敷の主、レントも含めて4人がそれぞれ着席したところで、改めて挨拶を交わした。ソナチネは彼の顔など忘れていたが、名前をきいて彼の息子の衝撃の告白が頭をよぎる。きまづい。

「いやはや…騎士団の方々が間に合つて本当に良かった…」

ソナチネの決まり悪げな顔に気付かぬ様子の公爵は、姉妹の無事に何故だかしきりに頷いている。

「実は…いや、はつきり申し上げましよう。先ほどあなた方を襲つた狼藉者は私の屋敷に仕える者どもです」

「えつ…！」

あまりのことに腰を浮かすソナチネ。だが驚いているのは彼女だけ、あとの一人は落ち着いたものだ。レントは軽く息を吐き、ソプラノは「やはり」と小さくつぶやく。

「ソナチネ、閣下のお話をおきましょ？」

姉の言葉で我に返り、席に戻つた。

「我が娘フェルマータの仕業です……。あなた方とあれの因縁は、父である私にも責任のあること、重ねてお詫びをいたしましょう……」

そういうと公爵は再び立ち上がり、その頭を深く下げた。

残りの3人には驚きが走る。通常、公爵ともあらう者が国王以外の前で頭を下げることはまずない。

「あれは妾執にとり憑かれてしまったようです……」

公爵の顔は苦渋に満ちていた。

その話によると、ソナチネたちを襲つたのはコン・ブリオ家に仕える従者や警護人だそうだ。公爵の知らぬ間に、彼らはフェルマータの命を受けソナチネの生命を奪わんと襲つてきたりしい。

だが、従者たちといいくら主人の娘の命令とはいえ、他人の生命を奪うことはおいそれとはできない。とりあえず捕らえてフェルマータの元へと連れて行くつもりだったそうだ。

「彼らはずつとソナチネ嬢を見張つていたそうですが、エネルギー科夫人が来たことが予想外だつたのでしよう。報告のために屋敷へ戻つてきたのです」

その時、たまたま娘と従者の話を聞いてしまつた公爵は、急ぎ王宮へ伺候し騎士団へ知らせたというわけだ。

「フェルマータのやつたことこういうのはわかりました……。閣下、ど

うかお座りください」

生命を狙われたのだ、許したわけではないが足が悪そうな上に持病があるところ老公爵をいつまでも立たせておくわけにもいかない。姉の視線を受けたソナチネは彼に着席を促した。

「何があつたのかはわかりました。ですが理由は？」

自分だけならまだしも、大事な体の姉が一緒だつたのだ。一步間違えばお腹の子も危なかつたかもしない。そう思うと自然と声がきつくなる。一年半前の件だけでは納得がいかない。

「…」Jの度の件であれば少々思い違いを抱いたようです。その前に、私も国王陛下から一度打診を受けましたが、この体です。お断りを申し上げました

息子も娘もその器に足りぬことを知っていた公爵は、子供たちの王位継承も辞退した。内密の話を持つてきた国王も、彼が断ることを承知していたのかすぐに引き下がった。

「しかしその後何をどう考えたのか、娘はソナチネ嬢が陛下の元へお輿入れするのだと思つたようですね」

「はあつ！？」

ソナチネの声が跳ね上がる。

最近までソナチネは近衛として国王の傍近くに仕えていた。さらに毎日のように陛下の休憩時間に呼び寄せられている。彼が王妃となるはずのコトネを失っているのは周知の事実なので、当事者のいな

「なるほど…。ヤレへ先日の舞踏会ですね」

「なるほど…。ヤレへ先日の舞踏会ですね」

姉は納得顔だ。

噂のあるところへ、ソナチネのために開かれた舞踏会である。その前から国王とマルカート伯と打ち合わせていたことも含めて決定的となつたのだろう。舞踏会には国王本人が不在であったにもかかわらず。

憎いソプラノは他の相手と結婚、コトネは帰還、敵がいないはずとなつた王妃の座を今度はソナチネに奪われようとしていると思いつんだフルマーテはいてもたつてもいられなくなつたという。

「ひどい勘違い…」

女王となるか、アレグロの王妃となるか。究極の一択だが、ソナチネは今だつたら前者を選ぶ。他の女への死ぬほど恋愛に燃える夫はさすがに願い下げだ。

姉妹への謝罪を終えると、公爵は自分と娘は領地へ隠棲するつもりだと話した。公爵家は遠縁の者に継がせ、妻も一緒に親子3人田舎で暮らすという。もちろん娘には監視をつけ、一度と誰かを狙わせるようなこともさせないと約束した。

「自然に囮まれた生活なら、あれの妄執も解けるやもしれません。ソナチネ嬢のお許しをいただけるなら、今回のこと就不問としてはもうえませんか…？」

随分と虫のいい話だが、ここで許さなければまた禍根が残る。本来なら王位継承者と呼ばれるソナチネの命を狙つたことは反逆罪だが、この話はまだ公にはなっていない。

隣の領地であるコン・フォーコ家からも監視人を送ることで話はついた。

公勵の謝罪（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞれこまゆ。

侍女の来襲（前書き）

驚くしか能のない主人公に飽きてしまわれないか心配です。

19・侍女の来襲

「あーあ、いつまでこんなことが続くんだろ…」

その後、夕食を『ご馳走になつたソナチネは引き止める姉の言葉を辞して、義兄の屋敷からコン・フォーコ公爵邸へと帰宅した。ソナチネからも国王へ無事を報告すべきかもしけないが、珍しく魔王様が優しいところを見せて代わりにもう一度王宮へ行つてくれた。

今は自室の寝台の上だ。灯りは落とし天井を見つめる。

暗い室内で、友人だつたコトネのことが頭に浮かぶ。彼女さえいてくれればこんなことにはならなかつた。

立場上、近づきづらかつた姉とは違いソナチネは彼女と共にいる時間が長かつた。遠征時に、女性であるコトネに付けるには同性の者が、また年の近い者がいた方がよからうとされたので当時一番若い女性騎士だつたソナチネが護衛の一人に選ばれたのだ。

自國の者が犯した罪・拉致監禁・危険な遠征への同行の強制・さらに危険な役目をさせようとしていること・を考えると従軍中はコトネに罵倒されてもそれは甘んじて受けなければならぬ、それでもこの命に代えても彼女を守ろうとソナチネは考えていた。だがコトネには志願してついて来ていた身の回りの世話をする侍女・ヘオンがいたので、初めはほとんど直接口をきくことすらなかつた。

(初めて会つたときの意味不明な言葉…「リアルタカラヅカ」だつ

たかしい。あればどうこつ意味だつたのだろう。）

ソナチネの災難はコトネの責任ではない。だが。

（また何かの拍子で戻つてきたりしないのかな…。）

姉にはそろそろ腹を括つたような言動をしておきながら、往生際の悪いソナチネだつた。

* * *

「おはようござります。ソナチネ様つ、あつたでーす」

カランド夫人は随分と声が若返つた…、寝ぼけた頭でそう考えたところでソナチネはハツとなつた。落ち着いた物腰のカランド夫人がこのような挨拶をするはずがない。

「へへトオンっ」

元気良く挨拶してそのままソナチネの寝台へ寄り、彼女の上掛けを剥いだとしているのは王間にいるはずの侍女、トオンであった。

「ふふふ、ソナチネ様つたら本当は朝弱いんですね」

今日からは私が起こして差し上げますわ、と楽しげに上掛けを置み持ち去るとしている。

「えつ、ちゅつ」

洗顔のお水は水差しですわよー、ヒトオソはさつと部屋を出て行つた。

「なんで…」

ソナチネのつぶやきはむなしく響いた。

* * *

「…今日からですか？」

トオソがいきなり部屋にやつてきた理由がソナチネに知らされたのは朝食の席のことだった。

今朝早くに王宮からの使者と一緒にトオソと、今ソナチネの給仕をしてくれているヘオンが来たそうだ。公爵邸には現在、他に一族の者がいないので一人の食事だ。

「はい、ソナチネ様。アレグロ陛下の命で本日よりトオソと二人、あなた様にお仕えいたします」

優雅な手つきでソナチネのお茶を注ぎながらヘオンは肯く。彼女たちとはつい先日まで同輩だったはずだ。それがいきなり立場が大きく変わっている。

「それはつまり…」

「ええ。 いずれ玉座におつきのソナチネ様には私たちが側付きとなります。 今から慣れていただくためですわ」

慣れるも何も友達だったのだ、顔合わせなど必要ないではないか。そんな考えが表に出ていたのだろう、ヘオンが付け加える。

「ソナチネ様。 女王となられるのを簡単に考えておいでではありますか？」

いえそんなつもりは、むしろいつも私がその話を了承しましたか…そんな言葉はソナチネの口からは出てこれなかつた。食事中なので口に物を入れたところだつたのだ。

「ソナチネ様は召し上がりながらお聞きください。 いいですか？ 国王といつのは国の顔であらせられるのですよ？ 女王となられたソナチネ様には種々の儀式や祭典において主役として重要な役割がござります。 また、魔族や外国との折衝の場ではあなた様の一挙手一投足にその後の外交関係を変えてしまう力がございます。 さらには…」

国王の日々の暮らしにもこまごまとした決まり事があるなど、ヘオンの説明だか説教は朝食の間ずっと続いた。

要するに、彼女ら二人はソナチネの女王としての生活や作法、儀礼（ついでに美容関連のお手入れまで）の教師として派遣されたらしい。 彼女らだけではなく、マルカート伯なども今日からソナチネの教育のため日々の業務からわざわざ時間を割いて政治経済その他の知識を授けに来るそつだ。

何をどうやったのか議会での承認が無事に済み、国王アレグロの退位まで一月足らずとなつた今、それらを受けることがソナチネの仕

事であり義務となつた。

墓参りなどに行かず逃げるべきだつた、今頃になつて悟るソナチネ
だつた。

侍女の来襲（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

女子会の陰謀

20・女子会の陰謀

午前はヘオンたち、午後は王宮から来る様々な分野の人物から授業を受ける日々が7日ほど続いた。柔らかい子供の頭脳の時期を過ぎたソナチネの理解力と記憶力が教師たちを悩ませる時間も同じだけ経過した。

その間、ソナチネは墓参りの件もあって完全に自宅から出してもらえないくなつた。もともと甥公爵が不在で手の足りてなかつた公爵邸に、それでは不自由だらうということでヘオンたちだけではなく他の女手や近衛・ついこの間までの同僚・まで王宮から送り込まれてしまつたからだ。騎士団からはフイーネまでも寄越された。

「…可哀そうなことになつてるわねえ」

今はそのフイーネを囲んでヘオンたちと4人、女子会をしている。場所は公爵家の居間、お茶とお菓子を用意しての息抜きだ。この日は教師の都合がつかないのか午後の予定がすっぽり空いていた。

「本当に…」フイーネにそう相槌を打ちたいのをヘオンからの視線を受けてこらえたソナチネは長椅子でぐつたりしている。午前中、なぜか幾何学を教わっていたのだ。

次期王位継承がほぼ決定事項となつたソナチネには、フイーネも敬語を使わねばならないのだが、「今だけは忘れてください…」と涙目で頼まれたので普段通りの態度をとつている。

「でも、あなた王宮にいなくていいの？」

「ソナチネ様は、お勉強だけが仕事ですから」

楽しそうに答えるのはトロン。

フィーネの疑問は最もだ。国王の仕事を覚えるのなら、アレグロがいのちに側で見ておいた方がいろいろとわかりやすい。

「王宮は様々な人間が出入りしますから…」

そうぽかすのはヘオン。どのような思惑を持っているかわからない人物を、あまりソナチネに近づけたくないというのが本音だろう。

と、そこへ廊下に続く扉から声がかかる。

「ソナチネ様。お客様がお見えですわ」

カランド夫人の言葉に、両手で顔を覆うソナチネ。

「またか…。」

「はい。今日はヴィーデ様とおっしゃる方です。陛下からいただいだ名簿に名前がございましたので、応接間にお通しましたわ」

扉を開けて入ってきたカランド夫人の顔がほんのり赤い。あの美形ならさもありなん、とソナチネが一人ごちる。

「というわけで私は失礼します。せつかくなのですから3人とも今日は休んでください。近衛の方についてもらいますから」

護衛のため、立ち上がりかけたフイーネに「私の代わりに楽しんでください…」と弱々しく微笑んで押しとどめた。

不思議なことにヘオンまでそう薦めるのでフイーネは居間に残つた。

* * *

「…で？」

引き止めたのは何か話があるのだろう、とフイーネが促す。

今のソナチネに面会を申し込むには国王の許可が必要となつていて。ソプラノのような家族は別だが、アレグロが作らせた名簿に名前のない者は門前払いを喰うのだ。

その名簿に載つていて、教師役でない者といつと…。

「ヴィード様つて、漆黒の魔術師様ですよ！」

「へえ、そんな人まで名乗りを挙げてるの？」

情報通のトオーンは美形の情報にも詳しい。

「はい。こないだの舞踏会にもいましたし、一番目にソナチネ様と踊つたんです！ フィーネ様は見たことがあります？ すつしごい綺麗なお顔なんです！ それでソナチネ様つたら、お顔を真っ赤にして踊つてらしたんですつ！」

その場にいなかつたはずなのに見てきたかのように語る。そんな相棒を呆れて見やり、ヘオンが続けた。

「そうですね。外見も見栄えの良い方ですけど、中身も優秀と評判ですか。人柄にも悪い噂は聞きませんわね」

ほおつと息をつき、淑やかにお茶を口にするヘオン。「少なくとも今まで来た方々よりは随分上ですわ」と辛らつに締めくくる。自分で淹れたお茶の味に満足したのか一つ頷いた。

この二日之間、連日ソナチネの婿候補が訪ねてきている。授業中でも彼らが来ればソナチネは相手をしなければならないので、ヘオンからしてみれば少し迷惑なのだ。

「ねねつ、ヘオンはどう？ 誰がソナチネ様の婿になるのがいい？ やっぱりヴィード様かしら？」

だつてあんなに格好いいものの、とはしゃべトオン。叫んだ一下子にテーブルの足に当たっている。茶器が音を立てた。

「よしなさい。同じ屋敷にご当人たちが揃っているのよ

聞こえやしないでしきり、とヘオンが軽くにらんだ。王宮の侍女とは思えないほど雑なトオノに内心眉をひそめている。

「フィーネ様、ごめんなさい。私、お聞きしたいことがござりますの」

気を取り直し、ヘオンが真剣な目でフィーネを見つめた。侍女一人のやりとりに苦笑していたフィーネも居住まいを正す。

「お気になさらず。で、何を？ ソナチネのことですね？」

「はい…。私たち一人はこれから一生の方をお支えする覚悟でここに参ります。そうよね、トオン？」

「当然っ！ 悪くすれば共倒れだわ、私だって必死ですっ」

必死と言つ割りには少々軽いが、それがトオンの持ち味だ。

「そういうことです。…私がソナチネ様と出会ったのは3年前、フィーネ様はそれ以前からあの方どこ懇意にされてますわね？」

「ええ。私はあの娘が騎士団に入つたときから知っています。では、お聞きになりたいことというのはやはりラメンタ皆の一件ですか？」

「「」存知でしょうか？ 話していただくわけには参りませんか？」

「知つてはいますが…本人のいない間にききますか？」

言外にその悪趣味を指摘するフィーネ。あの事件がソナチネにとって触られたくない過去なのを彼女はよく知っていた。

「重々承知しております。決して興味本位でお尋ねしたのではありません。ですが、ソナチネ様本人からお話ししていただくのを待っている時間はないのです。アレグロ陛下はあと一月もしないうちに去ってしまいます。それまでに…ソナチネ様のご夫君を決めねばなりません。あの一件について知らなければ、私たちはあの方を傷つけてしまうのではないか、と心配なのです」

フィーネの目を見つめたまま、己の覚悟を見定めてもらおうと言い募るヘオン。その手は関節が白くなるほど強く握り締められている。

「…いいでしょう。ソナチネの心情までは知りません。ですから公式記録にも載つているようなこと、私が入づてにきいて知ったことをお話しします」

外ナ余の諜謀（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞれこまか。

魔術師の本氣

21・魔術師の本氣

女子会で己のことがとり立たされているとは知らないソナチネは、応接間で噂の美形さんと対峙していた。

こうして面会に来る人物はソナチネが舞踏会で「本気かな?」と思っていた4・5人に絞られている。消極的だった人々は知らぬ間にマルカート伯によつて振り落とされたのだろう。同じ人物が何度も来るのでが、ヴィードが来たのはこれが初めてだ。

「お忙しいところ、お時間を割いていただきありがとうございます」

輝くような笑みは舞踏会と同じ、昼間の光の中で見ても麗しい。今日は魔術師らしくローブを纏つている彼は、その黒い衣の効果で神秘的にすら見える。

「いいえ、今日は講義もなく予定が空いていたのです」

お気になさらず、と続けたソナチネは彼の顔をまともに見られなかつた。

(「だめだつ、顔を見て話すのは無理。まとも会話もできないなんて
どうしたら)

一度田なら慣れているかと思つたが、ヴィードの美貌は二日で飽きるような代物ではないらしい。

とにかく、応接間にはソナチネとヴィードの二人ではない。

扉の前に一人、窓の側に一人、それぞれの場所で内外に気を配っている近衛がいる。彼女の初心な反応に対して彼らからは生暖かい空気が伝わってくる。

「あの、『用件は?』

最初から用件を尋ねるのは失礼にあたるが、生暖かい空気に耐えられずソナチネは口火を切つた。

「舞踏会ではあまりお話ができませんでした…。私のことをきいていただいたので、今度はソナチネ様について伺えないかと」

「わ、わたしについてでしか、じゃなくて、ですか

焦りすぎて噛む。思わず「ヴィー・テの田を見てしまい、灰紫の輝きに紅潮したまま固まってしまう。そんな彼女にテンポよく質問が投げられた。

「はい、月並みな質問ですが、ご趣味は?」

「え? えーっと、乗馬と剣の手入れです」

「特技は?」

「馬術、ですかね。公爵領の馬術大会で優勝を」

「それは素晴らしい。では好きな色は?」

「え? えー、何でしょ?。白とか」

言つてしまつてから恥ずかしくなる。愛馬の毛並みが浮かんだのが、己の一つ名「白銀の騎士」のことを思い出したのだ。

「好きな言葉は？」

「好きな言葉？ うーん、『考えるなー感じろー』です」

「ほう、それは初めてきく言葉です。出典を伺つても？」

「コトネ様に教わったのです。神子様の。何でも彼女の『神』の言葉だそうで」

「なるほど、異世界の聖典からですか」

格言通り、深く考える前に感覚で質問に答えることで知らぬ間に普通の会話が展開している。

ついでにおかしな勘違いも。

この会話が耳に入つてしまつ近衛の一人は、ソナチネの元同僚などが彼女のことはよく知らなかつた。それゆえ、最初の質問の答えに少々口ケそうになつたのだが、最後の質問では一人とも完全に脱力した。

（なんだそりや…）

また、図らずもコトネの香港映画オタクが発覚したのだが、残念ながらこの場にそれを指摘できる者はいなかつた。

思つたより会話が弾んだ?」とソナチネはほつとしていた。笑顔らしきものを浮かべた彼女に気をよくしたヴィーデはある提案を出した。

「乗馬がお好きなら、遠乗りにでも参りませんか？」

* * *

しかし、遠乗りには行けなかつた。

軟禁状態のソナチネが、不特定多数の人間のいる王都近くの森や丘などの乗馬に適した場所へ行くことは国王の許可が出なかつたのだ。だが、ほとんど公爵邸から出でていなことを哀れに思つた近衛の一人が王宮へ戻り、王宮内の騎士団の馬場を使用する許可をもらつてきてくれた。騎士団の連中が鍛錬に使つてゐることは確実だが、ソナチネの安全は間違ひなく確保される。

（来るんじゃなかつた…。フィーネも冷たかつたし…。）

久しぶりに愛馬の背に乗つたソナチネの顔は暗かつた。

騎士団の、お互にその性格を存分に知る者たちの前で、ヴィーデとともに言葉を交わしながらゆつくり馬を歩かせているソナチネは後悔していた。同僚たちの遠慮のない好奇の視線の前で、ヴィーデの顔をまともに見ることもできない醜態をさらすことになつてゐる。フィーネも一緒に、と頼んだのだがヘオンたちと大事な話があるからとべもなく断られた。

「…どうかされましたか？」

ソナチネが浮かない顔をしていることに気付いたヴィーデが声をかけた。空氣を読まない彼でもわかるほど、元気がない。ここに来る

までは会話も（ヴィーネー）の中では（楽しんでいたのに。

「いえ、何でもありません。久しぶりに来れて楽しいです」

お前もつまらなかつたろう、トアーマート号へも声をかける。本心では、風を切るほど早駆けしたいと思つていた。

「やうですか？ よかつたです」

少し馬の足を早くし、会話を再開させた。

「 私からの質問の続きです。ソナチネ様の初恋について伺つても？」

答えにくければ理想の異性像とかでもかまいませんよ、と続いた。

「え……。」

ソナチネの顔には質問がいきなり艶めいたことにに対する驚きだけではない、他の感情があつた。

騎士団の者が大勢いる場所。質問の内容。その全てがソナチネを凍りつかせた。

「 …少々不躾でしたか。忘れてください」

相手の愕然とした様子に、さすがのヴィーネーも引き下がらざるを得なかつた。

その後、なぜか再び萎れてしまったソナチネを見たヴィーネーは、己の話で場を持たせた。存外に気配りのできる面もあるらしい。

* * *

「…今日はありがとうございました」

楽しかつたです本当に、とソナチネは言つがその表情が言葉を裏切つてゐる。

夕刻までという約束だつたので、日が翳り始める前に乗馬を切り上げ公爵邸に帰つてきた一人である。ヴィーデはここまで彼女を送つてきた。もちろん近衛もついている。

「…また会つてもらえますか？」

公爵邸の壮麗な作りの屋根の乗つた、正面玄関の前のことだ。ヴィーデが何故かすがるような目でソナチネを見つめていた。本当に破壊力のある表情だ。

「？　はい。ここまで訪ねていただかねばなりませんが…」

不安そうなヴィーデを訝しく思つて、ソナチネは答えた。彼女は自分と彼の立場も半分忘れかけているようだ。

ソナチネに拒絶されなかつたことに安堵したヴィーデは、ここで勝負に出た。

「ソナチネ様」

ソナチネの前に片膝をつき、その手をとる。

「私の気持ちを伝えるにはまだ早いのでしょうか…。ですが私が真剣

であることをあなた様に理解していただきたいのです。どうか、あなた様のこの手をとる権利を私にいただけませんか…？」

その美形で下から見上げるといつ反則技を使われ、頭が一気に沸騰したソナチネが返せる言葉は一つだけだった。

「…………。考え方でいいわい…」

咄まなかつただけでも褒めてほしい、とは後日のソナチネの言葉だ。

魔術師の本氣（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

次話、長い上に暗いです。

女騎士の過去（前書き）

暗くて長いです。

主人公が肉体的・精神的打撃を受けます。人死にもあります。
直接的な表現はしていないつもりですが、ご不快に思われる方もい
るかもしれません。
ごめんなさい。

女騎士の過去

22・女騎士の過去

自宅に戻った後もソナチネの様子は変わらず、他の女子会3人はた
いそう心配していたのだが、何故かそつとしておいてくれた。その
ことには気付かなかつたソナチネだが、放つておいてくれること幸
いとしてこの日は早めに就寝した。

その真夜中のことだ。

「 っ！」

ソナチネを過去の悪夢が襲つた。うなされて夜中に飛び起きてしま
つた。

「はあ…」

目覚めたことで悪夢が現実でないことを悟り、大きく息をついた。
両手で顔を覆う。

(昨日のことみたい…)

あの、顔。目に焼きついて離れてくれない。
突き刺さる視線の感覚を思い出す。

「初恋」という言葉とまわりにいた騎士団。その後のヴィーデの告
白。毎晩の出来事をきっかけに5年前の惨劇がソナチネの脳裏に鮮

* * *

「今日からやつと出発ですねえ」

お天気もいいし、幸先が良いですと嬉しそうに話しかけたのは彼女が見習い騎士として仕えるようになつたばかりの騎士アッラ・マルチヤだ。アッラも女性だが、16歳のソナチネよりも10歳以上歳の離れた大先輩であり尊敬する女騎士だ。

10代の細い体つきそのままのソナチネと違い、アッラは貫禄のある女性である。女丈夫という言葉そのままのたくましい体つきの、黒髪黒眼の彼女は馬上から目を細めて横を歩くソナチネを見下ろした。

「そうね。初めて赴任するのだから、嬉しいでしょう？　でも、親元を離れるのだからここからは甘えは捨てなければならないわよ」

騎士団に入った頃から何かにつけソナチネを気にかけていたアッラは、可愛い後輩がはしゃぐ姿に微笑みながらもたしなめた。

「もちろんです！　アッラ様、見てください。ちゃんとお仕えいたします！」

王都を離れ、向かうのは王国の東の守備を勤める第一騎士団の駐屯地の一つ、ラメンタ皆である。そこへ向かうのは一人だけではなく、新たに皆への赴任の命を仰せつかつた、20数名の騎士団の同僚と一緒にだ。

その中には新たに見習いとなつた者がソナチネの他にも10名近くいる。騎士は皆騎乗しているが、見習いたちは徒步だ。

気分良く歩いていたソナチネだが、実はこの旅立ちには喜びが半分、憂鬱が半分あつた。喜びというのはもちろん、騎士団に入つて一年経ちひたすら鍛錬だけを受ける日々が終わつて騎士らしいことができるからだ。半人前なのは同じだが、鍛錬だけではなく彼女らにも役割が与えられる。また王都と違つて毎日自宅へ帰らないので四六時中、騎士の面々から教えを請える。

そしてもう半分、憂鬱の原因は。

(あ、まだ。)

上天氣の出発だというのに、どこか暗い顔の少年が、ソナチネと同じように、騎士の横を歩いている。

斜め後ろから背中に感じる強い視線。それはその少年が放つものだつた。

少年、コーダ・ペルデンディシはソナチネと同じ頃から騎士団に入り、今はこうして共に見習いとして赴任する仲間である。

だが、貴族の中でも武を重んじる家風のペルデンディシ家の少年は、彼女を毛嫌いしている 少なくとも彼女はそう思つてゐる。

王子の遊び相手として王宮に上がつた時、年上の少年たちから爪弾きにされた経験があるので、ソナチネは嫌われることには慣れていた。時間をかけて自分を知つてもらえさえすればいつかきっと仲間に入れてもらえる、と信じるからだ。

事実、騎士団に入った当初も一人だけ女の子だったソナチネは他の

少年たちから中々相手にしてもらえなかつた。だが、半年かけて彼女の騎士への気持ちが本物であることを示し続けた結果、打ち解けるとまではいかないが、挨拶ぐらいは普通に交わせるようになった。

コーダ以外とは。

入団した日から、コーダには悩まされていた。当時はまだ、女であるソナチネの髪は長く、腰まで伸ばしたそれを一つの三つあみにして背中に垂らしていたのだが、それを見た彼は彼女の背中に言い放つた。「なんだかしつぽ生やしたやつがいるぞ。鬱陶しいな、切つてこいよ」と。

ひどい侮辱だつた。長い髪は、女の証だ。髪を切られるのは罪を犯した者だけ、それがなければ名譽ある女性とは見なされない。娼婦のよつね扱いを受ける。

当然ソナチネは怒り心頭に達したが、その場で決闘を申し込もうとするところをアッラにたしなめられて泣く泣く諦めた。

その後も何かにつけコーダはソナチネが女性であることを侮辱し続け、そんな彼がいるものだから他の少年までもが彼女を避けることを当たり前のこととするようになつた。一年経つても挨拶ぐらいしかできないのはコーダのせいだと彼女は信じる。

そんなコーダと同じ赴任地。ソナチネの憂鬱はそこだつた。

(しかし、なんでああも睨んでくるのかな…)

親しく言葉を交わしたことなどないのだが（侮辱の言葉はいつも明

後日から聞こえてくる)、視線を感じて振り返るとよくコーダがソナチネを睨んでいる。彼女が振り返るとすぐに視線を外すが、気が付くとまたこちらを凝視している。

(前途多難だなあ…)

空はこんなに綺麗なのに。

* * *

ラメンタ砦に無事到着した第一騎士団の面々は交代で王都へ帰還する者と入れ替わり、元々配置されていた人員と共に恙無くその業務を開始した。国境の監視・防衛、時折発生する山賊の掃討、周辺の治安維持が主な仕事だ。

ソナチネも見習いとしてアツラに仕えながら騎士の心得を学び、剣や弓、体術馬術を鍛える日々を過ごし始めた。

東の隣国とは友好的な国交が続いている、特に重大な事件もなく比較的平和な日が続いた。

「監視所に物資を届けるんですか?」

厩舎で馬の世話をするソナチネに、命令が下された。馬の世話は厩舎係の仕事なので彼女がやる必要はないのだが、馬の好きな彼女にアツラがそれならばと弓の愛馬をまかしてくれたのだ。

朝の運動が終わり、馬房の掃除もやつてしまつたので後は厩舎係に任せることになっている。

この後いつも自分の鍛錬をするのが日課なのだがこうしてその日

は予定が変わった。

その後もそんな日常的な日々が続くはずだった。

砦を離れ、国境線の傍にある監視所へ食料などの物資の補給へ向かわされたのはソナチネのような見習いが5人と騎士が3人だつた。物資を積んだ馬車を操る御者も入れて計9人で監視所へ続く森の道を進む。この日はいつも移動は徒步が基本の見習いたちも馬を与えられ、御者以外の全員が騎乗している。

(「少しうして護衛が必要つて」とは、山賊でも出るのかしぃ。)

その人員の中に見習いを多く含むといふことはさほど危険でもあるまいが、それでも帶剣の許可が出たのでソナチネも腰に挿してきている。

「監視所とはどのよきな場所ですか？」

質問は馬に乗つた見習いの少年から出た。答えるのは先輩騎士だ。

「やうだな。この森が切れたところにあるのだが…少し小高い丘で隣国がよく見える」

「やうなんですか…いや向こうからも丸見えなんですね」

「監視所なんだから当たり前だ。では、国境のすぐ向こうに隣国の監視所もあるのですか？」

同輩に突つ込んだ後、先輩騎士に尋ねたのはローダだ。そう、どん

な不運かコーザもこの任務へ就いている。

のんきな会話を交わす彼らにソナチネは疎外感を感じる。

（なんでもまた一緒になんだか…。）

早く行つて帰りたい。そう思いながら、馬を進めるソナチネだった。
簡単な任務。大きな事件もない平和な日々。それが彼らを油断させていた。

最初は矢だった。

石弓から放たれたと思しき矢がのんきに馬を進める彼らに田掛けて次々と飛んできたのだ。

「なっ！」

突然の攻撃にさらされ、見えない場所から飛来する矢に対し一瞬全員が硬直する。経験を積んだ先輩騎士がすぐに態勢を立て直すため指示を出そうとするが、その一瞬が命とりとなつた。

「全員…っ」

二列になつて進んでいた先頭の騎士の一人の防具のついていない首に矢が突き刺さる。言葉もなく崩れ、落馬する。

わあつと一気に現場の混乱が進む。実戦経験のない見習いたちは目前で起きた突然の凶行にこれまで積んできた訓練や教えを忘れ、動けずにはいる。

「荷を捨てて皆へ逃げろっ」

形勢不利を悟つた騎士が、叫ぶ。騎士としては不面目極まりないが、見習いたちにはまだ実戦で己の命を勝ち取るほどの力はない。

だが、それも遅かった。

二列になつていたことが仇となり、慌てふためいた彼らは馬を方向転換させることができない。馬の方も矢から逃げようとする本能と手綱の指示に惑つてゐる。

まいづくづくにも、左右から凶器は降り注ぐ。

ついに、同じように馬を返そつとまいづいていたソナチネにも矢が当たる。彼女の肩と彼女の馬の首、間をおかずには突き刺さつた。肩の衝撃と馬が痛みで棹立ちとなつたことで彼女はそのまま振り落とされた。

「ソナチネっ！」

落馬と肩の衝撃で意識を失う直前、名前を呼ばれたことは覚えてい る。しかし、何かを思う間もなくソナチネの意識は落ちていった。

* * *

(重い…)

意識を取り戻したソナチネが感じたのは、痛みと体全体にかかる重圧だった。目を開けようとするが、地面にうつ伏せに倒れているら

しきそれができない。ならば、なんとか起き上がりつと痛みの無い方の腕を動かそうとする。が。

「動くなよ…」

声が聞こえた。消え入りそうな小さな声が。自分の怪我の具合も、置かれた状況もわからなうことになってしまったソナチネがなおも動こうとする。再び声がする。

「動くなつて…。慰み者にやれる」

耳に聞こえるとこゝよつ、体に響いてくるよつたな近さで感じる小さな声。この声は。

「コーダ…？」

「声を出すな…死体のふつしてろ」

状況がわからないなりに、整理する。肩に矢を受けた後、自分は意識を失っていたのだろう。その前に名を呼んだのは確かにコーダだつた。察するに、それほど時間は経過しておらず自分は落馬して地面に臥したまま、外から見ると死体のような姿なのだろう。

そらに体全体に重さを感じるのは上から底うよつてコーダがのしかつているからだ。だから声が近くに感じる。辛うじて呼吸はできるが、非常に苦しい。

びつして庇ってくれるの、そつ問いかける前にソナチネの意識は再び暗転した。

* * *

「コード…？」

どのくらい時間が経つたのだろう。気付けば地面についた部分が冷たくてなんだかとても寒い。

小さな声で重くのしかかっている者を呼ぶが返事がない。それに

「コード」

先ほど感じていた服を通した人間の体温。伝わってくるはずの息遣いや心音。

それら全てが、ない。

耐え切れなくなつたソナチネは渾身の力を振り絞り、なんとか抜け出そうと試みる。動かせる方の腕を伸ばし、頭の方へと這い出す。

「はあつ、はあつ…」

脱出した彼女が見たものは、

* * *

結果的にいふと、その時の生き残りはソナチネ一人だつた。他の騎士や見習い、御者、8人全員が絶命しており、物資を積んだ馬車だけが無くなつていた。

ソナチネが目を覚ましたとき、すでに日が暮れてからかなり時間が経過しており森の中の現場は灯りのない真っ暗やみだつた。しかし、わずかな星明りでもその場の状況がわかるには十分だつた。一人立ち上がつた彼女が見たのは先ほどまではのんきに会話をしていたはずの仲間たちの無残な姿だつた。

それと 信じられないその事実。

現実を受け入れることができない彼女は、他の生存者がいなか確認すらせず呆然としていた。しばらくそうしているとようやく異変に気付いた皆からの救援が来たのだった。

* * *

皆に連れ戻されたソナチネは治療室で皆付きの魔術師に肩の傷の治療を施された。その後、怪我自体が重傷でなかつた彼女は何があつたのかをアッラに話した後、休むことを許された。

治療室でそのまま休むこととなつた彼女は、その寝台の上でぐつたりとしていた。

魔術による治療は、治るのが早いがその分体力を奪つていく。元より怪我をしたまま半日以上放置されていたソナチネの体力は落ちている。その上先ほどまで気力を振り絞つていた話をしたので限界に近い。休まねばならないのだが。

(…どうして)

あの時、立ち上がつてみたもの。仲間たちの変わり果てた姿も大きな衝撃だつたが、それ以上に、ソナチネの目に焼きついて離れない

姿。

傷を負い、地に臥していたソナチネは死んだ馬の横に並ぶように寝ていた。その彼女を馬の背と己の体で挟むようにして隠してくれていた者がいた。

コーダだった。ソナチが氣を失う直前にその名を呼んだ彼は、そのまま彼女の元へ駆け寄つたらし。そうして、彼女を庇つてくれた。

しかし 。

(どうして私を庇つたの？ 命をかけてまで)

コーダはソナチネを守るよう、彼女を体の下に敷いたまま絶命していた。始めに彼女が目覚めたとき既に矢を受けていたのだろう、己も致命傷となる深手を負いながら必死に彼女に警告をした。また、ソナチネの体は血だらけだった。彼女の怪我はそれほど出血はない。つまり コーダは自分の血を彼女の体につけてまで死体の偽装を施したのだ。

(どうしてそこまでしたの！？ どうして私なんかのために…)

毛嫌いしていたのではなかつたのか。嘲つていたのではないか。

ソナチネの心を、いつそ死んでしまいたいほど苦しめているのはコーダの信じられない死に際の行動だけではない。

(どうして…笑っていたの)

「一ダとてこんなところで、死ぬつもりなどなかつたはずだ。まだ16歳なのだ、これから長い将来があつたはずだ。自分の命が尽きよつとしているのに、その死に顔が笑つていたのは何故なのか。

星明りの中で見た「一ダの死に顔。助けが来て初めて、その顔から目を離すことができた。

戦闘で命を落とした者のものとは思えない、とは救援に来た騎士の言葉だ。

惨劇から8日が経過したが、ソナチネは治療室の寝台から未だ出られなかつた。治療の魔術で怪我はほぼ治つていたが、その精神的打撃から、体力の方がなかなか回復しないためだ。

また、まだ見習いの上16歳という若さで凄惨な経験をしたソナチネに、周囲も早い復帰を促さなかつ。アツラは頻繁に様子を見に来るが、優しく労わるような言葉をかけるばかりである。

昼間、アツラによつて襲撃者が捕縛されたことが知らされた。ラメンタ皆の周辺でも、監視所のあつた辺りは街道筋ではない。普段は行きかう人間などほほいない森の中に潜み、彼を襲つたのは、山賊だつた。商人たちが通うことのない監視所周辺に山賊が出没したことはなかつたのだが、どういうわけか街道筋から流れてきた連中が通りかかつた馬車の荷を狙つたのだ。山賊は手鍊れぞろいだつたのか、矢の雨から残つた騎士や見習いたちには応戦した跡があつたが、全員があえなく殺されていた。ソナチネ以外。

アツラは自分を含めた皆につめる騎士たちの油断が招いた事件だと言つた。山賊が流れできていることに気付かず、見習いたちに碌な警戒もさせずに送り込んだことに原因があると。

ソナチネは決して悪くない、一人生き残つたことに罪悪感を持つてはいけない、そう言いたいのがわかつた。そうは言つても、一緒に時間を過ごしてきた自分と同い年の見習いやあこがれていた先輩騎士たちが命を落としたのに、自分ひとりが生きているのだ。

（あのとき…どうしてあんなに油断していたの。もっと周りに気を配つていいたら。）

見習いとはいって、騎士となるべく積んでいた鍛錬は何のためだったのか。自分の身さえ満足に守れなかつた者に、誰かを守れるのか。

（私は騎士になると決めたのに…誰かを守る人間になるつもりだったのに。）

自分が守られてどうする。

その晩遅く、眠れないソナチネは己の細い体を抱きしめるようにして、寝台の中で震えていた。打ちのめされた彼女は、何度も自分を責めた。

皆に帰還してから、治療室で眠れない夜ばかりを過ごすソナチネへ、その日は訪ねる者があつた。

夜中だというのに、ソナチネ一人の治療室の扉を叩く者がいる。外から声がかかつた。

「起きている…？」

「え…？　どなたですか？」

思わず聞き返す。アツラの声でも魔術師の声でもない。聞き覚えはあるが…。ソナチネの問いには答えず、訪問者は扉を開けた。

「ラレン」

現れたのは見習いの少年だ。先ほろソナチネと共に皆へやつてきた一人でもある。誰だかわかると彼女の心は一気に暗澹とした気持ちへ落とされた。

彼は「コーダの友人だった。

「怪我は…どう?」

「…」

「コーダの友人だったラレンと親しくした覚えはない。こんな夜中にソナチネを見舞いに来るとも思えない関係の彼に、罪悪感とは別に警戒心が沸く。コーダを犠牲にして生き残った彼女に何をしに来たのか。

「何もしないよ…別に君をビリーヴしても意味ないし。それに君のせいじゃないだろ」

答えないソナチネの警戒を読みとったのか、勝手に話し始めるラレン。寝台のそばまで来た彼は彼女が怯えないよう、少し微笑んでみせた。

「君もきいたら、賊が捕まつたって。だからってわけでもないけど、僕も少し落ち着いたから、来たんだ」

「…何しこ？」

私を責めていいのではないの、意外に問ひ。

「僕は「コーダの友達だから」だったから。あいつが何を思っていたか、君に伝えないとあいつも浮かばれない」

もしかしたら眞府で怒っているかも知れないけど、と前置きして語る。

「コーダは君のことが好きだった。いつも君にはひどい言葉ばかり投げつけていたけど、本当はずっと君のことを想っていたんだ」

「え…」

考えてみたことすらない、ラレンの語る真実に凍りつく。

「「コーダのせいで君が迷惑していたのはわかつている。君の方は嫌いだつたら？」

「つねだ…」

「嘘じやない…。だつたらビーリして自分が死んでも君を守らうとするんだつー？」

思わずこぼしたソナチネのつぶやきに、ラレンは叫ぶ。平静なようになされたが、彼も内心抑えるものがあったのだつ。しかしそう後悔したように俯く。

「「」あん…。冷静に話すつもりだつたんだけど…」

ソナチネは無言で首を振る。怒つて当然なのだ、ソナチネはコードの命を犠牲に、生きている。

「でも、わからなかつた？　あいつ何かつていつと君の方ばかり見てたけど」

「そんな…あれば睨んでたんじや」

「いやいや。嫌いな相手をずっと睨んでるつておかしいだろ。好きだからこそ、つい見付かっちゃじやないか」

普通気付かないかなあ、と頭をかく。

「それに、君はきいてない？　騎士団に入るとき、同期に女の子がいるつて色めき立てやつらがいたんだけど、上から手出すなつて釘刺されてたんだよ」

「え、きいてない」

「やうなんだ？　だから皆、必要以上に君に近寄らなかつたのに。見習いの間は指をくわえて見てるしかなつて。コーダもやつ

「…彼は、私をいじめていふようにしか思えなかつたんだけど」

「ああ。それはあいつが悪い。優しくすることもできない相手にどうしたらいいかわからないからつて、あれはないよな。ほら、子供のときつて好きな相手をわざとこじめたりするだろ？　あいつのはそれと一緒に」

ラレンはもう言つて少し笑つた途端、その場にしゃがみ込んだ。手で覆つた顔から嗚咽が漏れてくる。友人を失つたばかりの彼に、ソナチネはかける言葉が見つからない。

「…『めん』

嗚咽がやんだ後もしばらくうずくまつていたラレンだが、ようやく顔を上げた。涙の跡が見えるが、ひどく凧いだ顔に苦しみの残滓はない。

「まだ信じられないんだ…あいつはいないんだよな」

再度、無言で首をふるソナチネ。謝ることなんて何もない。

「IJの話をきいて君は苦しむのかもしない…。でも知らないことある死を意味がわからなこまま覚えていこことになるだろ?」「それはあいつにも、君にもひどことじやないかと思つて来たんだ

「どうか忘れないでほし…」ローダーにとつて君は『初恋』だったんだ

最後に搾り出すよつて言えたラレンは、再び込み上げてきたものをごまかすように急いで治療室を出て行った。

* * *

ラレンが訪ねてきた翌々日、ソナチネはアツラに伴われて皆を離れ

た。体が回復しないことをうけて、彼女に王都への帰還命令が出たのだ。

騎士団に入れば、それまでの身分は関係なくなるのが普通だがソナチネは本来公爵家の姫君だ。その高すぎる生まればそう簡単に無碍には扱えず、実家から圧力がかかったのだろう。ソナチネが本調子なら抗うが（もともと親の反対を押し切って入団している）、今の彼女には周囲のなすがままにしておくことしかできなかつた。

女騎士の過去（後書き）

この話だけが異様に暗いです。すみません。

それでも、読んで下さりありがとうございました。

女騎士の現在（前書き）

前話の續れを若干引かずつけてこます。

23・女騎士の現在

悪夢によつて引き戻された、過去に起こつた惨劇とその後に明かされた信じられない真実を回想するソナチネは公爵邸の自室の寝台から立ち上がつた。

もう5年も経つたのだ あの事件から。

バルコニーへと出でられる窓の側に寄り、外を見た。一階にある自室からは公爵邸の中庭がバルコニー越しに見下ろせる。月光の下の光景はどこか、全てが青白い。

事件後、家へと戻つたソナチネはそのまま自室から出られなくなつた。閉じ込められたというわけではなく、彼女が出て行けなくなつたのだ。あれほど屋内で過ごすことを厭つていた令嬢の変わり果てた姿に、公爵邸の人々は大いに戸惑つた。

ソナチネを連れ戻したアッラはすぐに皆へと戻つていつた。体と心に傷を負つた後輩を最後まで気遣いながら。

部屋に籠つた令嬢に周囲はなんとか慰めようと心を碎いたが、彼女は応えなかつた。姉もいろいろと言葉をかけたが、直接的な言動を控えたためかうまくいかなかつた。

そうした日々が続いた公爵邸にさらなる悲劇が訪れる。

嫡男・ジョーコーンの訃報が届いたのだ。

突然の他界は家族に何の心に準備もさせなかつた。その息子ラルゲットが生まれていたことと、本人がすでに廃嫡同然だつたことを合させて、公爵邸に激震が走ることには変わらなかつた。

遺体が届いた後、慌しく葬儀が行われジョーコーンは公爵家の墓所に埋葬された。

それら全てから ソナチネは隔離された。最初、彼女には兄の死すら伝えられなかつたのだが、公爵邸の騒ぎに気付いた彼女が姉に尋ねたのだ。実兄のことである、隠しておくわけにもいかず自身も大きな衝撃を受けていたソプラノは彼女に話した。

先の事件も合わせ、立て続けに身の回りで起きた出来事にソナチネは完全に打ちのめされた。兄の葬儀に出席すらできず、部屋に一人籠り続けた。

「ソナチネ…？」

と、過去を思い出していたソナチネの浴室の扉が開かれる。

「「めんなさい、いきなり。外の見回りの者が、あなたが起きているのを見たの」

フイーネだつた。彼女の方はソナチネの護衛で夜中でも起きていたのだろう。

「いえ、いいんです。何か…？」

自分の部屋だ、夜中であらうと起きて立つてもいいではないか。

「ううん、少し…心配だったから」

「え…」

確かに昼間の出来事で元気を失くしてはいたが、フイーネに心配されなくてはならないほど自分はおかしかったのだろうか。5年の間に自分なりに整理できているつもりなのに。

「入つても？」

ソナチネの表情に感じるものがあつたのだろう、フイーネは意を決した。

「…どうぞ」

眠れないことはわかつていたソナチネは気心知る先輩を迎えた。

「何を見ているの？」

「別に…庭を見ていただけです」

「そう…座つても？」

椅子の一つを示す。

「ええ、どうぞ」

座つたフイーネはソナチネも向いの席へ呼び寄せる。

「実は昼間…ね。あなたの侍女たちにきかれたの。5年前のこと」

「どうして…」

先ほどまで考えていたことを言い当てられた気がして、啞然とする。

「？ 私は所属が違うから詳細は知らないのだけど…あの頃は第一騎士団の中でも話題になっていたのよ」

あなたは知らないだるうけど、と付け加える。ソナチネの疑問を取り違えたらしい。

「それで、彼女たちには私の知っていることを話しておいたわ。信用できると思うの。あなたのために知りたいって、とても真剣だったわ」

自分の方こそ真剣な顔でフイーネはまちづく至高の位へつこうとする後輩を見つめた。

「何があつたのか私は知らない…でもあなたはそろそろ解放されるべきではない？」

「わたしは別に…彼に囚われているわけでは

口を滑らすソナチネ。

「そう？ あなた今まで誰に何を言われようと、受け入れたことないじゃない」

誰に何を。何の話か察したソナチネは少々あせる。

「ぶつ！ 何で知ってるんですか？！」

「そりや、誰でもいいこう話は好きだから。噂を毎つてはダメよ」

浮いた話のないソナチネだが、騎士団の中は異性だらけだ。その中にはソナチネを憎からず思う者もたまにはいる。見習いの間は釘を指されるが、正式な騎士となれば話は別、そういう意味での申し込みをされることはあるのだ。ただ、受け入れたことがないだけ。かくいうフイーネと、そうやって出会った騎士団の者と婚約している。

「…フイーネはまだ」「存知なんですか？」
あるとでしょ？…？

恐る恐るたずねる。

「やうね。あなたとペルティンドシ家の次男が将来を誓い合つた仲で、あなたは未だに彼に操立てしてるので」

わざと軽い調子で言いながらも、ソナチネの表情を探る。一気に核心をついたが、彼女の触れられたくない部分に触つてしまつたのは確かなのだ。

一方、ソナチネは、ちょっとびり脱力した。

「…なんなんですか。それは」

そんな話が作られていたのか。

「え？ ……違うの？」

「誓い合つた覚えはありません。生前は彼を……仇敵のようと思つていましたから」

今日はフイーネの方が驚いた。第一騎士団で流れた噂はガセなんか。

「…姉にも話すように言われました。あの後、誰にも話せませんでしたから」

田を閉じ、両手を握り込んで決意を固める。

「今なら話せると想います。きいていただけませんか？」

「…私でいいなら」

ありがとひやりますと続け、ソナチネは5年前の惨劇とその後をフイーネ相手に語つた。

* * *

「それでその後、あなたはどうやって…その、立ち直つたの？」

「…何ヶ月も部屋から出なかつたです。でもある日気が付きました。コーダが生きていたらこんな状態のままの私は軽蔑される」

「彼はこんな私を救うため命を落としたのか、そう考えたらいてもたつてもいられませんでした。彼の命に見合つ人間とならなければ、

と

それは自分でたどり着かなければならない結論だった。他の誰かに諭されたのなら、ここまで強い想いを抱けなかつたろう。その時の決意どおり、ソナチネは努力した。騎士団に戻り、ついに正式に騎士として叙任された。

「それで第一騎士団に？」

「はい、私は第一騎士団に戻るつもりで準備を始めたのですが…両親の反対にあいまして」

「兄が亡くなつたばかりで、私にまで先立たれたら、と。…もともと騎士団に入ることにも反対していたのですから、膠着状態でした」

「そこへ助け舟を出して下さつたのが、義兄上です」

「団長が！？」

何故かとつても驚くフイーネ。哀れ団長。

「…。はい。赴任地の遠い第一騎士団ではなく、王都にある第一騎士団ならば両親も安心だろうと」

義兄上はペルデンドシ家の遠縁で、それで私のことも知つたのだと
うです、と一旦締めくくつた。

ソナチネは話さなかつたが、彼女を第一騎士団へ誘うため公爵邸へ訪ねてきた時が義兄と姉の馴れ初めだ。よくわからないが、ソプラノの一目ぼれらしい。

「じゃあ結局、そのコーダを忘れられなかつたのではないの？」

「わかりますね」

「…だとすると、あなたが誰の誘いにも乗らないで答えたにはなつてないんじや？」

「…彼のこと好きだったことは一度もあつません。でも」

「…ことよどむソナチネ。過去にあつたことを話すだけなら、でもあります。うになつた。だがここからは、彼女の内面に深く関わる。

茫洋と視線をさせながら、ポツリといいます。

「見られていいような感覚が抜けないんですね」

「見られていい？」

小さく頷く。

「コーダは」「くなりました。ですが、その後もしばらく彼の視線を感じたんです」

「…お化け？」

「違つと思います。だから、私が囚われているものがあるとしたら…それですね。彼が私に何かを期待していたとも思えないでの、勝手に私が囚われているだけなのです」

ソナチネは生きている。生きていれば気持ちも変わるし、記憶が變

昧になつて薄れしていくものだ。彼女とて女だ、これまでにそういう申し込みを受けたとき心が揺れることも胸が騒ぐこともなかつたわけではない。

だけど。

(やつこつ時に感じる、あの視線を)

コーダのことを今更想つているわけではない。それは断言できる。だが、ソナチネの心が揺れるたび、どうしても彼の視線を思い出なのだ。

そうして、悪夢を見る。コーダの笑った死に顔が脳裏に蘇る。

こうなるとソナチネの心は前へは進めない。だから、勝手に囚われているだけなのだ。

女騎士の現在（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

24・家族の帰還

フィーネに全て話した翌日からはいつものソナチネだった。以前の日常へ戻れるわけではないが、渋々ながらもヘオンや教師たちの教えを受け、婿候補の訪問を迎える。

「…つらいですねえ」

と、トオン。

今は午後、ソナチネは副財務大臣から経済の大変な授業を受けている。たぶん心は半分死んでいることだろう。

トオントヘオン、フィーネは再び女子会だ。といつてもお茶会をしているわけではない。公爵邸の侍女部屋で密会中なのだ。ソナチネからきいた話を本人の了解を得て報告した次第。

「今まででは誰を選んでも同じですね。ソナチネ様は好もしく想う男性像はない、と以前おっしゃってましたけど…」

だからといって、こちらで全てお膳立てした相手を夫として、ソナチネは幸せなのか。ヘオンは悩ましげに額に手をあてた。

「…しかし、そもそも言つてられないわね。本人が決めないからって待つてくれないわ」

サラサラとした金髪をかき上げて、フィーネも言つ。彼女とソナ

チネを可哀そうに思う。しかし、可哀そうと思つて周囲がそつとしそうにいたからこそ、今でもソナチネは囚われたままなのだ。ソナチネが乗り越えてくれることには外野が何を言つても変わらない。悩む3人があと半月ほどで国王が退位してしまつ。時間は待つてはくれない、とため息をつく女子会だった。

* * *

「ラルが王都へ帰つて来るつて？」

「はい。先ほど公爵領からの早馬がつきました。『当主様と若奥様、大奥様は早ければ明後日にはこちりに到着のことです』

そうか、とソナチネは頷いた。経済に関する複雑怪奇な授業の後、自室で復習らしきものをしていた彼女にカランド夫人が伝えたのだ。

「準備は？」

「明日、至急人を入れて行いますわ。ソナチネ様はいつも通りしてらしてくださいませ」

騒々しくなりますがお許しくださいね、と忙しくなったカランド夫人は仕事に戻つた。

「母上も義姉上も一緒に…」

公爵領で暮らす甥・ラルゲットがその母と祖母と共に王都へ帰つてくる。なんだかまた一波乱ありそうだな、と一人ごちるソナチネだつた。

* * *

甥たちが公爵邸へ到着した。大勢の使用人を伴つてのことである。が、現在公爵邸は王宮から送り込まれた護衛によつて出入りが管理されている。ソプラノが知らぬ間に手を回して公爵家の使用人を屋敷に入れられるよう手配していたらしいが、それでも多少の混乱があつた。

だが7歳の子供にとつて、大人たちの騒ぎは祭りも同然だ。はしゃぎながら駆け寄る姿は愛らしい以外のなにものでもなく、ソナチネの癒しだつた。

「おばづえつ！ むひさしふりです」

全速力で駆けてきて力いっぱい抱きついてくる甥を、正面玄関で出迎えて受け止めるソナチネ。自然彼女の顔にも笑みが浮かぶ。

「ラル。ひをしふりね。馬には触れるよになつた？」

兄よりも義姉に似ている。薄茶の髪に灰色の目をした本当に可愛らしい子供だ。王都を離れたのは半年前、一年のうち半分を公爵領で過ごす甥と年中王宮の騎士団の宿舎で生活するソナチネは一緒にいる時間は少ないが懐いてくれる。

「はい！ ぼくの子馬がいるんです！ 今度おばづえにもお見せしますよ」

それは楽しみね、と笑いながら甥の頭を撫でるソナチネに、ようやく

く走つていった息子に追いついた義姉が挨拶をした。

「ソナチネ、久しぶり。元気だつた？」

ふんわり笑うスラーは柔軟な印象の貴婦人だ。だが、嫁とはいえ彼女も公爵家の一員、見た目に騙されてはいけない。

「… 義姉上。お久しぶりです」

そちらこそお変わりありませんか、とぎこちなく返す。ソプラノから今度の件の話を知らされているだろうにそ知らぬ様子で「ラル、急に走つていっちゃダメでしょ」と息子をたしなめる彼女が怖い。それに…。

「ソナチネ」

「母上」

義姉の後ろから、母が呼んでいる。甥を義姉に返し、急いで母の元へ寄る。

「お久しぶりです… 母上はお変わりありませんでしょうか」

孫がいるとは思えないほどの若さと美貌を保つ先代公爵夫人・シメレは、眼前にやってきて軽く頭を下げ挨拶をした娘の姿に目を眇めた。

「あなたも変わりの無い事…。まだそんな髪をしていて、それにその服装」

「…申し訳ありません」

実は、ソナチネは母と折り合いが悪い。いや、生前の父とも悪かったので両親ともそりが合わないと呟いた方が正しい。幼いころ、姉にばかり目をかけてきた両親とは、さらに騎士団に入るときに大喧嘩を繰り広げたせいで、まだに苦手意識が先にたつ。

「まあ、いいわ。いらっしゃい、話があるのよ」

甥のおかげで癒された心が重くなる。今回のことでの母が何を言うのか、考えると。

「じゃ、おばれま、後でおばれまのお見せくださいね」

無邪気な子供の言葉に送られて、後ろ姿が昔と変わらぬ母へついていくソナチネだった。

家族の帰還（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞれこまか。

「せつかも言ひたけど、ソナチネ、その髪はどうしたの」

何度も伸ばせと言わせるあなたは、と母は早速たしなめる。

母の部屋だ。一間続きの居間で一人座った途端母の説教は始まった。

「申し訳ありません…。でもこれは譲れないです」

ソナチネが今の耳のあたりまでの長さに髪を切ったのは、5年前の惨劇の後第一騎士団へ所属を変える直前のことだ。騎士となつて一生を国に捧げる その決意表明のため鋏をとつて自ら切った。女であることは捨てたも同然と、見せ付けたかった。

あの時も両親が騎士団へ戻ることを猛反対し、言い合ひになつた。そこへ鋏を持ち出した娘は田の前で口の髪をジョキジョキ切りだしたのだ。

「そんな髪で女王となる氣なの？ 全く信じられないわ」

「… 髮の長さなんて関係ないでしょ？」

やはり知っているのか、と思いながら反射的に言い返す。

「何を言つておるあなたは。女王は國の顔なのよ？ そんな娼婦のような髪では國の恥です！」

「～誰も女王にしてくれなどとは、望んでいませんーー」

「… そう。 そうね、ならラルに譲りなさい」

「… やはり母上はそうお考えですか」

父と一人あれだけソブリノを王妃にしようと工作に協力していた母だ。玉座を手に入れるこの機会を逃すはずがない。だが、どうあっても次女を認めない氣か。

「あの子は生まれたときから私がそばで見てきました。今は幼くともいすれ賢王となるでしょう。どの道あなたは結婚などしないのでしょう。ならばあなたの死後、ラルのものとなることには変わりありません。だつたら今譲りなさい」

「… それは」

「議会が承知しない？　だつたら今すぐ陛下に願い出てもう一度召集してもらえばいいでしょう。自分にその器がないことを認められないの？」

「… わかりました」

すつぐと立ち上がるソナチネ、その足で真っ直ぐ扉へ向う。開けて出て行こうとする彼女だが、何故か扉が重い。不思議に思いながらも、力を込めて開ける。

「… 何をしていらっしゃるのです？」

開けた扉の向うには、赤い顔をした義姉と女子会3人が揃つてい

た。

「義母上のお話が終わつたら、今度は私の話をきいてもらえないかと待つていたの」

珍しく失調した義姉がいち早く回復し、その場を取り繕つ。聞き耳を立てていたのは確実だが、名分があつて待つっていたと言われば仕方がない。

「…急用ができました。後にしていただけませんか」

「だめよ。今、来なさい」

急に真面目な顔になつた義姉はソナチネの手をとると強引に連れて行つた。後には呆気にとられた女子会と室内にはあきれた母が残つた。

* * *

「悪いとは思つたけど、義母上のお話をきかせてもらつたわ

今度は義姉の部屋だ。こちらは昔、兄が使つていた。

「…押し付けるよつて申し訳ありませんが、ラルにとつても悪い話ではないのです?」

「…そんなわけないでしょ?」

はあつと盛大なため息をついて両腕を組む。いつも気品のある義姉の仕草とは思えない。

「あのね、この機会だから言つておくけど、息子が公爵と呼ばれるのも私は嫌なのよ？」

「えつ……？」

「初めて私がジョヨーンと会つたとき、彼はどんな格好だったかわかる？吟遊詩人よ。その後もずっとそうだったけど」

「その上彼は自分の身分を隠して私を口説いたのよ？私は結婚してここにくるまでジョヨーンが公爵家の若君だなんて想像すらしなかつたわ」

「彼の求婚を受けたのだって、彼が自分の楽団を率いるぐらい甲斐性のある男だつたからだわ」

何でも義姉・スラーの実家の伯爵家は没落しかかつており、普通の貴族の結婚相手は最初から望むこともできなかつたため、彼女は平民でも自分や両親を養つてくれる人物なら誰でもよかつたらしい。公爵家を飛び出して自活していた兄はあれでひとかどの人物だつたのだろう。

「私が夫に望んでいたのは一つだけ、平穏でお金に困らない生活を与えてくれることよ。…それは叶わなかつたけど。彼は実家に私を一人置いて行つてしまつし」

あんなに早く逝つてしまつたし、と苦笑する。

「…だから突然息子を国王に、なんて私には不幸以外なものでもないわ」

いや、それは私も同じ…、とソナチネが言い返す前にスラーはガバ

リと身を起し、ソナチネの手をとつた。

「だから、ね？ ソナチネは」のまま女王となって、つこでに結婚して子供を生んでもちょうだい」「

「正直、義母上の影響下からワルを守るのだって一苦労なのよ。国王になんてされたら完全に私の手から取り上げられてしまつわ」「わ

だからお願ひ、そう言つたスラーはソナチネが肯くまではそのたおやかな手を放してくれなかつた。

母親の心情（後書き）

読みで下りてあつがとひらげこま。

姉の提案（前書き）

短いですね。

本当はもっと字数をかけるべきなんですが。

姉の提案

26・姉の提案

甥たちが到着した夜は姉夫婦も公爵邸を訪れ、家族だけの晚餐会が行われた。大人たちは皆、内心の葛藤を押し隠し表面上は和気藹々と食事を楽しんだ。

食事の場で甥が義兄を指し、「魔王のおじちゃんだ」と叫ぶという椿事が起つたがそれはそれで微笑ましいものだった。義兄本人と、甥に余計なことを吹き込んだ犯人と目せられたソナチネ（濡れ衣）以外には。

ところで、義兄を捕まえて「陛下の異世界行きを阻止する計画はどうなりましたか」と尋ねると「…ソプラノに止められた」と返事が返ってきた。

ちっ、使えねーな。

そのときのソナチネの心情を端的に表すといつなる。

* * *

その夜は、墓参りのときに話せなかつた5年前の件を姉に話すことができた。義兄だけが帰り、今夜は久しぶりに実家で泊まるそうだ。姉妹一人、同じ部屋で眠るのは子供の頃以外だ。今はソナチネの自室、寝台は姉に譲り自分は運び入れた寝椅子で横たわる。

「… そうだったの」

「私は恋愛感情を持つのが、無理なのかもしません」

話し終えたソナチネは自嘲的な笑み浮かべる。

「では、どうするの？ 陛下の決めた相手と素直に結婚するの？」

「… それも決心がつきません。本音では女王になることだって納得したわけではないです。私のような人間がなつていいものでしょうか？ 母上だって反対しています」

「ああ… 母上のことば忘れなさい。あの人は何もわかつていないのよ」

国王との婚約を破談にした長女を母はいまだ完全に許していない。晩餐会でも嫁や孫に話しかけるばかりで、姉妹と義理の息子はいなにも同然だった。義兄にとつては本当に散々 な夕食だったと言える。

「… そうでしょ？ 私には障りばかりがあるように思えてきました。ラルの方がましなのでは？」

「… 今も視線を感じるの？」

「最近は…。ヴィーデ様に求婚されたとき、少し」

悪夢も遠ざかっていたのだが、その夜に久しぶりにみてしまった。

「そう」

ソプラノはそのまま黙ってしまった。身重なら急に歸らなる」ともあるか、と思い灯りを消そうとしたソナチネを、眠っていたわけではないのか姉が止めた。

「ねえ、ソナチネ。こいつ考えるのはどいつ？」

「姉上？」

寝台で目を開じたまま、姉は言葉を連ねる。

「その視線はあなたを望んでいた者の中ではないわ……あなたが道を誤らないか、見張っているものなの。あなたを縛りつけようとするものではなく、女王となつたあなたが国事を誤り、民を傷つけないよう監視する田なの」

姉の言葉に、泣き声になる。そんな風に考えたことはなかつた。

「見張るって言い方が嫌なら、見守るでもいいわ。どいつ？」

嗚咽が漏れる。姉の言葉が、この5年の呪縛を優しくものへと変えてくれる。気付けば涙が止まらない。溢れてくる熱い涙を拭いながら、言った。

「そいつ…か。ひつ、ひつぐ。コーダ、が見守つて、くれているん、ですね。ふえつ」

「せうよ、だからあなたは彼の田に恥ずかしくない女王とならなければ」

「はい…。」

全て納得できたわけではない。でもこの夜は一つだけ、ソナチネにも覚悟ができた。
死んだ者は帰つてこない。だからソナチネは努力し続ける、その理由ができた。

姉の提案（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

27・侍女の目撃談

「ソナチネをまーーー、きいてください」

公爵邸での晩餐会の後、一日ほど経つた。国王の退位まで半月を切り、いよいよソナチネは忙しくなっている。付け焼刃の知識となることは日に見えていくが、女王教育も佳境に入ってきた。ヘオンたちの行儀作法などの授業は終わり午前中も頭を悩ませるような難しい話をする教師が送り込まれるようになつてゐる。

母はまだうるさいが、姉の助言を受けて聞き流すことにした。

義姉は元の上品な貴婦人に戻つた。時折すがるような目で見てくるので気持ちは変わらないのだろう。

ちなみに甥たちが公爵邸へ急遽帰つてきたのは、ソナチネの即位式へ出席するためだったそうだ。ソプラノだけでなく、国王御自ら筆をとつて呼んでくださつたとのこと。

午前中の授業が終わつて、昼食で一息ついていたソナチネのところに王宮へ所用に行つっていたトオング血相を変えて飛び込んできた。

「トオング！ ノックしなさい！ 走らない！」

子供にこいつのような注意をしてしまつのは給仕をしていたヘオンだ。

「そんつなこと言つてる場合ぢやないのつー、大変ですつ、ヴィーデ様浮氣してますつ」

「はあつ！？」

「トオン…『ヴィード』様はまだソナチネ様の夫でもなければ、婚約者でもないのよ？」

驚いて言葉にならないソナチネに代わり、ヘオンがこめかみを押さえながらトオンに向う。

「今はそうでも回じ」とぞしょつ！ ソナチネ様つ、びりしましょう！」

「びりしましょうつて…。トオンは何か見たの？ 誰かからきいたの？」

ヘオンの言つとおり、別に彼は婚約者ですらない。困惑するが、それでびりじりと言つのだらう。

ヴィードは先日の求婚以来公爵邸を訪ねていない。だがあの時の彼は真剣だった。トオンの言つとおりなら、彼は真顔で嘘のつける人間ということである。それは確かに問題だ。

「見たんですつ！ 」の田で見たんですつ！」

「何を？」

「だからあ、浮氣現場ですつてば！」

トオンの話すところによると、彼女が所用を済ませて帰らつとすると言い争う声が聞こえたという。声のする方へ行ってみると、そこにはヴィードと若い女性がいて何やら言い合つていたそうだ。

「その上、すうじぐく意味深に見つめ合っていたんですつ！」

「ふーん」

「ソナチネ様'反応薄すぎつ！　一大事ですつて！」

「うーん。確かにね。陛下も彼がイチ押しだから、このまま行つたら彼にとつては一大事かも」

「彼にとつてはつて…」

「だつて恋人がいても強制的に私と結婚させられるわよ？　一大事じゃない」

思わず突っ込んだヘオンを振り返る。ヘオンもさすがに苦笑いだ。

「ソナチネ様おかしいですよお。ヴィーデ様の方は一股する気かもしれないんですよー？」

ああそつか、それでもソナチネの反応は薄い。

「トオング、女性の顔は覚えてる？」

「もちろんつー！」の間に焼き付けたわつ

「ヘオン？」

「ソナチネ様。結婚前から嘘をつくような男は碌なものではありますわ。たとえどんなに顔が良くても！」

「だからソナチネ様、確かめて参りましょ」

可憐な侍女はそう言つてソナチネの手をとつた。

読んで下さりありがとうございました。

28・女子会の探索

ヘオンの指示のもと、午後の授業は仮病で休むことにした。そうしておいて、護衛のフイーネも巻き込み王宮の魔術院へ忍び込むこととなつた。

自モである公爵邸の抜け穴、王宮の抜け道両方を知るソナチネだからこそ可能なところだ。

「今更だけど、こいつそり行くのはまずくないかしら？」

「今頃何言つてるんですつ、フイーネ様つ」

「行かなきゃいけないときもあるんですね女にまつ、とはトオン。

ヘオンはソナチネが公爵邸を離れていなことを偽装するために残り、護衛のフイーネと目撃者のトオン、ソナチネの3人は王宮へ入つたところだ。

「うかがなあ、正直に王宮へ行きたいって言えば出してくれるんじや、と未だにぼやくフイーネだが本気で止める気はないらしい。

「…まだ逢引中だつたら、ただの覗きですよね」

「ソナチネ様つ、何てこと言つんですか…？ 浮氣現場を押さえたつて言つんですよつ」

「いや、やうじやなくて。そろそろ護衛を連れてやることでもないなあ、と」

「…そろそろ魔術院よ、黙つたら？」

フィーネの言葉で口を閉じた残り2人。しばし無言で歩く。

王宮の一角、魔術院の建物は独特だ。王宮の建物は大概が、王国の特産物である白花石で建造されており、すこし黄みがかつた白の柔らかい色合いをしている。

が、魔術院だけは違うらしく、いかにもそれらしい毒々しい黒紫色をしている。形も一風変わっていて、規模の割りには塔が何本もあり、それらはどういう用途に使われるのか、外部の者には知られていない。

その魔術院の毒々しい建物の裏手と思われる場所に3人はこっそりと忍び込む。魔術に使うのか正体不明の物体（恐らく植物）が大量に干しにされていて、妖しい雰囲気が漂う。

「…トオンはどうで彼らを見たつて？」

小声でソナチネが確認する。

「ここじゃないです。外でしたけど、裏じゃなくて正面だったのかなあ？」

あとの2人もだがトオンと魔術院へ普段出入りするわけではないので、先ほど自分のいた場所があまり確かではない。どうでもいいがトオンはこんなところで一体何をしていたのだろう、とはフィーネの疑問だ。

「どうしましょ？　さすがに中に入るのまことに思ひます。何が仕掛けあるかわからないですもんね？」

「そうね…。侵入者除外の術が施してあるかも知れないわ」

トオノは当てにならないと他2人が相談する。

「そもそも入り口がわからないですし…、あ」

しつゝ、と指を立てるソナチネ。

毒々しい黒紫色の壁が続くばかりで、扉や窓らしき物が見当たらない。が、たまたま誰かが通りかかるのか、話し声が聞こえてきたのだ。

3人は控壁の影に隠れた。

3、4人の魔術師のローブを纏つた男女が丁度建物から出てくるところだった。何やら話し合いで夢中らしく、彼女たちには気付かず行ってしまった。

「あれ、壁みたいに見えますけど扉ですね」

壁と同じ石で作られた扉が付いていたらしい。まぎらわしい。

「あそこから入れそうですが、どうでしょうね…」

中に入つてみるべきか。しかし彼女たちも目的は忍び込むことではなく、ヴィーデの恋人？を見ることがある。外から眺められるならともかく、魔術院に入り込んではただの侵入者だ。

「…ソナチネ様つ。ここまで来て何言つてるんです？」

「うーん…。ま、別に積極的に見たいわけでも」

もう帰ろつか、そう言いかけた時、トオンが肩を掴んだ。

「あの人っ！ あの人ですっ！」

今度は、彼女たちがいる場所とは反対方向から魔術院へとやつて来る人物がいた。

どうやら、トオンが目撃したヴィーデの恋人らしい。その若い女性、というよりは少女と言つた方が正しいような年頃の娘はローブを纏つている。

20歳に1・2歳届かないくらいだろうか、長い栗色の髪をお下げにし、パツチリとした紫色の瞳の印象的な可愛らしい少女だ。

「ほらっ！ あんな可愛い娘を口説いたんですよ、彼！」

本当はああいうのが好みなんですヴィーデ様はつ、と地味にソナチネを傷つけるトオン。

「ん？ あれって確か。ねえ、フィーネ」

「そうだわ…あれは、の方は」

何かに気付いた様子なのは騎士2人、トオンは驚きに声を上げる。

「知つてる人ですか！？」

「うん…、というより、トオン、何故あなたが知らないのかがわからない」

「えええつー? バラバラのことですー?」

「トオン、あれは副魔術師長よ」

「……えええつー!」

「王妃付きだつたあなたが何故知らないの。の方はコトネ様とは懇意だつたのではないの?」

「えーっと、そういうばらりつと見かけたことがあるようなないような…」

「トオンがコトネ様付きになつたのは、の方が一度失踪されていた後のことだから

それ以前は、元の世界への帰還方法を探すため魔術師長と共に頻繁に会つていたが、コトネが一度この世界で生きることを受け入れてからは会う必要性がなくなつたため訪ねて来なくなつたらしい。情報通を自認するトオンとは思えない失態だ。

とはいえ。

「…の方は確か、20年くらい前から副魔術師長だつたと…」

「そうね、記憶にある限り、副魔術師長といえば炎獄の魔女ピウ・モツソだわ」

「あんなに可愛い娘が！？ あの炎獄の魔女！？」

可憐な容姿と恐ろしい二つ名を持つ副魔術師長はほぼ伝説の人物だ。

「ハフ…てことは？」

トオノの見たものは

「まあ、恋愛に年齢は関係ないとは思うけど」

「私、ピウ様の実年齢考えたくないなあ」

それだけで呪われそう、とソナチネ。

見た目が異常なほど若い炎獄の魔女の実年齢についてはともかく、こうなるとトオノの目撃したものが痴話喧嘩やそれに相当するものであるという話は一気に信憑性が薄くなる。恋愛に年齢は関係ないだろうが、伝説の人物がヴィーデのような若造を相手にするだろうか。そりや奇跡のような美形だが。

「…今度こそ本当に、帰りましょう」

「う…」めんなさい

ヴィーデの浮気疑惑で相手の顔を見に来ただけなのだ。とにかく、相手？の顔は見たので目的は達せられた。もうここに用もない。

3人が、抜け道へ戻るうつ振り返ったその時。

女帝の深窓（後書き）

読んで下せりてあつがといへりぞれこまか。

女騎士の選択（前書き）

15話目で折り返しと書いていた通り、すでに佳境です。

女騎士の選択

29・女騎士の選択

見咎められぬよう身を屈めていた姿勢から立ち上がり、来た方向へと戻ろうとしたソナチネに、ここでは聞きたくなかった声がかかつた。

「ソナチネ、こんなところで何をしているんだ」

ギギギギギ。そんな音を立てそつなほど細かく震えながら、声の主へと振り返る。血の気が引いていくのを覚えながらも、何とか声を絞り出す。

「……へいか

振り返った先にいたのは、国王アレグロその人であった。

今日も変わらず麗しい彼の金髪は陽光を弾いて輝いている。その瞳も青空に映えて美しい。

ついでに彼は、国王としての政務の途中なのか近衛だけでなく様々な人間を大勢従えていた。

我に返り、慌てて臣下の礼をとろうとする3人を国王自らが押しとどめた。

「ああ、挨拶はよいから…。しかし本当にここで何をしていたんだ？」

「はい。あのですね、ええと。今日は本当にようお天気だったの
で…」

驚きと狼狽で慌てふためいたソナチネはほぼ意味のない言葉を連ねる。そこからどう言い訳に繋げるつもりなのだらう。

「恐れながら、国王陛下。ソナチネ様はヴィーデ様にご用がおあります」

フイーネの言葉をナイスアシスト!、と思ったのは一瞬だけだった。

「そうだったのか！　おお、よい巡り会わせだな、本人が来たぞ」

国王の言葉につられて後ろの建物を振り返ると、幾人かの魔術師が出てくるところだった。その中にはヴィーデや体重の戻りつつある魔術師長や副魔術師長の姿も見える。

どうやら裏手と思っていたこの場所は魔術院の表側、裏口のように目立たないわかりにくい扉は正面玄関だつたらしい。

彼らは国王を出迎えに来たらしく、膝をついて臣下の礼をとつた。鷹揚に受ける国王。

両者のちょうど間に挟まれる位置にいた3人は横によけている。

「ご用」の内容についてはまだ白紙であり、窮地からまた別の窮地へと追いやられそうなソナチネがうろたえていると、渦中の美形さんが彼女の存在に気が付いた。

「ソナチネ様…？　何故ここに？」

急いで歩み寄つてくるヴィーデの迫力に少々気圧されるソナチネ。

今日も鴉の濡れ羽のような髪は艶やかで、明るい日の下で見るその

顔は神々しいほど美しい。灰紫の瞳をひたとソナチネ一人に合わせた彼には他のものが映つていなかのよう。

「機嫌よう、などと無意味な挨拶をあてどなく口にしてみるが、何もわかつてないかのよくな国王が最悪の言葉を放つてくれる。

「ソナチネはそなたに用があるわつだ」

何、私のことは気にするな、と人の良さそうな暖かい笑みを浮かべておっしゃつてくれる国王に殺意を覚えながら、鈍いながらも精一杯頭も働かせ言い訳を考える。

（こんな大勢の前で何を言えと…。ええとこないだみたいに趣味をきくとか？ いやわざわざここに来てまでやることでも。あと他に用事…まさか浮気について？そんな他の人もいるのに！ なんどう用事つて。何かあつたかな…）

あるだろう大きな用事が。周囲の目にはそんな思いが込められていたのだがソナチネに無言の訴えは通じない。

しづれを切らしたのか、他の思惑があるのか、一向に何も言おうとしないソナチネの目前にヴィーデが来る。彼女の両手をとつて己のもので包み込んだ。灰紫の瞳が蒼い瞳を覗き込む。

「…ソナチネ様。私に会いにあなた様が来て下さったということは、少しは希望を持つてもかまわないということでしょうか。私は決して完全な人間ではありません。ですが、国を守りたい、良くしていきたいという想いに嘘いつわりではないのです。どうか、あなた様の隣に立ち、支えていくことをお許し願えませんか…？」

熱い眼差しで熱心に語るヴィードを前に、ようやく鈍いソナチネが悟る。

(やういえ…こないだも似たようなことを言われたような。あれ?)

先日、一緒に王宮で乗馬をした後のやつとりがやつとソナチネの脳裏に蘇る。

(この状況…私はわざわざ彼に会いに来た…用事があつて。つまり)

端から見ると、球根…違つ求婚の返事をしに来たように映つてゐるのではないか。そこまで思い至つたソナチネは青褪める。そんな、何の心の準備もしていないので。

硬直した彼女の反応をしばらく見ていたヴィードは意外とあつさり手を放して、少し下がつた。

それが合図だつたかのよつて、今度は国王の声が響いた。

「どうするのだ? ソナチネ。彼で不足なら他の候補者もいるぞ!」

「どうということだ、とソナチネが国王の方を見ると、確かに彼の後ろには他の婿候補で最後まで残つていた面々が揃つている。

さらには、よくよく見ると国王が引き連れていた様々な人間たちの中にはマルカート伯を始めとした重臣たち、義兄、神官長までが顔を揃えている。そして彼女の後ろには魔術師長。

何故國の重鎮たちがここに居合わせるのか。

そもそも國王はここで一体何をしているのか。

そして・考えたくはないが、ここへ来させることにやら熱心だつ

たヘオン。

鈍い鈍いと言われ続けているソナチネだが、その時は直感が働いた。

（は、嵌められた…）

衆人環視の前で堂々と申し込むヴィードをおかしいと感じるべきだつた。もちろんそれでも遅いが。国王の退位まであと半月、なかなか態度をはつきりさせないソナチネに周囲が気を揉んでいることはわかつっていたが、こんな手に出でくるとは。

承知するにしても拒絶するにしても、国王や重臣たちの前でやれば引き返せない。受けるか断るか、それはソナチネしか決められないことだが、この状況からも周囲はきっと 本命・ヴィードを受け入れるのだと思っている。

（だれも彼もがその思惑をぶつけてくる…）

女王となれば、ずっとこの調子ではないのか。誰かの思惑に流され、自分の決断なんかどうかすらわからなくなる。悲しいことに、ヴィーデだってソナチネ自身を望んでいるのではない、その動機は高潔だが女王の夫の座を欲しがっているだけだ。

進退窮まつたソナチネは唇を噛む。

そこへ
。

王者の孤独の片鱗を味わうソナチネの視界にこの場の空氣を読まない闖入者が入ってきた。他の者は彼女に注目しているので背後から

来る存在に気付かない。

彼は場の空氣を読んでいないのではなく、そもそも完全に周りが見えてないらしい。何やら顔を突っ込まんばかりに分厚い書物を読みながら魔術院の反対方向より歩いてくる。器用なことだ。

しかし。

そこに舞い降りたのは神の啓示か、悪魔の入れ知恵か。

気付けばソナチネは叫んでいた。目を瞑つて、ひとさし指を勢いよく振り上げて。

「わ、わたしが選ぶのはつ あの人ですー！」

その指先の指す方向を、ソナチネを固唾を呑んで見守っていた全員が目を丸くして振り返る。ザザつと、その場にいる二十人以上の人間が振り返った気配で、本に夢中の彼もついに顔を上げた。

「へ？ なんだあ？」

今まさに自分の人生を力技で強引に変える災厄が降りかかったことを理解しない彼 レジェロはぽかんと口を開けた。

女騎士の選択（後書き）

次で「消えた王妃と白銀の騎士」は終わりです。
読んで下さってありがとうございました。

女王の誕生（前書き）

いよいよ、一田亮介です。

女王の誕生

30・女王の誕生

いつかの舞踏会でソナチネにダンスを申し込みすらしなかった幼馴染のレジエロは早々に婿候補から外されていた。本人も言った通り候補する気などなかつたので、彼にとつてはこの話は終わつたも同然だつた。だから、何も知らずに魔術院へ足を運んだのだ。

そして、ソナチネ同様レジエロにも拒否権はないようだ。気の毒に。

そして。

「とうとうこの日がやつてきたわね…」

あれから半月、今日は国王アレグロの退位式と女王ソナチネの即位式が立て続けに執り行われる。

国王の門出を祝い、新女王の誕生を寿ぐかのように、外には快晴の青空が広がつていた。

退位式というのは王国の歴史でも初めてのことなので、決まった手順というものがない。ただ、王冠を下ろせば済む話でもないので王宮の広い閲兵場では国民を集めて国王が何やら儀式を行つている。

「姉上…壯きそうです」

ソナチネとその姉は国王の退位式には臨席せず、直後に予定されている即位式のため王宮内にある控え室でその時を待つっていた。

「じつかりしなさい…。後悔しても遅いのよ」

服の上からでも分かるほど目立ち始めたお腹を抱えて、妹を叱咤する。

「うへ…重圧に押しつぶされそう」

この日のために用意された女王の衣装は分厚い緞子でできていて、非常に重い。スカートの中にはペチコートを何重にも重ねてあるのでさらに重量がかかる。その上頭には髪飾りと付け毛、耳と首、腕にも飾りを連ねている。それらは地味に肩を凝らせる。ただ、ソナチネの言つ重圧はそちらではない。

吐きそうだ。プレッシャーに負けて。

自分は耐えられるのだろうか。今、国王に向けられる国民の惜しむ声をきいていてもそう思つ。退位が広く国民へ公示されたのは半月前、もともと有能と呼び声高いアレグロは魔族の件もあり、人気が高かつた。彼の退位を誰もが惜しんでいた。

「殿下…。アレグロ様の退位式が無事終わったそうです」

部屋の外からマルカート伯が声をかける。

ソナチネは即位にあたり、形の上でアレグロの繼子となつてゐる。そこで一時的にだが彼女は王女となり、殿下と呼ばれる。

(殿下つて…それは)

自分ではなく王子だつた頃のアレグロの呼び名だ。それが今や己に向けられている。それだけではない。

「ソナチネ…慣れるまで時間がかかるだらうけど、呼ばれて後ろを振り返るようなベタな真似はしないでね…」

そうだ。今日の即位式が終われば今度は「陛下」と呼ばれる。後ろにアレグロがいるのでは、と振り返らずにいらっしゃるだらうか。

頃垂れるソナチネだが、廊下からマルカート伯が呼んでいる。打ち合わせは済んでいるのだからどうしたところのだろう。

「ひひひへ

案内された部屋にはアレグロ 今はもう陛下とも呼びかけられないが待っていた。

窓の外へと顔を向けていた彼だが、ゆっくりといきなりに顔を向けた。一瞬目に光るもののが見えたのは気のせい。

「ありがとう」

晴れやかに笑い、言ひ。その穏やかな様子に、不思議とソナチネの心も落ち着いていく。

「へい…アレグロ様」

「ありがとう、ソナチネ。君のおかげだ。私は…行くよ」

「…行つてしまわれるのですね」

「ああ。その前にお礼を言わなくては」と。よく決心してくれた

「…淋しいです。ずっと、アレグロ様を兄上のように思つていましたから」

「今は父上だ」

おどけて笑う。そういう顔をすると幼い頃の面影が蘇る。幼馴染の幸せそうな顔を見つめていたソナチネの、心が据わる。

「では父上様。最後に私のお願ひをきいていただけますか？」

「…なんだい」

「コトネ様を…幸せにしてあげてください」

「実を語りつと、昨日までここに来る勇気がわきませんでした。そうしたら出てきたんです…コトネ様からいただいた手紙が」

「あの方はこちらの字を読むことは最初からできましたが、書くことはできないようでした。文字を覚えるため熱心に学んでおられましたので、手紙を書くのも練習だつたのでしょうね」

「書いてある」とはとても他愛のないものです。陛下がうそ…いえ頻繁に訪ねてくるとか」

そう話しながら、窓の外へ遠い目を向ける。

「そうして初めて思い至りました…結局私たちはコトネ様に何を返せたのだろうと」

「コトネ様は国を救つてくださいました。まだ成人にも満たない少女だったのに。しかし、異世界に帰つてしまわれたコトネ様に我々は、何も恩返しができていない…」

「だから　我々はあなたを差し出します。」のペザント王国から救国の神子への報酬は、アレグロ様、あなたです」

そういうことですから、どうあってもアレグロ様はコトネ様を見つけ出し、幸せにしてあげなければならんんですよ そう言って、ソナチネは彼の目を見つめ、微笑んだ。

「 そういうよ」

かつての妹分から思いがけなく暖かいはなむけを寄せられたアレグロは堅く握った拳を胸にあてて誓つた。

そして、部屋を出ようとしたソナチネは最後に言った。

「コトネ様に伝言をお願いします。『帰るというがないので、どうか捨てないであげてください』、とソナチネが言つていたと」

返答はきかなかつた。

振り返ることなくソナチネは歩く。窓から差し込む光を浴びたその顔には先ほどまで見えた不安はなく、これから挑むものへの決意と勇気にも満ち溢れている。足取りも勇ましい。

この後は　　即位式の前に、まず結婚式だ。

彼女の顔は女王としては頼もしいが、式直前の花嫁のものではなかった。恐らく、結婚式の方は完全に頭にない。

そんな彼女の物語である。

* * *

その後のペザンテ王国の歴史書によると、ソナチネ女王の治世下では魔族との交流がさかんとなり魔術が発展する一方、女王の夫・レジエロの尽力で王国の経済も安定していた。経済が安定し、気候も穏やかな日々の続いたその期間は女王の黄金時代とも呼ばれている。

女王の誕生（後書き）

ここまでもお付き合って頂いたことに心から感謝いたします。
誤字・脱字やつじつまの心わないところがあつたとは思いますが。
暇つぶしゆつもお手汚しなつていただけ申し訳ござりません。

また、ノリと勢いだけの粗作ですので、いじ都合主義的展開をしております。

さて、一旦終了で完結ボタンを押すべきところですが、回収しきれていない複線を回収するために続きを書くことにしました。

ノリと勢いだけですので、満足なプロットがありません。そこまでまた終わりまできてから投稿させていただきます。

そこがわけですので、第一部・完として連載のままにしておきます。

ありがとうございました！

婚約者（仮）の憤慨（前書き）

話が戻ります。

もはや異世界トリップ関係ないです。

婚約者（仮）の憤慨

1・婚約者（仮）の憤慨

「なんつでこんなことになつてんだつ……」

ソナチネの逆プロポーズ（？）の直後、騒然としたその場はとりあえず国王アレグロによつて収められた。今は王宮の一室で国王、ソナチネ、レジエロ、神官長、魔術師長、副魔術師長、マルカート伯ともう一人ソナチネの知らない大臣らしき人、の8人で集まつている。

「『J...』めんなさい」

国の重鎮の揃う場所であることを忘れ、わめくレジエロに対しソナチネは俯いて謝ることしかできない。その顔は赤い。

「俺は言つたよな？　お前の邪魔はしないって。それでなんでもつ、お前が俺の邪魔をする！」

「邪魔つて…誰か好きな女性でもいたの？　それなら今からでも白紙に…」

心底申し訳なさそうな表情をしたソナチネに、うつと言葉を詰まらせる。

「まあまあ、我々もソナチネ様を追い詰め過ぎました。ここは一つ、お一人とも落ち着いて」

思惑が外れたはずのマルカート伯が、見かねて口を出す。

「いえ、レジュロの言つとおりです。のんきに歩いているものだから、つい、巻き込みたくなつて」

ひどい理由である。ソナチネ自身が選ばれた理由より、ぞんざいだ。

「おまつ、どんなだけ失礼なんだ！？」

わなわなと震えるレジュロは怒りのあまり、それ以上続けられない。湯気が出やうだ。

「レジュロ、そろそろ口を慎みたまえ。彼女は次期王位継承者だ」

無言でやつとりを見ていた国王がたしなめる。

レジュロは「お前が言うか！」と言わんばかりに睨み付けた。元遊び友達、微妙に遠慮がない。風采の上がらない青年が神の化身のような容姿の国王に楯突くので他の人々は目を見張っている。

そんなレジュロを見て、ますます眉を下げたソナチネが懇願する。

「ですが陛下、そういうことです。私が軽率だったのですから、先ほどの件はなかつたことに……」

「いいやー、これで良かつたのだ。ヴィーデには少々氣の毒な」とをしたが、きつとすぐに立ち直るだらう。そうだな？

最後の問いかけは副魔術師長・ピウに宛ててのものだつた。

「ああ？ 振られたことなんてなれやつだけど。でも、ビリでもいいや」

あたしは私的なことには立ち回らない主義だからさあ、と自分の栗色の三つ編みをいじりながらぼやく投げやりな上司の一人。先ほどまでは重要人物だったのにどんどんヴィーデの扱いが悪くなっている。

「それよりも！ ソナチネちゃんは本当はどうしたかったわけ？ あたしから見ても、ヴィーデは優秀だよ。袖にしていいんだ？」

20歳前後にしか見えない年齢不詳の魔女がソナチネに詰め寄る。なぜか今度は真剣だ。

「… それは後悔していないです。不思議と」

「… へえ。じゃ、」このつを選んだことは？

「それは… やつぱり軽率でした。レジュロの都合を少しも考えてなかつたです」

「ああ、それぐらいは思に至るか。でも、ソナチネちゃんは… こいつでいいんだ？」

師匠つ、と叫ぶのはレジュロ。魔術師長だけではなく、ピウとも懇意らしい。魔術師でもないくせに師匠と呼ばせてもらつてこいるのだらうが。

「つむつむ。今は黙んな。ほら」と

魔女が指で何やら文字を書くと、その途端「ふぐつ」と口を押され
るレジュロ。何か魔術でもかけられたのだろう。

これでますますいたまれなくなるのはソナチネの方だ。レジュロ
は何も悪くないのに。

「こいつのことは気にしなくていいよ。こいつのことだから」

で、とばかりに田で尋ねる。

「今こりこりで言つたですか？」

「もちろん。適当に決めたなんて皆信じじるとでも？」

吸い込まれそうな大きな紫色の瞳が、問う。

「レジュロには昔から……我が仮が言えるんです。何でも。それで、
つい

お前の頭の中では夫選びの基準＝我が仮が言えるかどうか、なのか。
勢いだけで生きるのもいい加減にしろ。

射殺しそうな目でレジュロが睨んでいる。まさか子供時代の延長の
ままの人間関係でいたことがこんな結果を生むとは。

「……レジュロは有能です、ヴィーデには悪いが私も推しましょう」

「その通りだ。彼は元々候補者だったのだから、別に支障はない

何故か国王と魔術師長が肯き合っている。

そこへ、これまで口を開かなかつた大臣らしき人物が口を開く。伯爵と同世代か少し上ぐらいだろう、短身でふくよかな腹部を持ち、綺麗に整えた口ひげがどことなくユーモラスな御仁だ。

「…」しかしとしてはスケルツィアンドが部署を離れるのは痛手なのだ

が

外見を裏切る重々しい声である。機嫌もあまり良くはない。
レジュロの上司なのだろうか。

「仕方がないでしょう。女王の夫というのは替えがきくものではありますせん」

諦めて差し出してください、トマールカート伯。表面から見ただけだが、反りが合わなさそうだ。

「悪いがレジュロ、君に拒否権はない。半月後、ソナチネの即位式の前に結婚式を執り行う。よろしいですね？」

これで話は终わりだ、とばかりに締めくくつた国王が見たのは一切発言をしなかつた神官長、前神官長があのような形で職を辞してから肩身の狭い神殿の長は、是と答えるのみだった。

婚約者（反）の讀誦（後書き）
(あく書き)

「この本で読んで下せりてあらがひいじれこま。

子供の遊び そのいち（前書き）

話がもつと戻ります。

子供の遊び やのいち

2・子供の遊び そのいち

「こんにちはっ！ ねえ、あなたなにしてるの？」

気が付くと、少し年少と思われる女の子が至近距離に立っていた。そんなに夢中で観察していたのだろうかと話しかけられた少年。こちらもまだ幼い。は驚きながらも訝しく思った。

少女は可愛らしい。陽光を弾き溶けるよつた白に輝きを放つ髪は銀、大きな瞳は蒼く好奇心に満ちており、生き生きとしている。いとけない小さな体はぼてぼてとしているが、それがいかにも子供らしく愛らしい。

着ている服は良家の歳のいかない女の子が纏つような上等の膝丈のワンピース、上に白いエプロンを掛けている。だが良家の子女にしては、笑顔をいっぱいに浮かべた顔も袖をまくつた腕もよく日に焼けている。

「べつに…観察」

思いがけず可愛い顔に出くわした少年は、不承ぶしじうながらも答える。

少年はやほじ特徴のない灰茶の髪と目、じゅうりも身なりは良い。そこから伸びる細い手足は青白いが。

少年の前にあるのは薔薇の木の枝、花のつかない時期のそれは葉が青々として美しいが、それだけだ。その上、棘がある。

「ふうん。 むもじひい？ それお花の木？」

「木を見てるんじゃない…ほら」

少年の指差すところには、何やら枝に茶色い塊がついている。虫の
せなぎだ。

「… なあに？ 」れ

大きな田を丸くして少女が見る。

「せなぎ。 ちゅうちゅうになるんだ」

「これが！？ ちゅうちゅう？ ひりひりひとつぶ？」

「ねー。 ぱりは棘があるからあんまり虫とかつかないんだ。 だけど
このちゅうちゅうぱりにこたなきをつける」と、逆に生き残れるよ
うにするんだって。 めずらしいちょうどよ」

自分が知ったばかりの知識を披露したくなるのは子供の性分だ、最
初は無愛想だった少年の顔が熱心に語ることで徐々に明るくなる。

「ふうん？ よくわかんない」

興味がないといつより、本気で理解が追いつかないようだ。 確かに
子供には少々難しい。

だが、その返答が気に入らなかつたのだらつ、少年は不機嫌になる。

「…あつわ。じゅ」

一方的に会話を打ち切り、そつまを向いてしまつ。が、さなぎが気がなるのか、その場を離れよつともしない。少女の存在を無視してしまおうとする。

「ねえねえ。じゃあどんなけよつけよになるの？　きじらっしらっ？」

ももいろだつたらいいなあ見たことないもの、と相手の様子を頼着せず勝手に話す少女。返答がなくとも氣にしていない。

「ノノねえさまがね、ちゅうちゅの羽のはえたお姫さまのおはなししてくれたの。そのお姫さまのはねはももいろだつたんですねって」

「…」

こちらの都合を考えずしゃべり続ける少女に、少年の我慢の限界が来る。と、意地の悪い思いつきが浮かぶ。

「さなぎの前のちゅうちゅは知つてゐる？」

「？　いもむじでしょ」

庭師が前におしえてくれたもん、と当然の顔で答える。

「…じや、わなぎに入つたあと、いもむじがどうなるかわからへ？」

少年の田舎見は少々あてが外れたが、まだ続いている。

「？」

大げさに首を傾げる少女の髪が、銀色の流れとなつてシャラリと揺

れる。

「こわいせりやの女でとかねやつんだ…エシローロー」。一度からだを全部とかしてからもう一回新しいかわいの姿に変えるんだって」

君の好きななちよ、うちはぜんぶそのドロドロだったものだよ、と得意顔で締めくくる。少女の顔が嫌悪で歪むのを見ようとする。蝶の羽が人間についていることを夢想するぐらいだ、期待通り悲鳴くらいは上げてくれるだらう。

「！　すつゞーい！」の中のことがわかるの！？　見えないの

意に反して、少女の顔はこれまで以上に嬉しそうに輝いていた。大きな瞳からはキラキラとした光が零れんばかり。

「おにこちゃんはすこ二ね。なんでもしつてるんだー。」

屈託ない笑顔でそう言われると悪い気はしない。

褒められたことで機嫌の良くなつた少年は、それからしばらく覚えたての知識を少女相手に語つた。先日、遠い親戚から送られたばかりの百科事典で読んだ知識だ。

薔薇の植え込みの前で座り込み、2人で話す。少女はなんでも感心し、二二二二と笑っている。理解しているかどうかは別として。

小一時間ほど経つただろうか。焦った声が聞こえた。

「ネネー！ ピリピリするのー！」

「あー、ノノリちゃんだ。かえんなあや」

少女は立ち上がり、声に心えた。

「おねえさまー、すぐ行きますー！」

くぬつと振り返り、二三歳の少年に笑いかける。

「おこひちゃん、ありがとう。じやあね

「う、うん。じやあ

少し淋しく思いながら、挨拶を返した。
たつ、そのまま駆けていこうとした少女だが、すぐに引き戻して
きた。

座つたままの少年の前に立つと、ワンピースの裾を両手で少し上げ
た。

「おはつこおめにかかります。わたくしのなはソナチネでござこま
す

軽く膝を曲げ、淑女のような挨拶をしてみせた。驚いた少年も慌て
て立ち上がり、礼を返す。

「僕はレジロロ・スケルツァンドです。どうぞお見知りおきを

自分たちの肩に王国の将来が掛かっていることなどとは露ほども知らない幼い2人はこうして出会った。

ソナチネ6歳、レジエロ7歳の頃である。

ちなみにこの場所は王宮の中、ブリッランテ宮の庭園の隅だ。

どうして王室の私的な場所で子供2人が自由に過ごしていられるのか。ソナチネもレジエロも王子・アレグロの遊び相手にと王宮に連れて来られている。ソナチネは王子の婚約者である姉のコネ、レジエロはただ単に「歳が近いから」だ。

が、2人ともものの見事に他の遊び相手の少年たちから弾かれている。レジエロの場合はこの日初めて王宮に来たソナチネよりも以前から。

パツとしない上に、身体能力の劣るレジエロは走って行ってしまう王子たちには付いていけず、なかなか仲間に入れてもらえない。一人王子の部屋に残された彼は、つい外へ出てしまい、庭で珍しい物を見つけてそのまま見入っていたのだ。

ソナチネも大方同じような理由である。彼女の場合は部屋で王妃（アレグロの母）と話している姉の側にいたのだが、飽きてこつそり抜け出したのだ。王子の部屋と王妃の部屋は子供の足では決して近くはない。どこをどう通つて来たのか、植え込みに見入っている変な男の子をたまたま見つけてしまい、声を掛けたのである。

子供の遊び やのこち（後書き）

園芸と昆虫に関する知識はあります。適当です。

ここまで読んでくださいありがとうございました。

侍女の失踪

3・侍女の失踪

国王・重臣を含めた8人の談合が終わった後、ソナチネはそのまま王宮に留め置かれた。花婿が決まつた以上、本格的に即位への準備が始まるそうだ。何の心構えもない状態で生家を離れることになってしまった。

「もう家に帰つてはならないのですか…」

さすがに寂寥感がわく。半月前までは家を出て騎士団の宿舎で暮らしていたとはいっても、生まれ育つた場所だ。この先のことも相まって、不安になる。

「お気持ちはわかりますが、これからは王宮がソナチネ様のお住まいとなります。お慣れ下さい」

先ほどの部屋とは別の場所、かつてよく通つたブリッランテ宮の一室でお茶を淹れてもらつてている。

お茶を淹れてくれているのは、王太后の側近と目される侍女長・グラツィオーソ伯爵夫人だ。自らお茶を淹れるような立場ではないのだが、それが趣味とのこと。

「ソナチネ様さえよろしければ、王太后様がお会いになりたいそうですよ」

いかがいたしましたう、とお茶を差し出しながら問つてくる。たい

そう良い花の香りがする。

「やうですか…」

正直、気が重い。これから息子を異世界へと旅立たせよつとする母だ、何を考えているのか想像がつかない。どうしよう、とお茶に口をつけた途端。

「ソナチネ様ーつ！ 大変です」

いきなり扉を開けてトオング飛び込んできた。午前中の再現か。ごふつとお約束の反応をするソナチネ。せつかくのお茶が、だいなしだ。

「何です？ 騒々しい、トオング

グラツィオーソ夫人の言葉はそれほど強くなかったのだが、はいっ、とトオングが背筋を伸ばして立ち竦む。今まで見られなかつた光景だ。夫人はそんなに恐ろしいのか。

「…今度は何が大変なの？」

一体今度は何を訴えに来たのか。いやそれよりも部屋の前まで物音一つ立てずにどうやって来たのが気になる。息を切らしているのに、走る音などの何の前触れもなかつた。

「見苦しいところをお見せして、大変失礼いたしました。わたくし、ソナチネ様が居をお移しになるので、あなた様のご衣裳や道具等を荷造りさせていただくため公爵邸へと参りました。ですが、これを見つけ出し急ぎお持ちした次第でござります」

そつぱりて、頭を下げるそのままソナチネの元へ手に持った物を捧げながら寄る。トオンとてやればできるひじいが、まだるつこじいことこの上ない。

「何?」

「ソナチネ様。公爵邸にヘオンがおりませんでした。代わりにこれが

「一.」

急いで渡された物 ソナチネ宛の書簡に目を通す。

「職を辞す! ? どうして! ?

最後まで読んだところ、先ほど魔術院で一件にヘオンが絡んでいることを謝っていた。手紙によると、トオンはヘオンによつて魔術院におびき出されたので何も知らないこと、企んだのはヘオン一人で国王や他の人々はそれに乗つただけのこと、ということだった。主君であるソナチネを裏切つたことの責任は重大、侍女の職を返上する、と。

「そんな……だからって辞めなくても」

確かに計画的に嵌められたことは、気分の良いものではない。だが、なかなか夫を決められなかつたのはソナチネ自身に原因があることで、周りが焦るのも仕方のないことだ。

それに。

「あれぐらいされなければ、最後まで決まらなかつたかも…」

それでもアレグロは行くだろう。そうなれば、今度は女王の夫の座を巡り、表立つた争いが起つたかもしれない。そんな自体は死んでも嫌だ。

「トオン、ヘオンの行き先はわからない？」

「はい。ヘオンは行き先を言わなかつたそうです。ですが…」

「心当たりが？」

「はい。ヘオンの行くところは一つしかないと思われます。恐らく実家でしじう」

「やう。じゃ…」

今すぐ行きましょう、そう言いかけてグラツィオーソ夫人の方を見る。そういえば、王太后に（事実上）呼ばれていなかつたか。

「…ソナチネ様、王太后にはソナチネ様はお具合が優れないと、申し上げておきますわ」

それまで黙つて成り行きを見ていたグラツィオーソ夫人が頷いた。侍女一人を真剣に案じるソナチネに何かを感じたのか。

ありがとうございます、そう言ってトオンと二人部屋を出る。

だが。

護衛を引き連れて訪ねたヘオンの実家では、本人はおらず連絡も来ていない、どこか退廃的な風情の母親が言った。

「一体どこへ……」

途方にくれるソナチネの横で、いつもの軽い持ち味を失ったトオンが呟いていた。

手を尽くして探してもらったのだが、その行方は杳として知れなかつた。

侍女の失踪（後書き）

いいままで読んで下さりて感謝します。

財務大臣の幸運

4、財務大臣の幸運

一方、何の前触れもなく理不尽な人生をつきつけられる」ととなつたレジエ口は。

「…何故あのようなことをおっしゃつたのです？」

談合の後、王宮の廊下を上司である財務大臣・口ひげの人・と2人歩きながら問うた。レジエ口も背の高い部類ではないが、前を歩く大臣の頭は彼よりも低い。

「ふん？ 何のことだ？」

大臣 ドラン・クイッロは貴族の生まれではない。今は男爵家の婿養子として入つてゐるが、元は平民だった。平民が行政庁の長となることを阻む法は先王の代より撤廃されたのだが。

「閣下。『まかさないで下さい』

喰えない親父であることは重々承知しているが、それでも言わずにいられない。

「…閣下があのよくなおつしゃり方をすれば、マルカート伯が私を推すと踏んでいましたね？」

「ああ、そのことが。しかしよくやつた！ いやあまさか、私の部

下から王室の一員が出てゆつとせ、思ひもせなんだ

案の定、ひげ親父はしたり顔で振り向く。名譽なことだ、と。

「…め、私の自由意志は？」

「何が自由意志だ。女王を妻とできるのだぞ？ それにソナチネ様は…」

「今はそういう話をしているのではありません。私が入庁した時にことをお忘れで？」

「はて何だつたか。やたら自信過剰な若い者があるなと思ったが」

「…王室の一員となれば行政の長にはなれません」

「そうだつたか？ しかし女王の夫としてそれなりに発言を重視されるではないか。意見を言つのは自由だぞ。どんどん提言するがいい

「もういいです…」

この御仁には何を言つても無駄だ。前評判ではヴィードに決まりかけていたソナチネの夫の地位が子飼いの者に何の拍子か転がり落ちてきたのだ。その上何が起きても大臣自身には痛くも痒くもないのだから。

何かあつたらできる限り、目の前で跳ね飛びそつなほど軽い足取りの男を道連れにしてやろうと密かに決心する。丸い体が鞠のように見えるので蹴り飛ばしたい。

「ま、私の地位をお前にやれんのは残念だがな」

決心したところで、こんな言葉が飛んできた。
やつぱりわかつてんじゃねえか。と、かつて生意氣にも財務庁で働き始めた新米であつたにもかかわらず、大臣の目の前で「私はあなたの後継者となつてみせます」とほざいた青年は思った。

* * *

(ソナチネの災難を傍観してゐる場合じやなかつたな)

自宅に帰ると、予想通り両親や長兄夫婦に囲まれた。王宮も手を回すのが早い。

ソナチネほど高貴な家柄ではない子爵家では、それこそ青天の霹靂だろう。特に昔から末弟を軽んじていた長兄は慌てふためいている。

「一体どうこいつことだ！　何故お前が王室に婿入りすることになる！」

「…兄さん。お忘れでしょうか？　俺はもともと候補に、と打診をいただいてましたよ」

認めているわけではないが、お前のような風采の上がらない男が何故と言わんばかりに詰め寄られると、反発心がわく。

「だが本命がいたのではなかつたのか！　お前は辞退したはずだろ

ほつといでぐださー」と言おうとした弟だがそこへ母親が割って入った。心を鎮めてくれるような、穏やかな声だ。

「レガード。もうおやめなれー」

白いものが混じり始めた焦げ茶の髪と緑色の瞳の、ふくよかな貴婦人である。

「レジエロ、突然の話でさぞ迷惑つたことでしょうへ。今日はもうお休みなさい。明日話しましょー。ね?」

横で父も訳知り顔で肯いている。なぜ。

「… それでは、失礼します」

そうして、自室へ引っ込んだ。

(…まずい時にまずいことにひらく居合わせた、か。)

あの時あの場所にいなければ、こんなことには。レジエロは呼ばれてもいなかつたのに。他人事としていたのが仇となつた。知つていれば決して近づかなかつた。

(何なんだうひ、この引きの良ひ。いや、悪さ)

先日、ソナチネが仕事部屋へ押しかけてきたのも恐らく、自分が丁

度田の前を通りかかったのを見たからだらう。あの時話などしなければ、彼のことなど忘れていたかもしれない。

それに。

（あん時、コトネ様のことを知らぬふりを通していればなあ……。）

そう、一度王宮から姿を消したコトネを、偶然馴染みの大衆食堂が臨時休業だったために違う食堂へ行つたことで発見したのはレジエロである。そ知らぬ顔で見逃していれば、まわりまわって国王の阿呆が退位しようなどということにならなかつたかもしれない。

（それでも『なんでも我が呂が言える』だと!?　あいつは自分の我が呂で俺の人生変える氣か?）

ああ、返すがえすも子供時代の自分が愚かで憎い。いつも気が付いたら彼女の調子に持ち込まれてしまふ呼吸が身に付いている。今だつて特に想い人もいない。結局、振り回されるような予感がひしひしと感じている。

寝台に突つ伏したレジエロは頭を抱えて自分の弱腰を呪つた。他の人間相手ならいくらでも突つかれるのが身上だが、なぜだかソナチネにだけはできない彼だった。

財務大臣の幸運（後書き）

いいまで読んで下さつて感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5445z/>

消えた王妃と白銀の騎士

2011年12月27日22時11分発行